

第二章

緑丘の創立

—— 渡辺龍聖校長期

第一節 開校

第一回入学生

商品陳列館や図書館の建設工事がつづくなか、一九一一年（明治四四）年五月五日、七二名の入学者を迎えて「宣誓式」がおこなわれ、以後、この日が「開校記念日」とされた。渡辺龍聖校長は、「男の節句なる端午たんごの当日に、第一回生として入学し、本校の長男として生れたるは最も祝福すべき事なり、本校の名声の為に勤勉し、誓つて総領の甚六たる勿なほれ」（「高商評判記」『小樽新聞』、一九二二年二月一九日）と訓戒したという。五月六日の『北海タイムス』は、「尊商の生徒には、実業学校の通弊たる奢侈浮華の悪習に感染せず、飽あま迄北海健児的気魄を存し、堅実なる尊商の校風を樹立せん事を囑望する」と記した。

翌六日から授業がはじまった。「教室の配備は第一教室から第九教室、それに特殊の商業実践室、商品実験室、化学室、簿記教室、珠算教室、習字教室其他の幾室かに分れてゐる」が、初年度のため「其の三分の一も使用してない」（同、二月三日）状況である。商品実験室や理化学室は、階段教室となっていた。ラッパが授業の合図で、「軍人であつた須貝重喜君と松永喜作君の二名の巡視が採用されて、交互に吹いていた、これは一年半続いた」（松田新「開校当時の思ひ出」『緑丘』第三七・三二八号、一九五一年四月一五日）。

七月五日、小樽・札幌の関係者を集めて、商品実験室を会場に、授業披露式がおこなわれた。招待した来賓の数が生徒よりも多いほどであつた。龍岡小樽区長は祝辞で、「本校は市街を離る数町、地高燥にして四隣幽邃ゆうすい、湾内の風光眼下に展開し、大小の船舶の出入一望の下に収め得べく、其の校舎は輪奐りんてん壯麗、規模広大、総ての構造重々しきに適かなひ」（松田新「開校当時の思ひ出」と述べた。式後、剣道・柔道の試合があり、相撲の取組もおこなわれた。正式の

開校記念式は一九一三年一〇月に予定されていたが、延期となり、そのまま実施されないうで終わった。

開校直後から、いわゆる名士による課外講演が頻繁になされている。すでに触れた沢柳政太郎東北帝国大学総長以外にも、七月一八日には東京高等師範学校校長嘉納治五郎が来校している。渡辺校長のかつての上司にあたる嘉納は、「特殊の色彩を有する商業家として、高遠なる理想を把持し、完全なる人格を具備する卒業生の輩出せん事を」〔小樽新聞〕、一九一二年七月二日と求めた。また、「小豆王^{あずき}」と呼ばれた小樽区の衆議院議員高橋直治は、六月二六日、「商業講話」と題して一時間半の講義をしている。「相場論より説き起して、商売取引の實際に及ぼし、米穀其他の一般商品より、殊に本道主要生産品の消流実況を語りて、諸生に商業上の概念を起せしめ」〔北海タイムス〕、一九一二年六月三日た。

授業開始が遅れたため、第一年度の夏休みは八月一日から九月一〇日までと変則的になった。八月二四日、皇太子の北海道巡啓の一環として、創立したばかりの小樽高商への行啓があった。急遽、仮整備した商品標本室などを視察している。そこには、「主として各地方より蒐集せる本道の特産品及び之れに付随せる統計表等」〔小樽新聞〕、八月五日が並べられていた。

冬休みは暖房設備未整備のためあつてだろう、一二月二五日から一月三二日までと長く、第三学期は二月一日から三月三一日までとなった。第二学年に進級となったのは六三名であり、九名が脱落した。第二回の入学試験は三月二一日からおこなわれ、七二名が入学した。第二年度目の授業は四月一日からはじまった。

授業料など

授業料は二五円（一九一五年入学者から三〇円となり、その後も値上がりする）で、三期に分けて納入する。学費に関しては、一九一四（大正三）年一月二二日の『大阪毎日新聞』掲載の泉松閣主人「北海道みやげ」に次の

ような記述がある。

一 授業料、校友会費、制服類、教科書参考書等在学三ヶ年間にて約二百十余円

二 前項の諸費を除き、賄費、学用品及び小遣、諸雑費等の日常費月額凡そ十三四円（およ）（尤も修学旅行費等は此内に含まず）、要するに小樽高商にては斯の如く割合に低額で高等専門の教育を受け得らるゝのみならず、多数の学生中、学資困難の者は、品行学術共に優良生には銓衡委員の銓議を経て学資の一部を補助するの道あり、又世間の篤志家より奨学金を寄付されたるものあり

特待生の制度があり、各学年二名程度の成績優秀者が選ばれた。卒業後、実業学校の教職につくことを約束した者も、授業料が免除された（二か年間の教職従事の義務がある）。奨学金に類するものとして、東京の実業家今村繁三より「学業品行優良ニシテ、将来成業ノ見込アリ、且ツ学資困難ナル者」（『小樽高等商業学校一覽』）に、毎月五〇円の学資補助があった。今村は渡辺校長夫人の実兄にあたる。また、一九一九年、小樽区の香村英太郎から年千円（一〇年間）が奨学資金として提供された。

『小樽新聞』『統高商評判記』にも、「学生一名の月額経費二十円」（三年六月二日）とある。一九二二（明治四五）年に赴任となつたばかりの苦米地英俊の当初の年俸は七〇〇円である。またこの少し前、朝日新聞の校正係として家族数人を抱えていた石川啄木の月給は、高商の授業料と同じ二五円だった。「割合に低額で高等専門の教育を受け得らる」とはいえ、寄宿舎に入つても、保護者の父兄らは教科書代などや「日常費」も含めると月に二〇円近い仕送りしなければならず、これは実際にはかなりの負担だったといえる。しかも当時の小樽は物価が高かつたといふ。「北海道みやげ」は、「苦学生」はアルバイトをしたり、「市中の特志家の補助」を受けていると紹介する。

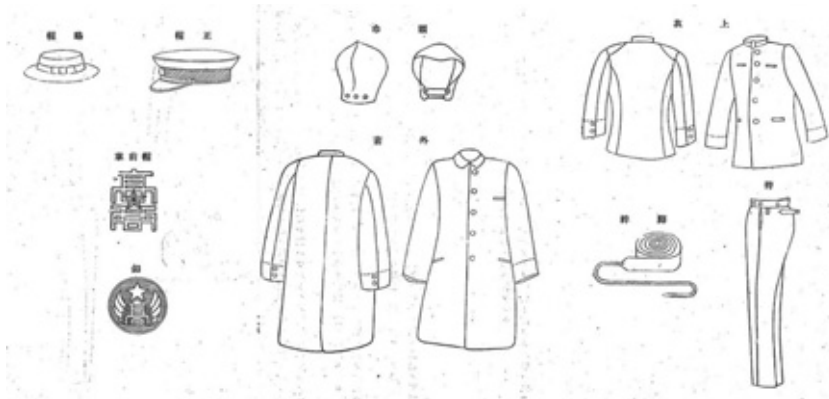
「紳士たれ」という校長の呼びかけに照応して、次のような「生徒心得綱領」が掲げられていた（『小樽高等商業学校一覽』）。

- 一、校規ヲ遵守シ、師長ヲ尊敬シ、学友ヲ親愛スヘシ
- 一、常ニ学業ヲ励ミ、立身報國ノ基ヲ建ツヘシ
- 一、礼讓ヲ守リ、信義ヲ厚クシ、質素勤勉ヲ旨トスヘシ
- 一、居常自ラヲ重ンシ、品行ヲ慎ムヘシ
- 一、体力ヲ鍊磨シ、身心ノ健全快活ヲ計ルヘシ

小樽高商の場合、日常の勉学・生活に関する規則はこの「生徒心得綱領」のみであった。他校では、たとえば「喫煙飲酒ハ生徒自ラ制シテ、其ノ悪習ニ陥ラサランコトヲ要ス」「校舎内ニ在リテハ授業中ハ勿論、放課中ト雖モ静肅ヲ旨トシ、苟モ喧噪ノ行為アルヘカラス。始業時限ニハ遲滞ナク教室ニ入り、所定ノ席ニ就クヘシ、若シ遲参シタルトキハ受持教官ノ指揮ヲ受クルコトヲ要ス」（『長崎高等商業学校一覽』、一九二二年度）のように、かなり厳格・詳細に規定されていた。

各学年は四〇名程度のクラスに分けられ、各組に組長と副組長がおかれた。これらの選定は、「其組生徒中ヨリ通シテ五名ノ候補者ヲ選挙シ、当選者ライロハ順ヲ以テ其姓名ノミ学校長ニ報告シ、学校長ハ右候補者中ヨリ更ニ各一名ヲ選定シ、之ヲ命ス」というものであった。組長の任務は、学校側の指示の伝達のほか、「教室内ノ秩序及清潔ニ注意スルコト」となっていた。

学生は、制服の着用が義務づけられたが、実際には和服での登校も認められていたようである。制服と制帽は、



制服・制帽・徽章

上図のようである。制帽には「高商」という文字の真ん中に星印の徽章が、制服のボタンにも星印が配された。また、制服の襟章として「本科 生ハ右ニP字、左ニC字（径五分）ヲ付ス」とされた（『小樽高等商業学校一覽』）。

校内の事務分掌

校内の事務は、教務・監生・庶務会計の三部と、図書・商品の二館に分かれていた。教務・監生部には主事を、各館には主幹をおき、いずれも教授のなから校長が任命した。一九一七（大正六）年の時点で見ると、教務部主事は坂本陶一、監生部主事は中村和之雄わしおで生徒監を兼ねる。図書館主幹は井浦仙太郎、商品館主幹は志摩清一郎となっていた。庶務会計部は庶務係と会計係に分かれ、各主任をおき、書記のなから任命された（庶務係主任は西尾広、会計係主任は三浦美平）。教務部の事務分掌は現在のものに近い。

監生部には、各寄宿舎の舎監の教官と学校医による委員会がおかれた。所管の事務は、次のように寄宿舎の管理が中心となっている（『小樽高等商業学校一覽』）。

- 一、生徒ノ監督、訓育、管理及賞罰ニ関スル件

一、生徒ノ入舎、退舎、宿所、旅行、帰省等ニ関スル件

一、生徒ノ身元、勤惰並ニ進退ニ関スル件

一、生徒ノ学資補給ニ関スル件

一、寄宿舎ノ衛生、警備取締ニ関スル件

一、舎費収支監督ニ監スル件

一、賄方ノ傭罷監督ニ関スル件

一、寄宿舎ノ出入商人ニ関スル件

一、生徒ノ疾病治療ニ関スル件

一、生徒身体検査及学校衛生ニ関スル件

一、生徒警備隊ニ関スル件

一、寄宿舎ニ属スル一切ノ事項

一七年の時点で、四名の書記と九名の雇が校内の事務全般をまかっていた。

「生徒気質」

開校から九か月後の一九一二年二月、『小樽新聞』は「高商評判記」を連載する。その二回目「生徒気質」(二月九日)には、次のようにある。

出身学校を尋ねると中学が四十七名、商業が二十五名、学校より学校に直ぐ連結された人も固^{もと}より少なからね

ど、実世間の競争場裡を潜つて来た人も亦鮮すくなくない——満州に就職し、樺太に教鞭を執り、別子銅山の事業に参じた夫々の生活、甲種商業学校教諭、税関官吏、新聞社員たりし各自の経歴、数ふればまだあらう、嘗て高等学校、医学専門、高等師範或は慶応義塾に学籍を置いた人もある、リフアインドの紳士型もあれば、粗彫りの純学生もあると云つたやうな十人十色。

出身地も全国からだった。五月末の最初の全校茶話会での自己紹介では、「椅子に起上つて」「此の黒袴こそは土佐健児の特徴」と昂然たるあり、「吾こそは駿河国……」と謡が、りにヤツて退るあり、危な気なしのイングリツシユで自らを紹介する人もあつた」(同)。「小樽毎夕新聞」掲載の「高商校風と学生」(斬麿生寄稿、一九二二年二月一九日、本学図書館所蔵のスクラップ・ブックによる)には、「経歴、思潮、抱負、志望等も頗る多種多様であるらしい、宛然えんぜん札幌農学校初期の学生氣質に酷似して居る」とある。

中学校や甲種商業学校を卒業して小樽高商に入学する年齢は一七歳が最低であるが、実際の年齢は、一九一三年九月時点で、三年生の平均は二三歳五カ月、二年生は二二年三カ月、一年生は二〇年三カ月である。最少は一年生に一七歳六カ月、最年長も一年生で二六歳四カ月の学生がいる(『小樽高等商業学校一覽』)。これは、長崎高等商業学校の場合でも、ほぼ同様である。一九二〇年六月の時点でも、ほぼ同じ傾向である。無試験の推薦入学者を中心に、「学校より学校に直ぐ連結された」といういわゆる現役の学生もいるものの、かなりの割合で入学までに二年から三年程度経過していると推測される。第一期生は前述のように「実世間の競争場裡を潜つて来た」学生が珍しくなかつただらうが、数年を経て落ち着いたころの状況は受験競争の激化による入学難、すなわち浪人生活を経ての入学が多かつたといえよう。

年齢幅の広さや学歴・職歴の多様さなどもあり、また中学校出身者と商業学校出身者の学力と氣質の違いもあり、

当初はぎごちなさがあったが、次第に第一回入学生の結果は固まっていた。「高商評判記」は、「二学期を迎へ、其の終りも近いて校友会組織を見たる時に至りては、打つて一団と成れるが如き「協同」を見、高商生の意気を的確に発揚するまでとなつた」(二年二月九日)、「各人の性向は兎もあれ、第一回生と云ふ同じ自覚に、ピリグリムフアザーの意気を以て前路を開拓しつ、ある小樽高商の花と果と香とは、培ふ今に於て冥々裡に養はれてゐる」(二月二日)と記している。

そうした一体感を高める一方で、勉学生生活のスタイルの相異も明らかになつてきた。「高商評判記」によれば、「其方の一団は、学生時代享楽主義の可否を論じ合ふと、此方のネオロマンチストは新らしい小説の批評を戦はず、校風を奈何せんと熟してゐる硬分子のある一方には、不関焉と図書室に籠るを仕事とする勉強家も居る」(二月三日)という具合である。また、「高商校風と学生」では「曰く、所謂高商式ハイカラの典型なる国松式、ノ武士的なる国士的なる大西氏、温厚篤実審然、学者的なる八木式、之れなん小樽高商学生三典型なり」(一九二二年二月二日)と類型化する。それぞれ国松豊、大西猪之介、八木又三という三教員のスタイルに当てはめる。たとえば、「大西式」の場合は、「演説会は何時でも此の組の独占、政治論よし、文学論よし、法理論よし、宛然明治初年の学生その儘、会社銀行は小僧上がりの行くべき所、吾人は須べからく総理大臣乃至は大蔵、外務の椅子に倚る能はずんば、天下国家の選良となつて議院に呼号すべし」(二月三日)などと放言する元氣者である。

もう一度「高商評判記」の観察に戻れば、小樽区民に高商生は二つのタイプとして映っていた。一つは「ケープ裾長に引纏ひ、オヴァコートに制服を包んだ洗練の容姿」というスマート派であり、もう一つは「一本歯の足駄を引摺たり、様袴の裂けたるに太腿の顔を見せ、厳寒堪へ難きに至るも、矢張り夏服で済ましてゐるのや、嘗て靴を磨いた事のないと云ふ蛮連」(二年二月九日)というパンカラ派である。

「マアキユリ山」・地獄坂

開校から半年後、『小樽毎夕新聞』に連載（四回）された「高商校風と学生」は、「落葉松の大森林と、皚々たる雪に粧はれた一脈の山を背景にして立てる、彼のグリーンカラーあざやかな壮大な建築物、大講堂と云ひ、商品陳列館と云ひ、図書館と云ひ、流石は本道唯一の高等商業学校たるに恥ぢない、実に幾年ならずして、本邦財界の枢星は此の校門より出る事であらう」（二十一年二月一九日）と書きだされる（「大講堂」とは、本館を指すと思われる）。その二か月後の連載「高商評判記」（『小樽新聞』、二二回）の第一回目は、「高商の位置」（二十二年二月一八日）を次のように描く。

花園公園のグラウンドに立つて、小樽の背面を囲む山続きに眸を放てば、其の真正面に当る中腹に広壯なる建築物——軟かい緑の色に塗られたるを見る、これぞ我小樽高等商業学校の外面、雨蕭条と降り濺いでは雨に打煙り、濃霧深く立單むる日は濛裡に没了し、雪チラホラすれば細い白縞に見え隠れする、若し夫れ水天宮山に上つて眺むれば、「アンナ高い所に」と誰しも眼を睜るくらゐ後送りする、小樽では最高に位置して、宛然、俗臭満てるこの市街に君臨の権威を示し、塵寰を超越したといふ態度、……煉瓦建なる商品陳列館の赭き、それに続いて図書館の緑が校庭を囲み、色彩と形体と調和の美を成して公園より見る単調と異なる



ヘルメスの杖

高商建設時、その所在する場所は「天狗山麓」と通称されていたが、開校とともに「マアキユリ山」と呼ばれるようになった。小樽人は、ここにギリシャ・ローマ神話に由来する商業の神「マーキュ

リー」(「ヘルメス」)が舞い降り、小樽に経済的な繁栄をもたらしてくれると期待を寄せたのである。本館中央の屋根上には「ヘルメスの杖」と呼ばれるシンボルが立てられていた(なお、東京高商・神戸高商の校章も「マーキュリー」である)。ただし、高商創立当初の「マアキュリ山」という呼称は定着せず、小樽区の午砲所があることから「ドン山」と呼ばれることが多くなった。

稲穂小学校上の通称「玉の井坂」は、小樽高商の開校直後から「地獄坂」と呼ばれるようになった。それは、学生・教職員の難儀の叫びから生れたものだった。「通路は急勾配の為め、職員生徒の困難甚しく、生徒等は地獄坂と通称するに至れり」と、一九一三年七月一六日の『小樽新聞』の記事は伝える。当時の地獄坂は、「ひどい荒れ坂だった」(松田新「開校当時の思ひ出」)。

それに先立ち、「高商評判記」(二年二月二八日)には、「げに地獄坂こそは、夏に冬に通学生の悩む所である、一樹の蔽おほふなく、一簾れんの寄るなき通路だから、三伏烈日の直射する時は、縁かぢ下りの略帽を以てしても、得堪へぬ熱汗しと流れ、……素雪玄冬の季に入ると、振返る公園のグラウンドが大理石の白盤のごと清らかに、先頭に立つ登校者が時として一歩々々堆雪を漕ぎ分けて進み、後から同じ一歩々々を辿る、外気の冷と身内の熱の混惑に一苦しみするの常」とある。一三年五月一二日の『小樽新聞』は、東京高等商業学校同窓会小樽支部幹事の尽力で桜の木を植えることになったとして、「明春より花



地獄坂

の玉の井坂を現出するならん」と報じたが、地獄坂の名称は定着して今日に至る。

学生たちは、「行かうか」ときわ、帰らうか寄宿、茲が思案の地獄坂」（松田「開校当時の思ひ出」と歌っていた。「ときわ」とは「妙見河畔の肉屋」である。

一九一八年刊の『視察遊覧 小樽案内』によれば、「俗称津軽街と称する高地は高等商業学校と庁立小樽商業学校の設立されてからは、雑草茂れる同方面は忽ち人家櫛比して、今では殆ど昔日の面影を止めぬやうになつた」という。

「新しき気分」

一九二二（明治四五）年五月五日、商品陳列館や図書館をはじめとする付属建物もほぼ完成し、創立一年間の労苦と達成感に対する歓喜が、春の到来とともに噴出したかのように、開校記念日が盛大に祝われた。「正門前の縁門は最も美事に建てられ、万国旗その上に翩翩たるあり、玄関に向ふ左手には既に相撲の土俵築かれ、校舎前庭には幾多の作物には商神あり、自動車あり」（『小樽新聞』、五月六日）という装飾ぶりである。表玄関前の「商神」は学生の手作りで、「呉服店の借物らしい婦人々形に純白の洋装を施し、肩から羽を生やしたのはい、が、ヴェールを被らせたのは如何にも高標な女神である」（同、五月七日）と評された。

祝賀式につづく講演会では、着任早々の木村善太郎と大西猪之介が登壇した。なかでも「新しき気分」と題した大西の講演は、その後の「大西神話」と呼ぶべきものを生み出す熱気と気迫に満ちており、『小樽新聞』も一回にわたってその講演録を掲載するほどだった。「過去一年間、我校の中に溢れた開拓者の精神、新しい気分と云ふものに再び刺戟を与へ」たいという意図でなされたこの講演の最後は、次のように結ばれた（『小樽新聞』、一九二二年五月八日）。



『小樽新聞』1912.5.6

諸君自身が此新日本建設者たるの使命を尽し得るに至らん事は、やがて本校創立の意義の達せらるゝ、所以^{ゆゑ}なるが故に、且又諸君が此使命を尽し得ると否とは、諸君が其の心の底の底まで此バイオニアのスピリット、此新しい気分を有するや否やにあると信するが故に、更に教育は全人格と全人格との接触であつて、私自らは諸君の中から只の一人たりとも私の所謂新しい気分を有する人が出来れば、其れを以て教育としての我使命果たされたりとなすものなる

この「奔放な快弁に新入生の荒肝は先づ抜かれて、「新しい気分」は爾後の常用語とさへなつた」(続高商評判記『小樽新聞』、一九一四年五月二日)という。つづいて音楽演奏会・余興相撲などがにぎやかにおこなわれた。「上村の琵琶、松田のマンドリン、日野、加藤、前田河のヴァイオリンなど何れも素人離れのした確り^{しつぷか}したものであり、相撲では土俵入りもあつた。「苦米地講師が講道館三段の腕前を揮つて五人抜に努力したけれども、四人以上抜けず、相撲の手が脱線して足払ひが」(同、一九二三年五月七日)で一幕もあつた。英語担当の八木又三によって、祝賀の記念歌もつくられた。一番と六番の歌詞を引こう(同、五月五日)。

(一) マアキユリー
商神山の朝ぼらけ 残雪清く春浅み

一幅の画図前にして 俗塵遠き母校かな

(六) うしほ高鳴る荒海や 仰ぐ理想の北斗星

「進取、永劫」の影宿す 母校の幸を祝へかし

開校から一年ほど経った一九二二年五月三十一日の『東京朝日新聞』は、おそらく学校関係者だろう、「くさかた生」の「小樽より」という小文を載せる。まず「小樽高等商業学校と申せば新進の意気うち溢る、前途多望の学校ながら、地僻遠の悲しさと開校なほ浅きとに依り、未だ天下に覇を称する能はざるは憾みに候」という。この言からは、緑丘が「天下に覇を称する」ために一体となつて学校の充実に邁進しようとする意気込みが伝わる。開校記念日における大西猪之介の「快弁」が「大喝采」を浴びたこと、教員の陣容がそろいつつあることにも触れている。

ある停学事件

学生・教職員ともに開校以来の「ピリグリムフアザーの意気を以て前路を開拓しつゝ、」あり、「新しい気分」に燃えていた校内に、冷水を浴びせるような事件が起こった。学校側の記録が残されておらず、当時の新聞報道に依らざるをえないが、おおよその概要は次のようである。

一九二二(明治四五)年六月二二日、弁論部例会が開かれ、「出演者十数名或は熱烈なる弁難を試み、又は独自の思索を辿り、最後に大西部長の講評」(『小樽新聞』、六月二四日)があった。ここで「弁難」とされているものの一つに、「校風刷新」という「一硬骨生徒」による「痛烈なる慷慨演説」があった模様で、それが「端なくも教官間の問題となり」、七月一日、六名の学生に停学処分が下された。そのうち二年生三名は、「学生に有るまじき卑劣の遊興に耽りしが發覚せるもの」とされ、無期停学・帰郷謹慎の処分となり、復校は困難とみられた。「卑劣の遊興」とは、

「遊里に耽溺」を指すらしい。二年生二名と一年生一名は「改悛の状著るしきものあり」として、七月一日に処分が解除された（以上、同、七月二日）。『小樽新聞』『編輯几上』では、「高商其もの、名譽の爲め、甚だ遺憾とする所である」として、「中等学校を出でし青年の精神的修養の足らず、総じて思想の不堅実なる生きた証拠であつて、一つは誘惑多き小樽に随分有勝な欠陥と見て可い」（同、七月二日）と評している。

七月一二日の『東京朝日新聞』も「墮落生無期停学」というセンセーショナルな記事を掲げる。「開校以来僅かに一年を経たるのみなるに、学生の一部は早くも淫靡なる殖民地風に溺れ、世上の風説喧しかりし」という状況に、渡辺校長は「最も甚だしき墮落生六名に対し、此程遂に無期停学の処分を断行」したという。シヨック療法的に、厳しい姿勢を見せることにより、学生に警鐘を鳴らしたといえよう。

そして、問題はこれでおさまらなかつた。ほぼ一年後の『小樽新聞』連載「続高商評判記」は、「過去一年間」（一九二三年五月二日）として、次のように記している。

或る二三の人の正論は曲解された。的なきに放つた所謂正義派の矢は、意外の辺にマグレ中つた。学校は誇張せられたる彼等の高調に間誤つき初めた。遂に、大西部長も弁論部委員も総辞職した。

内容は今に於て多く云ふを好まない。曲れるを矯めて、直きに失する以上に却つて直きを矯めんとせる跡なきやと、温しくて真面目な連中が髓から憤つた。学生の心は紛乱し、乖離した。

急に停学者六名を生ずる。試験規則が莫迦々々しく八釜しくなる。（中略）

ゆくりなく先帝登遐の事あり、諒闇に入りてよりは、愈々減入る気分が腕の喪章に潜んでゐた。各部大会を開かずとの決議までした当然の結果として、委縮し退嬰して、確に充分に謹慎した。

この記述だけでは隔靴搔痒の感があるも、詳細は不明である。それでも、開校以来の高揚した気分が一挙に「委縮し退嬰して」しまったことは確かであろう。学生間で、また学生と学校間に「紛乱し、乖離」する状況が長くつづいたらしい。「続高商評判記」には「昨年弁論部例会の波瀾が雲上して、執拗陰森な地は固つた」（一九二三年五月一日）とあり、一年後の春には「嘗ての紛乱は静平され、乖離は統合されて、真に爽かな新しい気分の芽ゆめんでいる」（五月二日）とあり、ギクシャクした雰囲気も消えたようである。一九一四年四月の第一回卒業式にあたり、渡辺校長が入学者中、「実に其約三分の一は失敗者、落伍者となりて」（『乾甫式辞集』）と述べるとき、この弁論部に端を發した停学事件についても想起していたのかもしれない。

第二節 教育体制の始動

「少年紳士を以て遇する」

渡辺校長は、小樽高商の教育方針として「人格の修養」と「實際に通ずる人」の養成を掲げた。前者は倫理学を専攻する渡辺の独壇場といつてもよいが、それにとどまらない。袁世凱の学務顧問として中国滞在中、「全く我国商人が一時に奇利を得んとし、不正の行為をなしたる」事例に何度も遭遇し、「奸商の爲めに既我商品の信用を害し」たことを痛感していたため、「商業は信用を主眼とする業務」（『北海タイムス』、二年八月一日）という信念を持つに至っていたのである。

この「人格の修養」を、学生たちに向つて、渡辺は「紳士たれ」と表現した。第二回入学式において、「諸子の在学中は、吾輩並に職員は、諸子を待つに、少年紳士を以てする故に、諸子はこの礼遇に相当すべきやう、自重心を高め、且又其品格を備ふるやう、修養を怠つてはならぬ」（『乾甫式辞集』）と訓辞する。開校一〇周年式では、「少年紳士を以てする」という意味について、「これ我校の生徒が入学の当初より少年紳士たるの資格あるにより紳士の礼を以て遇するにはあらず、紳士の資格あらしめたしとの希望より其礼を以てする」と解説したうえで、「商工農士の階級時代」たる現代の商業家の資質について次のように論じている（『乾甫式辞集』）。

商は国家の存立上最も肝要なる職業也、時代は勿論のこと、国と国との経済関係は全く商人の手により自由により左右さる。故に商業家、この重要なる商の職業に従事する者を養成する本校の任務も、亦重且大なりと云はざるべからず。有無不関時代の商人の所謂町人根性といふが如き品格にては、今日の社会の存立をすら危くする

恐あり、加之對外關係上、国の地位をも危くする恐あり。今日の商人は、智識技能は勿論其品格の上に於ても、国民の上位を占むべき資格を備へざるべからず。要するに紳士中の紳士、智識徳望共に紳士中の紳士ならざるべからず。この故に斯く重大なる任務を荷ふ商業家たらんとする本校生徒は、在学中常に紳士の資格を具備せざるべからざるが故に、少年紳士を以て遇するを主義とせる也。

「少年紳士を以て遇する」とは、高商におけるすべての勉学・生活を通じてなされるべきものだったが、「修身」という授業科目においては特に「商業道德」が設定されている。第三学年で「国民道德」とともにあつかわれ、「道徳原理ト職業道德トノ關係、商業道德ノ事実、商業生活ノ徳及本務、商人ノ人格、商業道德ト国民道德」(小樽高等商業学校一覽、一九二三年版)という内容である。初年度は渡辺自身が担当したが、その後は木村善太郎が担当している(一九二一年は小尾範治とト部岩太郎)。

「実際に通じる人」の養成

開校から三年、校内も落ち着いてきた一九一四(大正三)年秋、『大阪毎日新聞』の関係者と目される「泉松閣主人」が北海道内を視察し、それを同紙に「北海道みやげ」として連載した。その第一五信(四年二月二日)は、「東京以北に於て唯一最高の商業学校」小樽高等商業学校の視察記で、「官立同種学校中最後に創立せられたる最新の学校にして規模、内容共に新空気を以て充たされ、北海の天地に生氣満々として日に月に向上しつ、ある」と評する。それは、「他の高商に於て見る可からざる独特の施設」——「商品実験」、「商業実践」、「臨時講演」、「選科」——に注目するからである。もちろん、これらは渡辺校長らの詳細な説明にもとづくはずだが、第一回卒業生を送り出すまでに教育体制が順調に始動するなかで、内外に小樽高商としての特色が鮮明に打ち出されたといふべきだろう。

この「北海道みやげ」に先立つ『小樽新聞』連載の「統高商評判記」でも、他校に見られない特色として第一に「商品実験科」をあげ、「範を採れる本元の独逸に於てすら新しき企画なのだから、その効果は無論数年の後を期すべきである」とする。また、「商業実践」については、「各高商何れも失敗して、現に此設備のある所は無い。宿命的に必ず不成功に帰すといふ結論に到達して居るものを、敢て其轍に踏入つた」(一九一三年五月一四日)とするように、いづれも実験的な科目に果敢に挑戦したといつてよい。

そうした挑戦は、渡辺の「実際に通ずる人」の養成という確乎たる信念にもとづく。授業開始からまもなく、渡辺はドイツ・ベルギーなどの高等商業教育の視察をふまえて、「単に商業上高等の智識を授くるのみならず、商品を物理的若くは科学的に能く実験整頓して、商品の性質を充分に知らしむること」(『小樽新聞』一九二二年七月三日)と語っていたのである。また、「本道に於ては、理論に明かなる人よりも実際に通じたる商業家を必要とするを以て、今後の教育方針は理論に偏せず、実際に通ずる人を養成せん」(『北海タイムス』、一九一一年八月七日)、「商品に対する實際的眼孔を養成せざるべからず」(同、八月二〇日)とも述べていた。

第一章でみたように、このような渡辺校長の教育方針は学科目の選定と配置において具体化され、後述するようなかたちで実践されていった。それが一貫して小樽高商の際立った特色となったことは、開校一〇周年式における、「専門学校としての本校は、経済学、商業学の理論を授くるは勿論なるも、単に之のみを以て満足せず、之を活用することをも授けざるべからずとの見地より、売買実習の為に商業実践科を起し、企業実習のために企業実践科を起し、商品実習の為に商品実験科を起したるなり」(『乾甫式辞集』)という渡辺の式辞にうかがえる。「企業実践」は、後述するように、一九二〇年から開始される石鹸工場での製造実習である。

また、校長最後の年に渡辺は渡欧するが、その東京での送別会において、「小樽高商の目的に活動的なる Trading man を作ると共に、兼て遠大の計画に活くる Enterprising man を作り、加ふるに又指導的地位に座すべき Thinking

man を作らんとするにあり」と述べたという。前二者が「商品実践」と「企業実践」に相当する。「Thinking man」は、「近く特殊の方法に於ては設備充実を、実現する確信を、暗黙の間に洩らされたること」(『校友会誌』第一八号、一九二〇年一〇月)、すなわち研究科構想を指すものとみられる(後述)。

「教授要目」

開校一年目の一年生の学科目は、「倫理、商業文、商業算術、商業地理、経済学、法学通論、工業大意、簿記、商業学、商品実践、商品学、体育が各一時間乃至三時間づつ、それに英語の十一時間(訳読、書取、会話、文法、作文、暗誦)を加へて、一週三十五時間とは規則に明示する所である、併し此の規則外に応用理化学二時間を二学期から加へられた」(『高商評判記』『小樽新聞』、一九二二年二月三日)。のち「倫理」は、文部省の全国一斉の指示で「修身」となる。二年目の担任学科目は、新たに「商品学」と「商品実験」が加わり、このために教授六名と助教授四名が増員された。

一九二三(大正二二)年度の『小樽高等商業学校一覽』掲載の「教授要目」により、どのような授業がおこなわれていたのか、概観しよう(「修身」については前掲)。担当者については、一九一四年度分とする(カッコ内は一九二一年度の担当者)。

「商業文」は、一年生に「日本商業文」と「書法」が、二年生に「英語通信文」が配当される。後者では、「商業文ノ様式及取扱」や「商用一般往復文及練習」などをおこなう。石橋哲爾が担当。開校時の学則では「和英両文」を課すことになっていたが、「入学当初ヨリ直ニ英語商業文ヲ課スルハ、教授上稍不適当ト認めタル」ため、一年生には「専ラ邦文ノモノヲ教授スル」ことに学科課程が改正されていた(一九二一年二月、庶務課「諸規則制定改廢綴」)。

「英語」は前述のような内容で、「文法及作文」では「書簡文、商業通信及諸様式、論説、商業通信」などを、「話

学校規則 (『諸規則制定改廢綴』)

方」でも「商業二関スル談話、問答」がある。「読方及解釈」のテキストでは、Shakespeare "Julius Caesar", Irving "Sketch-Book"なども使用された。

時間数は一年から三年まで各一〇時間で、全授業の三割前後を占める。開校時の学科課程では週一一時間であったが、「十時間ノ授業時間ヲ以テスレハ充分ナル実績ヲ挙ケ得ヘキ見込ミナル」(庶務課「諸規則制定改廢綴」)として、変更されていた。なお、山口・長崎高商でもほぼ一〇時間前後である。担当は、中村和之雄、八木又三、長谷川慶三郎、苫米地英俊、高島佐一郎、そして講師のジョーンズとテラーである(中村和之雄、苫米地英俊、高島佐一郎、河合逸治、中村賢二郎、浜林生之助、大平頼母、小林象三、ジョーンズ、マッキンノン、バグレー)。

「商業算術」は、「歩合算、期日平均法及交互計算、代価計算法、利息及割引、税関倉庫保険及運送二関スル計算」などで、一年生には「珠算」も課せられた。志摩清一郎と講師の芳賀典定、フートが担当する(国松豊)。

「商業地理」は、「交通地理、各洲地誌」などを学ぶ。担当は寺田貞次(一九二二年も同)。

「商業歴史」は、「本論、欧州諸国民ノ発達」を学んだ後、「日本ニ於ケル経済発達ノ大要」に進む。担当は高島佐一郎と東京高等商業学校の三浦新七で、三浦は集中講義となる(三浦、大西猪之介)。「工業大意」は、「蒸気器械及汽関車、瓦斯、石油、汽機及発生装置、電気機械、水力器械、鋷山用機械、工業用材料、紡績及染織機

械」という内容で、松本源と講師の根来簡二・黒井千代吉が担当する（根来）。

「商品学及応用化学」は、「重要商品ノ製造、性質、種類、品質」という内容の「商品理化」と、「重要商品ノ生産、貿易、種類及用途、荷造法、取引慣習」という内容の「商品経済」から成る。「応用化学」は、入学者の「理化学ノ智識ニ甚シキ不同アリ」、第二学年からの「商品実験」や「商品学」授業に「支障少カラス」という状況となつたため、二年目から加わつたものである（庶務課「諸規則制定改廢綴」）。寺田貞次、松本源、小原亀太郎、フランクが担当する（小原、小瀬伊俊、西田彰三、フランク）。

小樽高商の特色である「商品実験」については、後述する。

「第二外国語」は、二年生と三年生の選択科目で、この時点では「独逸語」「露語」「支那語」の三つである。「続高商評判記」によれば、「二、三年を通じて今のところ独逸語全盛である」（一九一三年五月二九日）という。それぞれ木村善太郎とウイルコム、田中乙、石橋哲爾と程恩潤が担当する（小尾、石橋哲爾、関恩福、ネフスキー、デーゲン、目黒三郎（フランス語）。「支那語」は、二年目から実施された（その時点では「清語」）。「本道ノ重要輸出品ノ販路ハ殆ント総テ清国ナルヲ以テ、本道対清貿易関係ヨリ特ニ清語ヲ加フルノ必要ヲ認メタル」（庶務課「諸規則制定改廢綴」）ためである。

「法学」は、一年の「法学通論」、二年の「民法」、三年の「商法」という配置となる。「民法」の場合、総則について「物権法」と「債権法」をあつかう。担当は伴房次郎である（伴、橋詰益爾、鈴木為吉）。

「経済学及財政学」は、一年の「経済原論」、二年の「貨幣論」と「商業政策」、三年の「工業政策」・「農業及殖民政策」・「財政学」という配当である。「工業政策」の後半では、「労働者問題概論、賃銀制度、労働時間、職工組合、同盟罷業及社会仲裁、工場法」があつかわれる。また、「農業及殖民政策」では、「殖民地ノ意義」や「殖民地ト母国トノ貿易関係」も取りあげられる。井浦仙太郎と講師の高岡熊雄（東北帝国大学農科大学、「農業及殖民政策」）、

津村秀松（東京高等商業学校）が担当する（武田英一、大西猪之介、手塚寿郎、佐原貴臣、高岡熊雄）。

「簿記及計算学」は、一年の「簿記原理及商業簿記」、二年の「銀行実務及簿記会计学」、三年の「工業簿記及会計学」・「各種応用簿記及会計学」という配当となる。「銀行実務及簿記会计学」では、「為替取引、手形交換、勘定科目、仕訳、伝票ノ運用及執務順序、主要簿及主要簿ノ分割、補助簿及区画平均法」などのほか、「演習」もある。志摩、井浦、国松豊、テラーが担当する（国松、村瀬玄、根岸正一）。

「商業学」は、一年の「商業通論」・「税関及倉庫」・「売買」、二年の「銀行及外国為替論」・「鉄道論」・「水運論」・「保険論」（三年生でも）、三年の「取引所論」・「商業経理学」という配当で、ここに「商業実践」が加わる。「保険論」をみると、「通論」について、火災保険・生命保険・海上保険・「共同海損」という順序である。「商業経理学」では、「企業、組織、経営、管理、財務、監査」があつかわれる。志摩、井浦、国松、坂本陶一、高島、講師の黒沼義介（小樽商業学校長）、西尾広（書記）、フートが担当する（武田、国松、村瀬、高島、根岸、高松勤、椎名幾三郎、伊藤伊之吉）。

「体操」は、徒手・器械体操のほか、「各箇及部隊操練」「一般単独及部隊敬礼」とあり、兵式体操が含まれてい
たと思われる。講師の菅安右衛門と徳永近之助が担当する（長畑功、大森恵吉、菅安右衛門、加藤政秀、横溝直也）。
学校規則上は一週間三五時間（五〇分授業）という時数だが、「事実上数時間の超過がある」。これについて、教
員も学生も「もつと年限を長からしめよ、然らざればもつと科目を少からしめよ」と不満をもっているという。東
京高等商業学校・神戸高等商業学校のように四年制でないことが、このかなり無理な教育態勢を強いることになっ
た。「総ての学科を真面目にやつてゐては、其にばかり追はれて、特殊の研究などする余裕を得らる、ぢやない。時
間さへ長くして置けば、教育の効果が拵ると単純に考ふるのは、伶俐だらうか」と、「続高商評判記」（一九一三年五月
二九日）は批判的である。

創立二年目の学生は、一般的に一年次に一五科目、二年次と三年次にそれぞれ一八科目（すべて必修）を履修している。

さて、商業学校出身者は商学系の科目の一部が既習であるのに対して、英語や理化学系の科目が手薄であった。これを是正するために、商業学校出身者は、一六年四月から、まず一学年一学期に限って、「簿記」・「計算学」三時間と「商業学」一時間を、「応用理化学」二時間と「英語」二時間に振り替える、という措置をとっていた。それでも、十分な教育効果がえられなかったため、一八年五月からは一学年を通して、先の振り替えに加えて、さらに「商業算術」二時間を「代数幾何」二時間に振り替えることにした。

一九一九年度には、「第二外国語」が選択必修となり、「商業実践」も必修となった。二〇年度には、「第二外国語」に新たにフランス語が加わった。同時に、「特二英語二精通セシムルハ實際其功アルヲ認ムルニ由リ、英語ヲ以テ之ニ代ヘルコト」（庶務課「諸規則制定改廢綴」）、つまり、第二外国語の代わりに英語の履修を可能としたのである（すでに、この時点では英語の履修時間数は一年次に九時間、二年次に八時間、三年次に七時間と減少していた）。

また、従来の「商業文」が「国語漢文」に変更となった。「従来商業作文ヲ授クルニ当リ、国語漢文ノ素養乏シキタメ、活用ノ自由ヲ欠ク尠カラサルニ依リ、第一第二学年ニ於テ講読ノ一時間ヲ加ヘ以テ、素力ヲ補ハントス」（小樽高等商業学校一覽、一九二〇年版）という理由にもとづく。こうした「商業文」の前提となる国語の読解力不足への対応を迫られる一方、「文章法」の教授法も「主トシテ自作文ヲ課」すことに修正され、「始メハ記事文、叙事文ヲ、後ニハ論説文又ハ書牘文ヲ多クシ、且ツ商業取引上必要ナル諸形式ノ一斑ヲ課シ、文体ニ就キテハ文語文、候文体ヲ主トス」（「教授要目」『小樽高等商業学校一覽』、一九一九年版）とされた。なお、この授業の一部には一年から三年まで「英語通信文」も含まれ、苦米地英俊『商業英語通信規範』が教科書として使われている。

学生数の増加は、必然的に教員の拡充をもたらしした。三学年がそろった一九一三年の時点で、定員は教授二三名、

助教授九名、書記五名であったが、一四年に教授一名増と助教授二名減、一八年に教授二名増という経過をたどる。一九九年になると、「学級増加及学科目新設ノ結果、毎週教授時数」が六二時間増加するとし、教授三名の増員が実現する。その「増加時数ノ担任配当」は、「成ルヘク現任教官ヲシテ之ヲ担任セシムルノ計画ナルモ、英語、法学通論、民法・商法、商業学及商業実践ハ現在教官ノ担任時数既ニ過重ニ失スル嫌アリ、又商工経営及企業実践ノ新設学科目ナル」という理由で、「英語」・「法学通論」・「企業実践」などを担当することが予定された。たとえば、伴房次郎は「法学通論」八時間と「民法・商法」を一二時間担当しているが、それぞれ四時間ずつ減らすことになった（以上、「公文類聚」一九一九年、国立公文書館所蔵）。教員は一週間に平均的に二〇時間の授業を担当していた。

「商品実験」

一九二二（大正一一）年の皇太子行啓に際して作成された『小樽高等商業学校要覧』（市立小樽図書館所蔵）には、「商品実験室」について、「時勢ノ進運ト理化学工業ノ發展ハ、市場ニ上ル商品ヲシテ益々多種多様ニ亘ラシメ、今ヤ商品ニ関スル研究ハ、唯ニ経済的方面ヨリ考究スルヲ以テ足レリトセズ、更ニ技術的立脚地ヨリ之ガ性質用途又ハ品位ノ鑑定法等ヲ研究シテ、以テ類似商品ノ品位ニ於ケル差異又ハ真正品、模造品等ヲ理化学的鑑定法等ヲ研究シ、以テ商業上ノ基礎トセザル可ラザルノ必要ニ迫レリ」と記載している。すでにこの時点で渡辺龍聖は新設の名古屋高等商業学校長として緑丘を離れているが、その教育方針の第一に掲げた「商品実験」科は一〇年余を経て定着し、「実験室ニ於テ学生自ラ試験管、顕微鏡又ハ種々ナル機械ヲ手ニシテ研究ニ従事スル光景ハ、此種学校ニ於テ他ニ其類例ヲ見ザル所」（同前）という自負に値するものだった。戦後、新制大学への昇格にあたり、単独昇格が可能となる要因の一つに、教養課程における自然科学分野の充足が条件にされたが、それには開校以来の「商品実験」科の



商品実験室

存在と実績が大きく貢献することになる。

さて、先の『学校一覽』中の「教授要目」では、「商品実験」は次のような内容とされている。

生徒各自ヲシテ商品ニ関スル理化学的実験ヲ行ハシムルモノニシテ、
商品ノ製造及品位鑑定ニ関スル実験ヲ主トス

一、予備的ノ実験 第二学年

一、薬品ノ調整及無機有機化合物ノ定性及定量分析ノ大要

二、比重、粘度、沸騰点、溶融点等ニ関スル物理的実験

三、顕微鏡的実験

二、商品実験 第三学年

第二学年ニ於テ授ケタル理化学ノ実験ヲ基礎トシテ、重要商
品ノ各個ニツキ製造及品位鑑定等ノ実験ヲ行ハシム

他の高商に見られない独特の特色を強く打ち出そうと、本館一階の北側に理化学教室と二つの商品実験室（化学・物理）を配置し、実験設備なども備えるという大きな投資をおこなっている。一九一八年には本館奥の敷地に、二階建ての独立した「商品実験」科の建物が新築された（かつての五百番棟）。「化学的ト顕微鏡及物理的実験室ト講義室、外ニ分析、

燃焼爐室、天秤室、標本、器械等計十二室ヲ備へ、此科ノ設備完成スルニ至」(『小樽高等商業学校一覽』、一九一八年版) った。

二年次から「第二外国語」科目との選択制にしたため、当初二年生の「商品実験」履修は「極めて少な」かったものの、三年生で増加する傾向だったようである。「続高商評判記」には、「病院の薬局みたいな白いガウンを着て、テストチューブだ、フィルターペーパーだと実験に忙しい。学校で勿体ないほど莫大な費用をかけたのは、此科を以て最とする」(一九二三年五月二九日)とある。この科を担当したのは、寺田貞次、松本源、小原亀太郎、フランクである(一九二二年の担当は小原、小瀬伊俊、西田彰三、フランク)。

小原は、『小樽高等商業学校校友会雑誌』第四号(一九一五年三月)に「商品実験室報告(第二報)」を寄せ、「応用顕微鏡学実習要旨」を紹介している。「商品実験」という「教科の目的とする処は、商品の有用なる性質、殊に其品位及真贋の鑑別を錬磨し、保存及運搬の研究をも行ふ」ことにあり、その重点は「品位鑑識の方法」にあるとする。そのなかで、「応用顕微鏡学習」は、「所謂「証明的方法」を棄て、「発見的方法」を採る」ことにあるとして、次のような具体例をあげる。

例之、小麦粉を実験せしむるに当りては、小麦粉中に出現する構造を予め指示し、その品位に及ばず影響を説述し、然る後にその実験に従事せしむる事を為さず、劈頭、小麦其物の構造を究めしめ、次に小麦粉を検し、その内に存在する微細なる構造の因て来る処を明かにし、その品位に影響を及ぼせる理由は全く自らこれを発見せしむるものなり。かくの如き方法は(中略)他日、實際商品の鑑識に従事するに際し、一冊の参考書を有せず、或は全く世に聞へざりし新商品に接する際に於ても、猶その鑑識に惑はざる所以のものなるべしと思す。

『校友会雑誌』第六号（一九一七年）には、M生「商品実験室消息」が載る。「彼の検査機関や研究所の縮図とも見るべき実験室裡に、生徒各自が試験管や器械を手にして研査に従事しつゝある状況は、本邦此種の学校中他に類例のないこと」とする一方で、率直に「創始の事業に伴ふ困難」を語る。学生への具体的な教育効果はまだ不明としつつ、「少くとも彼等学生の脳裡に、理化とか研究とか云ふ思想が其一隅を占領して、他日彼等が経営者たり資本家たらんとする暁、此種の問題に遭遇することあらば、此科目に關して多少感謝を惜まないことを信ずる」と述べている。

なお、「本校商品実験科ハ、教授ノ余暇ヲ以テ、商品ノ分析（定性又ハ定量）及其鑑定ノ依頼ニ応スルコトアルヘシ」（「商品分析鑑定規程」「小樽高等商業学校一覽」）として、一般からの商品分析・鑑定を請け負った。「菜種油及其の油粕に關する実験」、「桐実及桐油粕分析」、「青森県産珪藻土地鑑定」、「新美唄炭の分析鑑定」などの依頼があった。

「商業実践」

三年次の科目である。「教授要目」とは別に、「実践科仮規程」が設けられている（「小樽高等商業学校一覽」）。その第一条には「商業実践科ニ於テハ、実務ノ大要ニ通シ、取引実況ヲ調査シ、更ニ経営ニ關スル概念ヲ習得セシムルヲ目的トス」とあり、管理部・擬営部・研究部からなる。具体的な五つの授業内容は、『校友会雑誌』第三号のS生「実践室より」に紹介されている。

まず、中心となる「擬営実践」である。これは、「生徒を二組に分ち、一組は売買営業をなさしめ、他の一組は保険、汽船、倉庫等、所謂機関業に従事せしむる。而して売買業に従事する生徒に対して、営業経営者として、又は使用人即ち店員として知らねばならぬ取引、手続、事項、開業の初めより期末決算に至るまでに生し来る各種の取



商業実践室

引手続等を時間に割当て練習せしむる」。教師の指示は数日前に出され、学生はあらかじめ準備をしておき、授業時間になると、「迅速完全に此を決する」。

此の擬営部の目的は、記帳、計算、通信等を、課題によらずして自発自動的に処理せしめて、以て既に修めたる学科の復習をなさしめ、及各種商業の実際の方面に関して、新智識を獲得し、商業経営の統一的概念を与へんとする智的方面と、単純なる事務をも厭はず熱心に処理整頓する慣習を養はしめ、多数の共同作業によりて社会的道徳心を養はしむる道徳的方面とを有するのである。

これには、毎週一回三時間ずつ、六週間が割当てられる。なお、一般的にこうした商業実践に対する、「見戯に類するとか、貴重なる時間と労力とを費してまでやる程の価値があるだろうかとか、或は学校でやった実践は実際に於て役に立たぬとか」という根強い批判に対して、S生は「他に主とする重大なる目的あるを見ず、又は知らずして、見戯的と己れの眼に映ずる部分あるのみを以て実践を非難せんとするは不可である」と、一蹴する。

第二に、「特殊問題研究」である。「生徒に対し、小樽又は広く北海道、

或は本邦乃至世界上の地方問題、時事問題乃至特殊問題の中、商業経済に関するもの数百中より、各自将来従事せんとする方面のものを選ばしめ、問題によりて教官の指導を受け、調査研究をなし、其の結果を報告するもの」で、いわば必修の卒業論文に相当する。これについては、後述の「卒業論文」の項に譲る。

第三は「実務の研究」で、「斯界の人士に依頼し、生徒を其の營業所に送り、実務を見学し、又は講演を請ひて、其の研究を助け、或は就業の心得を知らしむる事」で、現在でいえばインターン・シップに相当するものである。

第四は「産業研究」で、「商品実験」とは別の観点から「本邦内外貿易の重要商品十一種」について、それらの「生産消費の世界的乃至地方的の大勢」について研究し、統計図表を作成させる。「将来社会に立ちたる場合の観察方法を授けんとする目的」である。

最後は「新式器械研究」である。「事務整理、労力節約は世界の大勢であつて、其の需要に應ずる為に現今種々なる器械が発明されている」として、学生にそれらの「研究練習」を課す。タイプ・ライター、計算器、数字打拔器などの実習である。

こうした「実践」を通じて、「学生ノ耳ヨリ入りタル商業学ノ知識ハ、眼ニヨリテ確メラルルナリ」という教育効果を上げていった。本館二階の南端におかれた「商業実践室」では、「各種設備ハ一室ニ整然トシテ集合スルガ故ニ、何人モ一瞥シテ、現代的商業各機関ノ有機的關係ヲ察知シ得ベシ」（以上、『小樽高等商業学校要覧』）と自負された。一九一六年時点のこの科目の担当者は、志摩、井浦、国松、坂本、高島、石橋、フート、黒沼義介（講師）、西尾広（書記兼任）であつた（一九二一年の担当者は、武田、国松、村瀬、根岸、高松、佐原、椎名、伊藤伊之吉）。

佐野善作『日本商業教育五十年史』（一九二五年）のあげる「近時各校の特色とする所」のなかで、小樽高商の場合にはやはり「商品理化及実験」と「企業実践」がとりあげられている。山口高商においては「支那貿易科」の設置（一九一六年）、長崎高商においては「海外貿易科」の設置（一九一七年）、そして小樽につづく名古屋高商では「商工

心理学」「世界近世史」「教育学」と並んで「商品理化学 商品実験」があげられている。

「臨時講演」

先の「北海道みやげ」のなかで、泉松閣主人は小樽高等商業学校の「四大特色」として、「臨時講演」と「選科」をあげていた。前者は「各方面より知名の専門学者を聘して、短期間の講演」をおこなう制度で、「我國の学界に一新例を開きたる」（『大阪毎日新聞』、一九一四年一月二日）ものという。開校当初、専任教員がそろわないための苦肉の策として、渡辺校長が「此と全く同じき制度は欧米にも未だ聞かざる所にして、僅に例を独、米に索め、参酌考案の

未採用」（『小樽新聞』、一九一二年九月一九日）したものである。「講演」と称するも

の、実際には正規の授業で、現在でいえば夏季・冬季に実施する集中講義

にあたる。一九一一年（明治四四）年九月、まず関一（東京高等商業学校教授）

の「工業政策」、ついで佐野善作（同）の「取引所論」の講義から始まった。

「続高商評判記」は「その講義は、大抵毎日二時間づつ、二週間に亘るを

常とし、効果よりせば、ずるずるに一週一時間づつ、一学年を要するより、ド

レだけ利益が多いか知れぬ」（一九一三年五月一四日）という。二年目の一九一三年

度を例にとると、次のような科目に講師が囑託されている。



佐野善作



関一

| | | |
|--------|--------------|-------|
| 工業大意 | 東北帝国大学農科大学教授 | 坂岡末太郎 |
| 工業政策 | 東京高等商業学校教授 | 関一 |
| 貨幣及銀行論 | 東京高等商業学校教授 | 佐野善作 |

商業史 東京高等商業学校教授 三浦 新七

商品学（農産製造）東北帝国大学農科大学教授 吉井 豊造

商品学（畜産製造）東北帝国大学農科大学教授 橋本左五郎

農業及殖民政策 東北帝国大学農科大学教授 高岡 熊雄

商品学（林産）東北帝国大学農科大学教授 小出 房吉

工業大意（電気機械水力器械）東北帝国大学農科大学教授 根来 簡二

財政学 京都帝国大学教授 小川郷太郎

さらに「商業政策」を担当した津村秀松（神戸高等商業学校教授）を含め、錚々たる顔ぶれである。こうした贅沢な「臨時講演」は、専任教員が拡充されるまで、数年間つづいた。「統高商評判記」は、関の講義について「緊切な、新しい労働者問題を捉へて、賃銀制度、労働時間を論じ、自助の組織、工場法を説くところ、知らず識らず謹聴せしむる力が籠つてゐる」（五月二日）と評し、「津村氏の、地方高商に於ける特点を数へて、「東京何ぞ」と気を吐いた時、学生に対する刺戟は実に偉なるものであつた」（五月三日）とする。

東京・京都・神戸からやってきた名士たちは、講義の合間をぬって小樽区民のために公開講演会を開いている。関一「商港論」、佐野善作「取引所に就て」、小川郷太郎「対米問題の経済的觀察」、津村秀松「戦後の思潮及経済の変遷」などで、それらの筆記は『小樽新聞』に掲載された。

選科生

小樽高商では一九一三（大正二年）四月から、他の高商には見られぬ試みとして、本科以外に選科生をおいた。

「正課程ヲ履修シ難キモ、商業上特種ノ知識ヲ修得シタキ希望ヲ有スルモノヲ其数ヲ限りテ入学セシメ、以テ斯学ノ普及ヲ図リ度、特ニ選科生ノ設置ハ本校所在地ノ要求ト一致シタル」(庶務課「諸規則制定改廢綴」という趣旨であった。「学校規則」を改正し、第七章を「選科生」の規程とした。選科生とは「本校学科目中ノ一科目、若クハ数科目ヲ選択専修セントスル者」で、現在の科目等履修生(聴講生)に相当する。入学の資格は次のようなものである。

- 一、本校入学試験ニ合格シタルモ、特種事情ノ為ニ正科ヲ履修シ能ハサル者
- 二、中学校、甲種商業学校、又ハ工業学校ヲ卒業シ、一箇年以上確実ナル実業ニ従事シタル者
- 三、所選ノ科目ヲ履修スルニ必要ナル学科ノ学力検定ニ合格シタル者

注目されるのは、一年以上の実業経験者という条件付きながら、中学校・商業学校卒業者にとどまらず、工業学校卒業者にも選科生への道を開いたことである。「工業大意」「工業政策」や「商品実験」などの科目に希望者が見込まれたからであろう。選科生の在籍数は例年七、八名程度で、その最高年齢が三〇歳に達する者もいた。

毎年の生徒募集時には、「本科」とともに「選科」若干名が募集された。

「実践調査報告」から卒業論文へ

前述の「商業実践」中の「特殊問題研究」は、「実践調査報告」と呼ばれた。「小樽高等商業学校商業実践科」の野紙を使用する。第一期生は三年次の一二月に指示されて、翌年二月提出という慌ただしさであったが、その後は三年生の六月頃までに各自の主題が決まり、夏休みに各地を調査旅行してまとめることになった。一九一六年一月に「本邦畜産界ヲ概観シ、本道畜産界ヲ略述シ、併セテ三、四牧場調査報告」を提出した木村昇の場合、夏休みに



「実践調査報告書」

入ると、すぐに札幌農科大学図書館で予備調査をしたうえで、小樽を一五年七月二五日に出發して八月五日に戻るまで、旭川の「永山村、十勝国清水村、釧路町、札幌近傍月寒」を回り、さらに函館方面の牧場なども調査している。「前田牧場、月寒種畜牧場、新冠御料牧場、トラピスト修院の各事業報告書」や「国民年鑑、農商務省統計等」を参考書類にあげている。

これらの調査報告書は図書館に寄託され、図書館書庫には数十冊が現在も残されている。「北海道経済ノ発達」(一九一四年二月提出)をものした重川佐一は、結論部で、「帝国現時ノ社会状態ニ潜ム一部国民ノ窮状ヲ省ミ、此レガ救済法ト帝国今後ノ健全ナル發展策ニ付キ一考ヲ費ヤ」し、朝鮮・台湾への移住とともに、「本道ニ来リテ、新天地ヲ開發スベク」と提言している。のちに同窓会組織の緑丘会理事長となる飯川文三の報告書「小樽同業組合の研究」は、「我国ノ物産ノ精良ト整頓トヲ期スル事ハ、内外貿易ノ隆盛ヲ図ル上ニ於テ一日モ忽^{ゆるがせ}ニス可ラザル」という観点から、官に依存しない同業組合の自治の必要性を論じている。ほかに、高橋徹男「北海道及樺太方面ニ於ケル不定期船」、西尾清一「北海道石炭産業論」、荒井清治「北海道輸出木材之調査」などがある。

『校友会雑誌』第三号掲載の「実践室より」で、S生は「大正二年度に於て既に提出せられたる五十部の報告書中には、四百枚に達するもありて、此を作成したる為に卒業生の得たる無形の宝は、実に羨むべきもの」と述べるとともに、「市中の或実業者の如きは、之



卒業論文（大野・糸魚川ら）

によりて非常なる参考をなし得たるを謝したる事もある」という。

そのうちの一人、のちに小樽高商の就職担当者となる松田新が選んだのは、「細民金融機関ノ調査」（二四年二月提出）だった。その問題関心は、「近時我邦ノ実業ハ長足ノ進歩ヲナシ、国富ノ増進、著シキモノアレドモ、之ガ為ニ貧富ノ懸隔や稍々其度ヲ高メ、随テ社会ノ調和次第ニ破レントスルノ兆アル」というところに発し、「細民ハ社会ノ大多数ヲ含ム一國ノ生産ノ主動力タリ、コレヲ改良、進捗セザレバ国民ノ幸福、国民経済ノ發展得テ望ムベカラズ」と考えていた。松田は「マルクス派ノ社会主義」には批判的で、「吾人ハ現在ノ私有的経済組織ヲ維持シ、其範圍内ニ於テ、個人ノ活動ト国家ノ権力トニ依リテ階級ノ軋轢ヲ防ギ、社会ノ調和ヲ期セントスルモノナリ」という立場だった。参考文献の第一に、坂本陶一「下層社会ノ金融機関ノ公営」（『国民経済雑誌』第一六卷第一号、一九一四年）があることか

らみて、坂本が指導教員であつたらう。横山源之助『日本ノ下層社会』も参考文献にあげている。初期の段階から、重川や松田のように、社会的問題や現状に関心を有し、それらに経済・商学の領域から考察を加えようとする学生も輩出していた。

一九一五（大正四）年に卒業して、のち母校にもどる手塚寿郎の題目も「逐貧論」である。このころには「同盟罷工原因論」、「最低賃銀に就て」、「デパートメントストアの研究」、「芸術の企業化と興行経営を論ず」や、「婦人ト幼年者労働」、「労働者ト農村問題」、「労働者幸福増進論」などの題目も並ぶ。こうした「時事問題乃至特殊問題」への選択が強まってきた結果、一九一八年の卒業生からは「実践調査報告」は「卒業生論文」と位置づけ直された。この年に卒業

した大野純一の題目は「商業政策と国際商業政策」、糸魚川祐三郎は「自給自立的経済策を論ず」、翌年に卒業の南亮三郎は「スミス学派経済学」、郡菊之助は「国際賃借と貿易」である。

いつの時代も学生は時代の急転に敏感で、たとえば、糸魚川や郡の立論には第一次世界大戦が大きく影響している。糸魚川は、「一主義の戦前に存立し、戦争によりて更らに激成せられ、先後愈々その適用を見んとするものあるを見る、自給自立的主義、即ちこれである、生産と消費との間に於て、他国の覇権を脱せる一大優力なる経済素意識を建設せんとするもの、即ちこれである」と論じていく。郡の結びの一文は、「今後我国の商人は宜しく新世界の大勢たるへきデモクラシーの一大潮流に順応すべく、世界人類の互恵的観念を以て、真摯堅実なる商業道徳に立脚して、以て我国の対外商業にたづさはらんことを」であった。いずれも指導教員は大西猪之介で、とくに糸魚川の卒論には、「議論雄大にして、文章もたつて居る。前半はもつと縮めた方がよかった、要するに良論文の一つなり」という批評が付されている。

なお、開校後まもなく「主トシテ北海道ノ重要産業」の調査研究を目的に、「小樽高等商業学校産業調査会」（会長は校長）が設置されていた。ここに農林・鉱産・水産・経済・金融保険などの九調査部を置き、「調査ハ主トシテ生徒ヲシテ之ニ当ラシメ」（『小樽高等商業学校一覽』、一九二三年版）るものとした。それは実質的に「実践調査報告」と重複するものだったが、卒論の一般化にともない、「主トシテ北海道ノ重要産業」の調査については「産業調査報告」として別個にあつかうようになった。

授業風景

では、こうしたユニークな特色をもつ授業は実際にどのように展開されたのだろうか。いくつかの回想をつなぎ合わせてみよう。



授業風景

まず、第一期生の松田新によると、「開校劈頭の授業」は国松豊の「商業通論」であった。「グラハム、フーバーの安い表紙のホーム、トレードを繕きながら、「開校第一の授業に引き出されまして」と前置きしながら、フロックコート姿で最初の授業を進められた」（松田「開校当時の思ひ出」『緑丘』第三七・三七八号、一九五一年四月一五日）という。

すでに京都帝国大学で民法などを教えていた伴房次郎の場合は、高商で担当する「法学通論」にとまどった。留学から帰国後、一九一一（明治四四）年九月から教壇に立つと、「中等学校を出たばかりの若人に法律の思想を吹き込むのは、荒畑を耕して種を蒔く様な仕事」であると察し、「せめては差当り必要な基礎知識のみでも早く教へて進行の便を得たいと望むが、夫れすら出来ない。そのため、「結局は時間を無駄にせぬ様、興味を失はせぬ様、法律が日常生活に織り込まれて居る事を示して、其常識ともいふべきものを授ける外なしと考へた」（伴「飄然録」『緑丘』第九四号、一九三六年七月五日）。「緊縮して而して緊張した講義振り」ながら、「引例の適切にして趣味饒おほきは法学と云ふ乾いたものを潤ふす力がある。時々警句が出る。真面目な顔で、機智と諧謔とを弄する」とは、「続高商評判記」（一九二三年五月一六日）の評である。

第三代校長となる苦米地英俊の英語（「英語通信文」）の授業はきびしかった。「始めのうちに甘くすると生徒が怠け、力がつかぬといふ訳か、一学期中は特に厳しく、試験の採点などは非常に厳重だとのことだが、二学期に入ると、今までさんざん苦しめられ通した生徒達は、いづれもホツとする、そして試験も割合に易く、一学期に「嫌な先生」は、二学期には「思ひ遣やの深い先生」となる、又「よい素質を持つて居るぞ」と、氏から認められた生徒は一層ひどく扱はれ、痛棒の連発に逢ふ、三段論法でぎゅうぎゅうやられるかと思ふと、頭からガン！ とくる」（学窓新点描）『東京朝日新聞』、一九三三年四月二日）という具合である。

小樽高商出身者として母校の教壇に立った手塚寿郎の「経済学原書講読」の授業は難解で有名だった。「生徒が一番悩まされるものは、微分積分等の高等数学を必要とする数理経済で、一番二番を争ふものでも七十三、四点の辛点を与へられ、閉口頓首して居る」（「学窓新点描」『東京朝日新聞』、三三年四月二五日）という。

その最初の授業は、「毬栗頭いがぐりに羊かん色紋付羽織に短かい袴の小柄な男がツカツカと教室に入ってきて、いきなり教壇に立ち、自己紹介の挨拶もなく哲学の認識論を突拍子もない大きな声でまくし立て」る、というものであった。それでも、学生は「これが本当の学者というものかなあとと思って、感心もし、又好感がもてた」（越崎宗一「商業学校出の数理派経済学者」『手塚寿郎先生の追憶』、一九六七年）。そして、「外国書といえは、中学校での英語の教科書位しか知らない多くの新入生にとって、『原書』をよむんだという気分が、まさに専門学校に入学したことの大きな誇りのように思われて、内容の理解はさておき、あの濃い緑色につつまれたゴンナー版のリカード『原理』をかかえ、その用紙の放つ異国的な香りに酔いながら地獄坂を上ったのであった」（大泉行雄「手塚先生とリカード」前掲書）。

「商業実践」については、在学生であり、のち教師としても勤務した糸魚川祐三郎（小樽高商勤務後、文部省を経て、戦後は和歌山大学学長となる）の、次のような回想が興味深い（糸魚川「小樽高商の商業実践」『緑丘』第三七・三十八号）。

商業実践の授業は、いつの時代でも学生にはきらわれ勝ちであつた。学生が唱う数え歌に、「九つとせ、子供だましの実践も……」とゆうのが出来てゐた。そのくせ卒業前に、学力の貧弱なのを痛烈に見せつけられるのは、実践の授業であると述懐した学生もあつた。授業のうちで時間のたつのを忘れてゐるのは実践の授業だと言つた学生も多い。とにかく強制もしないのに、土曜午前三時間ぶつ通しの授業をした後、夕方暗くなるまで居残つて、取引の整理や調べものをする学生が多くゐたのも事実であるし、学生が授業中、如何にもたのしそつうちにさかんに活動してゐたのも事実である。商業実践には何かある。

さらに、商業教育の専門家である糸魚川は、「永年に亘り小樽高商が実施した商業実践と、送り出してゐる卒業生の中で多数の商業教員を通じて、日本の商業教育における商業実践とゆう学科と、それによる商業教育一般とに非常な大きな貢献と影響を与へてゐることは疑いない」とも指摘する。

創立一〇周年の一九二一年一〇月八日の『小樽新聞』の特集に、「高商生が「学窓の三年」という手記を寄せている。

透徹した論理と鋭過ぎる位の観察力とを以て、宗教学、文学、哲学と多彩な文化的背景のもとに、真面目に経済学を切り拓いてゆく大西教授の講義、搦手から切り込む高島教授の繊細な、而も鋭いフレッツシュな講義、又音吐朗々として只管科学を押しつけてゆく武田、国松教授のレクチュアや、さてはプラトーン、カント、スピノーザに造詣深い小尾教授の、哲学の為の哲学に非ず、生の為の哲学を流石は一糸乱れぬロジックを以て進めてゆく講義など、若い学生達はすっかり恍惚となつて、只一心にペンを走らせるのでした。ひつそりとした合併

教室の只だ蚕の桑をかむ様な紙とペン先の軋る音ばかりが濛ふ空気に、初夏の頃、裏山になく鶯の声などが、のどかにひびいてきたことを覚えてます。

高島は「経済学」の高島佐一郎、武田は「商業学」・「商業実践」の武田英一、小尾は「修身」・「ドイツ語」の小尾範治である。この学生は、「入学匆々の一時間をぶつ通し英語で鮮かに喋られ」た中村和之雄や、生徒の拙い文章のすぐ傍に、これは又美しいチヨークの跡を見せて御自身の文章をか、れ、然もにこにこし乍ら「どうです？」と曰はれる」苦米地英俊の授業にふれ、さらに外国人教師らの醸し出す「エキゾテイックな、カレツジライフに相応しい、香りの高い雰囲気」を懐かしみ、「とにかく一言にまとめたならば、文化的な三年だった……どこを見てもそこには智識と曰ふもの、限りなき輝き、その追究の極みない悦楽、さうした気分が調子の高い句はしきで校内に漲つて居た」と記している。やや褒めすぎの感はあるが、恵まれた学習環境が提供されていたことは疑いない。注目すべきは、学校側の力を注ぐ実践的な科目は印象に薄いらしく、哲学的な授業や「只管科学を押しゆく」ような個性的な授業が、人気を博したようである。

とはいえ、学生にとつて授業は一般的に苦痛であり、つまらないものでもあった。ある学生は、「手形法なんて実に厄介なものだ。一面の紙を世の中では何の面倒もなく、自由に使用して居るではないか、誰もこんな面倒なことを一々知つて使用して居るものなどはあるまい。法律は万一の不都合を予測して、その始末をつける為の設備に過ぎないのだ」と愚痴をこぼす。そして、「いろんな講義を聴いて居ると、俺は益々学問といふものが何だか解らなくなる、深く研究すれば、どれも面白くなるものかと怪しまれる。俺には研究して見る根気が出さうもない」「外に考へる事があると、講義はちつとも耳に入らない。それでも手は機械的に動いて、誤りなくノートを採る」と正直である。しかし、この学生も『死線を越えて』で知られる社会運動家の賀川豊彦の来校に接すると、「俺はあの熱と

力が欲しい。俺の働く時機は、これから始まるのだ」と情熱的である（次郎「講義を聴きながら」『校友会雑誌』第三号、二年一月）。

なお、現在の授業からは想像もできないが、小樽高商にとどまらず、高等教育の諸学校の授業はすべてといつてよいほど、教師が自らのノート・著作を読みあげ、学生はひたすらそれを筆記するというノート制のスタイルであった。先の高商生は冒頭で、「ノートの早かつたのでは、何と曰つても大西、高島の二教授、続いては武田、小尾、国松の諸教授でした。内容が充実してる丈早くなるのでせうが、一時間に五六頁から七八頁も飛ばれる時には、泣きたくなつたものです。辛かつた。けれ共、それは快よい苦しさでした」と回想している。

試験

いつの時代も学生の難関は試験である。「成績考査ニ関スル細則」〔小樽高等商業学校一覽〕により、「平素ノ学業成績」「臨時試験ノ得点」「学年試験ノ得点」が成績判断の規準となつた。「商業文、英語、商業実践、商品実験、第二外国語及体操」は、「平素ノ学業成績」で判断される。「臨時試験」は一回以上、第一・第二学期におこなう。「学年試験」は、第三学期の学年末における試験で、比重が重い（「各科目ノ学年成績ハ、学期評点ノ平均ニ学年試験ノ得点ヲ加へ、之ヲ二除シタルモノトス」）。

「卒業ノ成績ハ三学年間ノ学年成績ヲ考量シテ之ヲ定ム」となっているため、「卒業成績の優良を期するには、イヤでも一年の時から勉強せねばならない」（『高商評判記』『小樽新聞』、一九二二年二月二九日）。おそらく、それ以上に学生を苦しめたのは、学年進級の壁である。「学校規則」には、各学年の「考査ニ合格セサル者ニハ、次学年ノ始ヨリ原学年ノ課程ヲ再修セシムルモノトス」とされており、現在の単位制よりもはるかにきびしい制度となつていた。すなわち、「成績考査ニ関スル細則」で、「各科目ニツキ、学年成績四拾点以上ニシテ、其平均点六拾点以上ヲ得タル者

ハ進級セシメ、其他ハ原級ニ止ム」と定められていた。一科目でも学年成績が三九点以下の場合、また全履修科目の平均が五九点以下の場合ハ、「原級ニ止ム」ことになり、すべての科目を再履修しなければならなかったのである（その科目の学年成績が七〇点以上の場合ハ、履修を免除）。

長崎高商では「平素品行優良学業励精前途望ヲ属スヘシト認メタル者」（『長崎高等商業学校三十年史』）は、五〇点未満・四〇点以上の学科科目数が二科目以内を条件に進級を認めていたが、それにくらべてかなり厳格といえる。七二名を数えた第一期生が、卒業時に五〇名となったことの一因には、この進級条件のきびしさにも一因があったと推測される。最初の学年末試験は六四名が、一二年度末は五八名が、そして一三年度末、つまり卒業を控えた学年末は五四名が受験した。最後の試験で、四名が振り落とされたことになる（『成績原簿』）。

そうはいっても、実際の試験には教員のさじ加減が大きく左右する。たとえば、大西猪之介の課す試験は、「良い方はグンと高点で、悪い方は又余り情けない、中堅になる部分が欠如してゐる」という。「高商評判記」（一九二二年二月二九日）は、「問題の性質上、余儀ない所」と同情的である。最初の年度の「経済学」の「臨時試験」は、二時間で次の三題の論述であった。

一、領土の拡張は、人口の増加より生ずる経済的圧迫を除去するの力を有するや

二、社会生活の進歩発展は、之を一元的に解釈すべきものなりや、或は又二元的に解釈すべきものなりや

三、経済政策及び経済政策学の本領に關し、カントの哲学は何を教ふるや

学生の冷や汗ぶりが想像されるが、大西には「下級の十点二十点といふ憐れなのを救ふ為、最高に百四十点を付したなどの珍談」（同、二月二六日）があったという。

さらに、「高商評判記」（一九二二年二月二九日）には、「一体、高商の初学年では、甲種商業出に利便が多い、と云ふのは、商業学でも商品学でも、或は簿記学、商業算術など手にかけて覚えがある。が、中学出には全然初対面だ、殊に其の一番に弱るのは珠算だ、除算九々さへ疾うの昔に忘れてをり、小学生の気になりてやり直さねばならぬ」とある。一方で、「中学出の利益は、物理、化学に關聯を持つ工業大意や応用理化学にある」として、「其の一得一失、二年三年に至らば、優劣遽に云ひ難からう」と述べている。この中学校出身者と商業学校出身者の学力の相異は、学科目編成の修正によって対応することになる。

入試状況

渡辺校長の臨む最後の卒業式となった一九二一（大正一〇）年三月の「学事報告」には、「本校ノ設備ハ、素ト三百名内外ノ生徒ヲ収容スル目的ナリシモ、目下五百有余ノ学生ヲ教養スルヲ以テ、教室等ニ於テ不足又ハ狭隘ヲ感ズルヲ免カレズ、就中商業実践室ハ最モ此憾多クシテ、不便尠カラザルヲ覺ユ」（『小樽高等商業学校一覽』一九二〇年度）とあった。この年度の入学者数は一八八名、卒業者は一一一名であった。

一九二〇年度の学生在籍数は四九四名で、この年、初めて山口高商を抜いた。翌二一年度には長崎高商をも抜いて五五九名となった。一学年一〇〇名定員の規模が、ほぼ一〇年後には定員一八〇名規模となった。受験倍率も当初一〇年間では一九一七年に急増し、一九九年の実質六倍をピークとする。小樽高商への評価が高まったと同時に、全般的な実業教育熱の高まりを反映している。この時期、試験場は小樽と東京のほか、仙台（第二高等学校）におかれている。

当初、入学試験問題は中学校卒業程度を基準にしており、商業学校卒業生には不利であった。このため、一九一六年六月の「学校規則」の改正により、中学校出身者には中学校の学科目から、商業学校出身者には商業学校の学

科目から選択できるようにした。この変更もあってだろう、一九一七年の商業学校からの入学者は前年と同数の二七名にとどまったが、一八年には四六名と急増した。一九年にはまた二七名に急減したものの、二〇年には五一名となる。二二年の入学者は中学出身者一三四名、商業学校出身者五四名（このうちの一名が、小樽商業出身の小林多喜二である）の合計一八八名であった。全般的に、山口や長崎両高商に比べて、小樽の場合、商業学校出身者の割合は高い（以上、各年『文部省年報』による）。

一九一七年四月一日と三日の『読売新聞』に、三月末に実施された小樽高商の入試問題が掲載されていることも、全国的な受験状況を反映するといつてよいだろう。「国語漢文科」（国語・漢文・作文〔課題は「春の海」、毛筆、書法を含む）三時間、「歴史科」一時間半、「英語科」（書取・聴取〔英語科教員の読みあげ〕を含む）三時間半、「算術及代数科」三時間、「商事要項」「商業算術」「商業簿記」一時間半のほか、三日目には体格検査と口頭試問があった。次のような出題である。

歴史科 国史に表はれたる我邦と朝鮮及支那との関係中、著しき事項を時代を付して、順次列記せよ。

和文英訳 商業を営まんには信用は欠く可からざる要素なり。信用を得んとせば、誠実を旨とせざる可からず。

算術 甲乙丙丁の4人射的をなしたるに、甲は5発中3発、乙は3発中2発、丙は6発中5発、丁は7発中

6発の割にて的中し、其的中せざりし数は各相等しく、的中数の割合は37発なりしといふ。各自の発射数如何。

商事要項 荷為替に就き説述すべし。

商業簿記 或人、甲某より現金五千円を借り受け、之を資本金として営業を開始せり、此の場合に於ける仕訳を掲げ、其の何故に正当なるやを説明せよ。

一九二〇年の入試状況が、『校友会誌』第一六号に掲載されている。受験地別（仙台会場はなし）では、小樽の一八三名に対して、東京は六〇五名と圧倒的に多く、小樽高商が全国区であることを物語る。学校別では、中学校卒業が七六三名（合格者は一六〇名、小樽中学からは一〇名）、商業学校卒業者が一七二名（合格者は五五名、小樽商業からは五名）となっている（ほかに、師範学校卒業者と専検〔専門学校入学者検定〕合格が各一名（ともに合格））。「無試験検定」⇨推薦入学では、中学からは志願者一二八名に対して合格者一七名、商業学校からは志願者七一名に対して合格者二九名であり、商業学校がかなり優位に立っている。試験検定での中学卒と商業学校卒の合格率は、ほとんど差異がない。前述のように、入試問題がそれぞれ選択できるようになっていたため、商業学校卒に不利に働かなかつたといえよう。いわゆる現役・浪人生の割合などは不明である。

「落伍」者

一九二〇（大正九）年五月の第九回新入学生宣誓式において、渡辺校長の告辞のなかに、「此毎回の新入学生及び卒業生の両者員数を比較するに、後者が前者より減少せると、三割乃至四割を上下す、而して之が減少するは凡て三年学修の央なかはに於てするを例とす」（『校友会誌』第一六号）という一節があつた。つまり、難関の入試を突破して入学を果たしたものの、順調に三年で卒業できない学生がおよそ三分の一に上る、という警告である。第一期生の場合、入学者七二名は卒業時に五〇名に減っていた。一九一五年四月の入学者一二四名に対して、一八年三月の卒業者は九三名で、七五%となる（ここには前年までのいわゆる留年者も含まれる）。第一期生から第七期生（一九一七年四月）の入学者合計は九四六名であるが、その第七期生までの卒業生合計は七〇五名となり、その割合は七五%である。これはそれまでの留年者の卒業を加えた数字であり、入学者数が卒業時に「三割乃至四割」減少するという渡

辺校長の言を裏づける。この卒業までの「落伍」者の多きは、学校側の頭を悩ます問題だったろう。

渡辺校長は、この多数の「落伍」の主たる理由を、「実にかの青年客気の過まる所、「モラル」の弛緩、謂ゆる墮落其の者に外ならず」と指摘する。そして、「ローレライ」の例を引き、「凡そ墮落の因たる、其の始め、姿を現し来るや、悪魔にあらざして却て美しき無邪気なる容姿を被り来る」として、「始めを慎め、而して微を戒めよ」と注意を促す。学校側にとつては不名誉なことゆえ、表に出ることはまだだが、一九二〇年三月一日の『小樽新聞』は、「悲しむべし 緑ヶ丘学園の腐敗」という記事で、「現に在校の学生中、連夜の不純の巷を彷徨する不良分子の少くないのは、ヨク日撃する処である」と報じている。

「企業実践」

一九二〇（大正九）年度には、「企業実践」の科目が新設された。二〇年度の「学事報告」には、「本校ハ従来「商品実践」ナル本校独特ノ設備ノ下ニ、商品学ノ要旨ヲ授ケタルモ、工場ニ関スル智識概念ニ乏シキト、且ツ時局ノ影響ニ伴ヒ、益々商工業連絡ノ必要ヲ認め其筋ノ許可ヲ得テ、本学年ヨリ企業実践ナル学科ヲ新設シ、商店及工場管理、原価計算等ヲ包含スル所謂商工経営学ノ応用的研究ヲ行ハシメ、一方本校特設ノ商業実践ト併行セシメタリ」（『小樽高等商業学校一覽』、一九二〇年版）とある。

この科目の新設は渡辺校長の掲げる「実際に通じる人」の養成をさらに一歩推し進めるものであったが、実際に立案し、主導役となったのは、国松豊であった。「簿記計算学」と「商業学及商業実践」を担当していた国松は、一八年二月三日の『小樽新聞』に載せた談話のなかで、「我国戦後の商工業の経営法には、科学的研究が必要である」と述べ、アメリカの先進的なテラー・システムに言及する。そして、「元來経営学や工場管理法などの学問は、我国に於ける如く、学者の専有物として教室の講義にのみ一人すべきものでなくて、實際家が其の研究者たると同



企業実践室

時に、実行者たらねばならぬ性質のものである」と述べていた。こうした発想のもとに、まず学生に「経営学や工場管理法」などを実地に教授する機会を設けようとした。

すでに文部省から予算を獲得していたらしく、翌一九一九年二月二四日の『小樽新聞』は、「小樽は東京など、違って、手近に工業組織を見学するに適当な機関もなく、よしあつても商業学校としての工業に関する実践は、儲かる事を先づ眼中に置いての上でなくてはならぬから、単なる製造法の研究などと違って、特殊な設備を要する」として、「此計画は、本邦に於て小樽高商を嚆矢とし、商業が単に交換ではなく、自ら生産と握手する現代の趨勢に適應する良策である」と期待を込めて報じていた。

六月から第四寄宿舎の隣接地で石鹼工場の建設がはじまった（二月竣工）。「総坪五十坪、建築機械総経費、二万五千円余円」で、「五馬力の電動機に依つて、各機の調革が渡つて居る」（『小樽新聞』、一九二〇年五月三一日）。石鹼の製造は、「其作業が電力に機械力に、また手工に、其種類が多種多様な為め」、教授—研究の大胆目たる「製造業の科学的管理法（また倉庫管理法）並に原価計算等に最適」（同、二〇年五月二〇日）という判断で選ばれた。工場は「浮石鹼、洗濯石鹼月額四千貫、機械練り化粧石鹼二千打を製出」する能力をもっている。化粧石鹼が一個一六銭、洗濯石鹼が一個五銭という販売価格が設定された（同、五月三一日）。

建築・設備費用が約二万五千円とは、学校総経費の三割前後の高

額である。他高商にはないこの施設は、やはり渡辺校長の文部省に対する腕力によつて実現したといえよう。

東京の石鹼業界に知己を有する小原亀太郎が主任格で、製造部門は小瀬伊俊と西田彰三が担当、二人の助手と男女職工各一人が作業にあつた。なお、この「企業実践」の授業が開始されてまもなく、国松と小原は渡辺校長とともに名古屋高等商業学校に移り、そこでも「企業実践」を試みることになる（ノート・文房具製造の工場を設置）。

工場完成を前に、一九九年度から「商工経営」と「企業実践」の科目がスタートした。「教授要目」によれば、いずれも第三学年の配当で、前者の内容は「工場管理学、商店管理学、原価計算学」から成る。「企業実践」は、「商業実践」と「同一時間ニ於テ、生徒ヲ二組ニ分チ、交互ニ之ヲ課ス」もので、「講義。実践工場ノ設備及組織、製造工場、科学的管理法ノ応用」と「実習。製造、工務及管理法、原料及製品ノ処理、会計及原価計算事務」（教授要目）『小樽高等商業学校一覽』、一九一九年版 という組合せとなつていた。

後年の実習状況の回想がある。一九三一年入学の塩田守正によれば、「工場には専属の助手のような人がいて、原料の油脂（豪州牛脂が最上と云われておりました）を大きな釜で煮て苛性ソーダを加えて石鹼の下地を作つて下拵えをして呉れて、実習の学生達はこの生地を足踏式の型に入れペダルを踏むと、「高商」と字が型押しされ黄土色の石鹼が出来、これをあのブルー紙の包装紙で決められた通り包装をして、所謂「高商石鹼」が完成する（断片的想いで）、小樽商大昭九会『丘友の便り』第一七号）。

学生の実習で製造した石鹼は、「価格ノ低廉ナルニ比シ、其品質ノ良好ナルヲ見ル」（『小樽高等商業学校一覽』、一九二二年版）と自負された。二二年一〇月七日の『小樽新聞』は、大阪工業試験場から「本邦品中、優良第一」と認定されたとして、「世界唯一の企業実践工場」を、次のように報じている。

此工場の組織は研究部、企画部、製造部、原価計算部よりなつて居て、研究部は一般市況及事業上関係ある一



企業実践工場

切の研究問題を取扱ひ、企画部は能率増進の目的に叶ふ様、科学的見地から製造上の企画を行ふのである。製造部は企画部の立てたる企画と方針とに基いて、実地石鹼の製造に当り、原価計算部は出来上つた製品の原価を精密に計出し様と謂ふ、流石さすがに行届いたものである。学生の実習は、製造命令の発行取扱ひ、原材料の配合、同庫出くらだし、作業指導書、作業手順及び企画の諸票の発行取扱から動作研究、時間研究、標準化の法則、個人差に基く職工の選択配置等、科学的管理法の実地練習は勿論、原価計算の実際をも習練するものである。

一九二〇年一〇月の高商創立一〇周年記念祭では、全国から集めた各種石鹼やポスターの展覧会が呼び物とされた。最終日には、工場公開と「高商石鹼」の廉売も実施された。一〇周年記念の「カレジ石鹼」は、一個二〇銭という「驚くべき廉価」(『小樽新聞』、二〇年九月三〇日)という。こうした工場公開や一般への販売は、学校の記念日ごとに実施され、市民の人気を呼んだ。また、学生が夏休みなどに帰郷して郷里で販売することもあった。学生はわずかながらもアルバイト代を稼ぐとともに、対面販売による商売のコツを実地に学ぶことになった。

しかし、初めての試みである実践工場の運用には多くの困難がともなった。一九二〇年八月一八日の『小樽新聞』は、「石鹼の販路や原料の研究に 西田さんが上京する 高価な原料や販路不足に高商製造所は損失続き 放つて置いては製造所が持切れぬ」という見出しで報じている。西田彰三を出張させ、「製品の販売先、原料の供給で、外に同科の製品が民間工場の製品と比較して、品質、形態、装飾其他が歓迎されるか付うかを調査研究」させた。赤字が生じることに、渡辺校長はその原因を考察することも重要な勉強だと泰然としていた。

図書館

小樽高商が開校して約一年後の一九二二（明治四五）年六月四日、図書館が開館した。九一坪の閲覧室と二〇坪の煉瓦造り書庫という規模である。丸善・同文館などの出版社や関一・福田徳三らからの著書の寄贈八二冊などから出発し、その一年後には約四千冊弱の蔵書に達し、毎年千冊程度のペースで増加した。和書だけでなく、洋書も積極的に蒐書していた。『校友会雑誌』第三号（一九二四年三月）に、図書館員栗栗童生は「図書館便り」を寄せ、まだ開館から日が浅く「教科書蒐集時代」であること、経済・商業関係の雑誌の不足という様子を述べている。そして、興味深いのは次のような、現在ともあまり変らぬ図書館の利用状況である。

図書閲覧者の数は公表してもよいが、実は少々……エート理想通りに参らぬ節もない事はないから始らくお預りとして、大体を申すと本学年の開始期、殊に四月二十日以後は大入客止めの盛況！ 腰掛の新註文で会計課へ駆け足と申す次第で有つたが、痛ましや、腰掛の新らしいのが出来上つて、スツタモンドの手続をして居る内に、閲覧者は潮の引くが如くに、西の海だか何処だけヘサラリ！ 但し憂ふる勿れ、昨今の入館者には彌人馬皆無の一心不乱、人口の密度は先以て適度、空気の腐敗する虞も先づは少し。



図書館

になっているが、百年も前に、こうした非常に早い取組みがあったであろう)。創立一〇周年の時点で、和漢書は「卒業論文及学生調査報告」を含めて九一二四冊、洋書は五二五二冊を所蔵していた。

さらに栗童生は「我国諸学校図書館に先んじ、新らしき試み」の実行を二つ紹介する。一つは、最上級生の「三年生及生産調査会受命者」へ対し、其指導教官の承認を得たる範囲内に於て、一定部数以内の図書の館外帯出を許すと定めたる事である（「生産調査会受命者」とは、前述の「実践調査報告」の作成にあたる学生と思われる）。意外だが、当時「我国諸学校」では一般に学生は館内での閲覧のみに制限され、館外貸出しは教職員のみが認められていた。そうした通例にとらわれず、小樽高商の図書館は試験的に「館外帯出」を認める措置を試みたわけである。栗童生は、その実験の結果を「満期日迄に悉皆故障なく返済と申す、上々吉の成績」があがったとして、次年度も続行の見通しという。

もう一つの試みは、「校外者に対する閲覧票の発行」である。近年本学図書館も含め、多くの大学図書館が市民に開放されるよう



陳列館階上

商品陳列館

本館と図書館の間にある、建坪六〇坪の煉瓦造りの建物は商品陳列館である。『校友会雑誌』第三号は、そのニシンの孵化順序標本中の「卵申上ぐ」というユニークな館内案内記を載せている。収藏品は「寄贈購入共合せて農産品六百十四点、林産品二百二十三点、水産及畜産品二百七十二点、鉱産品三百七点、工産品一千八百五十六点、参考品百九十四点」に上り、「商品実験科、商品理化の材料となり、絶へず長み廊下を実験室に運ばれて、生徒諸君にお目にか、つて居」るほか、一般公開や館外への貸出もおこなっている。「各標本には簡単な説明札の外、統計図表等がとりどりに掲げられ、生産順序を示す実物もあれば、写真の扁額もあり、我貿易統計の大表」もあった。

創立十周年を迎える一九二二（大正一〇）年には、収藏品の数は三九〇〇点余に達した。寺田貞次と志摩清一郎が運用責任者となっていた。

修学旅行

実務教育中心主義を標榜するにふさわしく、実社会を実地に歩く修学旅行の実施にも熱心だった。開校一年目には、一〇月に「鮭漁其の他観覧及び攻究」〔『小樽新聞』、一九二一年一〇月三日〕を目的に、石狩町方面の一泊旅行を敢行する。一九二二（大正一）年一〇月の場合は一・二年合同で、「夕張」炭坑、（苫小牧）王子製紙会社、（追分）骸炭製造所、（岩見沢）農業学校、（砂川）引材工場、木材防腐工場、（江別）富士製紙分工場、（札幌）農科大学、製麻工場、麦酒会社等」を二泊三日の日程で回るといふ盛りだくさんの内容である。「製紙工場に現代の進歩せる経営を

目致せる一方、苦小牧街の訛しきは余りに之に相応はず」(「会社めぐり」同、一〇月二九日) などの見聞を深めることができた。「費用総額六円余の中、生徒の負担は二円のみ、残額は学校の支弁する所」(同、一〇月二日) とあるように、学校の意気込みは強い。

その白眉は、ウラジオストックから朝鮮と西日本の各地を回る三年生の大旅行だった。「将来社会に立ち、大に活躍せんとする学生は、十分に世界を知り、之れを比較するだけの素養をつくらねばならぬ」(「修学旅行記」『校友会雑誌』第二号) という目的を掲げ、一九一三年七月一日、小樽港を出発し、ウラジオストック、清津、元山、釜山、長崎、神戸、大阪、伊勢、横浜と回り、八月六日に東京で解散となる。三年生のほぼ半分にあたる二四名が参加し、寺田・志摩の二名の教員が引率した。渡辺校長は、卒業期の近い一行にとつて、「嫁入の見合に行く様なもの、将来の嫁入先に愛想を尽かさずか、其れとも気に入らる、かを定むるに至るから自重して呉れ」と送り出したという。

『小樽新聞』には旅行中には各地から通信が、帰国後は「環行三千哩」(マイル)として四五回におよぶ「小樽高商修学旅行記」が連載された(「芳」の署名があり、おそらく卒業後、博文館に入社した阿部芳治の寄稿と思われる)。ウラジオでは「果物雑貨市場の中心たるバザル地区を視察し、尚浦港第一の百貨商店たるクンスト、イ、アルベルス商会の経営内部にまで立入り、其設備等も詳細見学して得る所多く」(二年七月二十五日)、朝鮮の元山では「案内を得て鮮人部落を視察す、其衣食住に關し相応に知識を得たる」(同八月三日) という状況である。

長崎では、長崎高商を視察し、「小樽高商と比較考量するの便を得た」(同、八月四日) ほか、神戸では神戸高商の各施設に「其設備頗る完全にして、流石に長崎、山口両高商より数頭地を抽くものあり」(同八月五日) と感嘆する。



「環行三千哩」(『小樽新聞』1913. 7. 11)

このあと、一・二年生は主に道内を、三年生はウラジオオストックをはじめ海外にまで足を延ばす修学旅行が恒例となった。一九一五年七月のウラジオ訪問では「滞在中連日観劇、宴会等に招待され」るなど、「歓迎は非常のもの」だったという。ウラジオでは柔道の試合もしている（『東京朝日新聞』一九一五年七月四日）。

一九一七年度の「学事報告」によれば、「第三学年ハ七月上旬浦塩、ハルピンヲ経テ奉天、大連、京城、釜山等ノ滿洲及朝鮮方面ニ於ケル商工実況ヲ見学セシメ、第二学年ハ九月二数日、第一学年ハ九月下旬、新領土樺太ノ拓殖状況ヲ視察シ、何レモ其効果ノ大ナリシヲ認ム」（『小樽高等商業学校一覽』一九一七年度版）という具合である。三年生の旅行は、苦米地と石橋が引率し、五九人が参加している。残りの三年生は、小樽から船便で北陸・関西方面を視察している。

ロシア革命とシベリア出兵のため、一八年以降、ウラジオ方面は中止され、「南滿州及朝鮮」（一八年）、「鮮滿及青島方面」（一九年）、「網走及釧路方面」（二〇年）と変更された。

就職・進学

一九一五（大正四）年三月一四日の『小樽新聞』「小樽高商生と就職口」に、「本年は経済界不振の影響を受け、各会社銀行等何れも減員或は現状維持の有様なるに、同校昨年度卒業生の評判宜しき為、諸方面よりの採用方申込み多く、今回卒業すべき五十名中三十五名は既に就職確定し、残り十五名も数日中には交渉纏まるべし」という一節がある。ここから、いくつかの興味深い事実が引き出される。

まず、学生自身が会社訪問をして内定を取りつけてくる現在の一般的な就職の仕組みと異なり、学校に「諸方面よりの採用方申込み」があり、それに応じて学校が学生を推薦する方式だったことである。これは少なくとも高商時代を通じて一貫しており、したがって学校側にとって、いかに多くの有力な就職口を確保するかが、頭を悩ます

問題であった。また第一回目の卒業生を出す前の「続高商評判記」には、校長の役割は「良教官を拉致する事と、卒業生を世話する事、と其だけで資格が充分だ」（一九二三年五月二五日）という声があると紹介している。

渡辺校長も、この「卒業生諸子に適職を授け」ることに腐心していた。後の名古屋高商校長時代の卒業式告辞（一九二九年）で、「己れが養成したるものを、適職にハメて見なくして、どうして、自分の教養方針がよかつたか、わかつたか、と云ふことが分るか」という所信を持って、「会社銀行の重役方へ面会申入れのツラサ」も乗り越えた」と述べる（『乾甫式辞集』）。一九一七年一月一日の『小樽新聞』には、「責任を以て卒業生を推薦する学校当局者には、普ならぬ苦心が要る」として、近いところは学生を直接面接に振り向けるが、「遠い所は、全然採用を校長に委ねて来る」ので、「随分適材を適所に置く」ことに苦勞しているところある。小樽高商でも、一九三〇年前後の不況期には、就職口の確保や新たな開拓のために、校長らが全国を奔走することになる。

おそらく、このことと関連して、就職活動が実質的に三年生の段階で始まり、四年生の前半ではほぼ確定してしまう。現在とは対照的に、卒業間際で決まるが多かった。なかには卒業後になってしまふこともあった。

もう一つは、すでにこの第二回目の卒業生を出す時点で、小樽高商卒業生に対して「評判宜しき」という評価が生まれていたことである。『大阪毎日新聞』連載の「北海道みやげ」でも、「全国の重なる大会社、銀行等を初め、北海道方面に於ても非常の同情を以て歓迎せられ、卒業前疾くに就職を決して一人の落後者なく、孰れもナカナカの好評なり」（一九一四年一月二日）と記していた。

さて、第一回卒業生の進路は「銀行二十名、外国貿易業二六名、鉱業八名、製造業五名、汽船及運送業四名、諸会社五名、個人商店二名、教員三名、官吏一名、外二進シテ研学ニ従ハントスル者二名、計四十六名、未定四名」となっていた。求人依頼に応えられなかったものも数件あるという（『小樽高等商業学校一覽』、一九二三年版）。第三回卒業生を送り出した一九一七（大正六）年三月の「学事報告」では、就職希望者の全員確定を伝え、その理由に第一次

世界大戦下の経済界の好況とともに、「前卒業生ノ成績ノ一般ニ知ラレタル」(同、一九一七年版)ことをあげてきた。

この一九一七年の就職状況について、先の『小樽新聞』は「日一日と緊張する頭 高商卒業生の売行よし」という見出しで報じている。「素晴らしい景気」として、求める人材について、「学術優秀品行方正」はともかく、「近來は体格の頑強な活動力の強い一種剛健な者」という希望から「運動家」が推薦されているという。また、「如何なる銀行会社でも符節を合した様に、筆跡の美事なのが第一の要件であるらしい」(一九一七年二月一五頁)。一八年三月の「学事報告」では、卒業生への需要増大について、「本邦近時ノ経済界ノ興隆活躍ニ伴ヒ、商工大会社ハ勿論、京浜阪神地方ノ個人経営ヨリ、新会社組織ニ代ハレル所ニ於テモ、高等専門教育ヲ受ケタル者ヲ需要スルコト益々多キヲ加ヘタ」(『小樽高等商業学校一覽』、一九一七年版)と観測されている。

第一次世界大戦中の好景気にもない、就職は「売り手市場」で、小樽高商の場合でも二倍から三倍の求人申込み数であった。しかし、真価は不況下において問われる。第一次大戦後の恐慌下の二二年三月の就職状況について、『小樽高等商業学校一覽』は次のように記している(一九二〇年度版)。

| | | | |
|-----------------------------------|------|------------|------|
| 今回ノ卒業生百十一名ノ卒業後ニ於ケル方針ヲ類別スレバ、概ネ左ノ如シ | | | |
| 商社会社 | 八名 | 工業会社 | 十一名 |
| 銀行 | 二十七名 | 汽船会社 | 三名 |
| 官庁 | 一名 | 商業学校 | 一名 |
| 自営 | 十七名 | 商科大学又ハ帝国大学 | 二十二名 |
| 推薦中ニ属スル者 | 二十一名 | 計 | 百十一名 |

顧^{わづ}フニ、昨年以來実業界ノ頓挫ニ連^つレ、本年卒業生ノ就職モ如何ニ成リ行クカラ氣遣セシニ拘ハラズ、本年度卒業生中本校ヲ介シテ就職ヲ希望スルモノ約七十名ニ対シ、採用方申込アリシハ、四十ヶ所ニシテ、其需要人員百余名ニ達セリ、之ヲ兩三年前ノ多数ナル需要ニ比スベクモアラネド、今日ノ不況ニ際シ、斯^かル多数ノ申込ヲ得タルハ誠ニ本校ノ光榮トスル所ニシテ、卒業生採用申込先ト卒業生各自ノ就職希望ト一致セザル為メ、需要申込ヲ充ス能ハザリシハ、亦甚ダ遺憾トスル所ナリ、就中商業学校教員トシテ採用方申込アリシ八十数校ノ多キニ及ビシモ、是亦一名ノ外、他ハ其需ニ応ジ得ザリシハ、実業教育發展ノ折柄、寔^{まこと}ニ遺憾トスル所ニシテ、是亦将来一考ヲ要スベキコトナルヲ信ズルナリ

ここで注目されるのは、「商科大学又ハ帝国大学」への進学者が二二名とかなりの人数にのぼることである。商科大学は東京高等商業学校が単科大学として昇格した東京商科大学を、帝国大学は東北帝国大学を指す。さかのぼると、一八年に専攻部（東京・神戸両高等商業学校専攻部）三名、一九年に専攻部九名、そして前年二〇年は「商科大学又ハ専攻部」二四名で、急速に上級の学校への進学熱が高まってきていることがわかる。

『校友会雑誌』第一六号の「東京商科大学入学成績に就て」という記事では、小樽からの志願者二五名中、入学試験に合格した一七名の名前が載る（南亮三郎・郡菊之助らの名前がある）。これを他の高商と比べると、受験者七名中合格六七名の神戸高商は別格として、大阪市立高商（一〇名中七名）、山口高商（七名中二名）、長崎高商（二名中二名）を、小樽は遥かに凌駕する。この高い進学熱と実績は、その後にも継承される。実践的授業とともに、大西らによって醸成された学理的研究の気運が学生にも広がりつつあった証左であろう。

さて、創立一〇周年を迎えた一九二一年一〇月の時点で集計した卒業生の職業別をみると、全般的な特徴として、やはり商事会社・銀行が多い。それでも、商事会社が一九一八年と一九年に全体の半数以上を占めたあとは漸減す

るのに対して、銀行への就職は漸増傾向にある。また、工業関係の科目や「商品実験」「企業実践」などを反映してだろう、工業会社や鉱山会社への割合も高い。上級学校へは、前述のように二〇年前後の増加がめだつ。また、地域で見ると、北海道内が全体の約二割で、東京が一割五分、そして大阪・兵庫とつづく。海外では、中国がもっとも多く、植民地の朝鮮のほか、ニューヨーク・ロンドン・シアトル・シンガポール・シドニーなど、世界各地におよんでいる。

就職の体験を、素哲生は「社会へ出て」〔校友会誌〕第一八号、一九二〇年一〇月と題して、次のように語る。

父からはM i会社に入れと云はれて、深く会社の事情を知らぬ自分は、何はともあれ大きな会社に入れば、めつたに飯の食ひはぐれはあるまい位に考へて、M i会社入社希望と教務に出して置きましたが、段々考へて見ると、どうもM i会社は官僚主義である等と云ふ話を聞かされて……M i会社を急に止すことにして、M b会社入社希望を教務に出しました。已すでに此時には誰は行処どこだとか、誰は月給いくらだとか云ふ話の喧さわがしくなつて居つた時であります……自分自身を考へて見ると、浅ましいながら唯M b会社と云ふサウンドに惚れ込んで居るだけであつて、何がどうのと云ふ理想があつた理でもありません。

さて愈よ面会まの日がやつて来ました。所謂口頭試問の日がやつて来たのです。併し、自分には何等確信があつたり、縁故があつてM b会社を希望する理でもないのです、この口頭試問に何故君は当社を希望したのか、と云はる、事が何より恐ろしい事でありましたが、まあ幸いにして、それも無難で済み、君は愈々当社に備入れて、月給何円を給するが良いかと云はれた時は、先づ安いとホツとしました。

素哲生は、さらに入社当初の「心が急げば算盤は益々合はぬ。字は拙い処へもつて来て、益々下手になる……小

樽高商を出て居ながら、商業出にも Inter するぢやないかなんて云はれる」という、泣きたい体験も語る。それでも、「店の事情が判るに従つて、次第に落着きと技倆とが具つて来るものである」。そして、後輩に向かつて、「是非英語丈けは充分出て欲しい」、「兎に角一番大切なものは、そして殊に帝大出等にめつたにひけをとらぬのは、商業英語の研究」とアドバイスを贈る。

卒業式

一九一四（大正三）年三月二五日、第一回卒業式がおこなわれ、五〇人が緑丘を下つていった。渡辺校長は「諸子が在学中豊富に蓄積したりと信ずる学力も、社会に於ける活学間に比すれば、畳の上の水練、若しくは井中の見識に過ぎざるべし」として、「宜しく小心翼翼として先輩又は先覚者の指導を仰ぎ、常に謙讓の態度を以て事に処すべし」（『乾甫式辭集』）と自重をうながした。卒業生の発展に小樽高商の真価が問われると考え、「得意満面意気揚々」となることを戒めた。

卒業生総代となった湯本矯夫は、「過去三年間ハ吾等夫ノ書ノ外ニ知識ヲ求ムルナク、同稔校友ノ外ニ人ヲ有スルコトナカリキ」（『緑丘三十五年史稿』）と述べて、緑丘での青春に「哀別ノ情」を告げた。遠くドイツの地にあつた大西猪之介は「小樽高商第一回卒業生諸君に」手紙を送り、「開拓者の精神が如何に尊きものなるか」「母校を立派にするは、諸君自らを立派にする所以」（『小樽新聞』、一九一四年三月二六日）と呼びかけた。



第二回卒業記念写真

渡辺校長が『乾甫式辞集』（この冊子は、名古屋高商能率実践工場
で印刷したものである）に収録した卒業式の告辞をたどろう。

一五年の第二回卒業式では、第一次世界大戦下、「経済上の世界的
位置に就ては、尚ほ貧弱国の列を脱し能はず」として、「諸子高から
んことを欲するか、低きより初めよ」と叱咤する。第三回卒業式で
は、世界的な「経済的大戦争の開始」のなかで、「諸子は訓練せられ
たる商士として将に経済界に入らんとす」として、「業其者」を理想
とすること、その実現のための「忍耐と勤勉」を説く。第四回卒
業生には「富勿追とみをひらなれ」に加えて「至忠至信」の言葉を、第五回卒業生
には孔子の「文行」の二字を贈る。

一九年の第六回卒業式では、「黄金は地下に在て、智ありて之を知
り、勇ありて之を掘る者、必ず之を得。諸子、成功を欲するか、先
づ事を謀るの智を練磨せよ、大富を欲するか、先づ小富を積みめよ」
と述べる一方で、「諸子、富を欲するは可なり、然れども財を貪る勿
れ。財を貪る者は富を得ずして身を危うす」と説く。最後となった二〇年三月の卒業式では、「諸子に饒するに、本
校に於て鍛へ上げたる大小一口を以てし、平和の剣と銘せり」という。「平和の剣」とは、「士魂、商才の二刀」を
意味し、「能く富を集め、能く富を散ずるは商家の道なり。能く富を集むれば国富に、能く富を散ずれば民幸なり。
然れども商才なくして能く富を集むるは難く、士魂なくして能く富を散ずるは尚ほ難し。故に曰く、論語と算盤と
は、国民民福の宝刀なり」と論じるのである。



卒業写真 (1918)

後年、渡辺は、小樽高商時代を回顧して、「武士は食はねど高楊枝」の封建時代の国民道徳観と、「素町人の分際」と言ふ実業蔑視観との調節に殆んど当惑した」と語る。その際に導きの糸となったのが、洪沢栄一の「論語と算盤」であったという。産業立国の「基礎工事は論語であらねばならぬと云ふこと、又算盤を離れたる社会道徳は無意義であると云ふこと」（『聖者は時代に輝く』『乾布式辞集』）という洪沢の考えに傾倒した渡辺は、学生たちにそれを伝えようと努めた。

なお、渡辺は卒業式の終りに、「諸子よ、永く忘るゝ勿れ。諸子を国家的人材たらしめんとして養成したるは、本校なり。本校の名声は全く諸子の双肩に懸る」（一九一五年三月、『乾布式辞集』）と付け加えることを常とした。そして、卒業生はその期待によく応えたというべきであろう。

小樽高商への全般的な評価が高かったことは、入学試験の倍率や就職の求人状況などにある程度反映しているはずだが、二〇年三月の卒業式に来賓として臨んだ文部大臣中橋徳五郎の祝辞の一節——「実ハ私ハ一昨年迄ハ小樽高商ヲ知ラナカツタ、申訳ノナイ話ダガ、役人ニナツテカラ初メテ知り、色々聴イテ見ルト、校長サンモ立派デ教授ニモ多クノ俊秀ガ集ツテキルトノ話デ、之ハ結構ダ……東北ニ一モ高商ガナク、ソノ奥ノ小樽ニアツテ、而モソレガ評判ガヨイ、此評判ノヨイ処カラ出ルノダカラ、諸君モヨイ訳デアラウ」（『小樽高等商業学校一覽』一九二〇年版——）もそれを裏づけよう。

開校後まもなくの「続高商評判記」に「中央にても「小樽高商はい、さうだ」と評判せらるゝ、に至つた」（一九二三年五月一三日）とあった。一九一九年三月二八日の『読売新聞』は、各学校を紹介する「学生界」シリーズのなかで「進取的な小樽高商」を取りあげ、「今年で僅かに第六回卒業生を出した許りであるが、今や東北北海道地方を威圧するの観がある」として、「同校は目下模範的高等商業学校ならんと努力して居る」と記している。先の中橋文相の言にもあるように、小樽高商の社会的評価は着実に高まっていた。

第三節 教員陣の充実へ

「北辺の高商へ」

創立まもない小樽高等商業学校にとって、学校としての真価を發揮するためには教育を充実させることが不可欠だった。現在の研究体制の保障（時間的・人的・経費的）と奨励と比べると、帝国大学などはともかく、戦前の専門学校においては、おそらく学校側のバックアップ態勢は十分に整備されていなかった、というべきであろう。小樽高商の場合も、学校としての研究機関誌は一九二六年の『商学討究』創刊まで待たねばならないし、大部屋の教官室はあっても研究室が置かれるのは遅かった。教員への個別の研究費の配分もなかったと思われる。研究面は個々の教員の主体的な努力に負うところが大きかった。

小樽高商の声価を固め、高めるために、渡辺校長は教員陣の充実特に意を尽くした。のちにその招聘の苦勞を、「他所で名をなした人々を招聘したことはない、又招聘せんとしたこともない。大抵は卒業したてのホヤホヤか、若しくは中等学校在職中の人々に就いて詮議して居る。大学専門学校に目ぼしき学生は居らぬのか、中等学校に優秀なる先生は居らぬか、常に鵜の目鷹の目であさつておりました」（『商業教育二十五年の回顧』『乾甫式辭集』）と語る。その努力が着実に実を結んだ恩恵を、一九一九（大正八）年に入学した越崎宗一は享受することになる。それについて、『郷土史的自叙伝』で越崎は次のように回想する。

渡辺校長の最も大きな苦心は、中央から遠く離れた北辺の高商へ、いかにして優秀な教官を引張ってくるかにあった。しかし敏腕な校長の努力の甲斐あって、商業、経済、商品、外国語に優秀な人材の教官を招くことが

出来た。とくに英、独、米、仏、支から外人講師を招くことが出来たことは、国際貿易上の有為な実業人を養成するという高商の特色からいって、最も強味を加えた。専任教官の手を廻し得ない科目には、東京高商から関一博士、佐野善作博士、三浦新七博士、福田徳三博士、神戸高商から津村秀松博士、京都大学の小川郷太郎博士、札幌農大（現在の北大）から森本厚吉博士、高岡熊雄博士、橋本左五郎博士などという学界の権威者に兼任講師になっていただき、集中講義を計画するなど、渡辺校長の識見手腕は大したものだった。私はこの内三浦博士、福田博士、津村博士、高岡博士の講義に列したが、このことによって私の向学心は大いに刺戟されたことを告白する。

大西猪之介の任用

外国人教師については後述する。また「集中講義」||「臨時講演」については前述した。問題は、「中央から遠く離れた北辺の高商へ、いかにして優秀な教官を引張ってくるか」である。その典型的事例を、渡辺校長自身が次のように語る。小樽高商の至宝といわれた大西猪之介の任用の経緯である（『大西猪之介経済学全集』第一巻所収の紹介文）。

想へば小樽高商創立の当時、余は学校が僻遠の地にあるため、特に人材を容れて大いに校名を宣揚するの必要を感じ、経済学の方でいろいろと人物を物色したのであるが、相当の人で北海道まで出掛けて来る勇者はなかなか見つからなかつたのである。それで余は種のよい雛から育てあげるに如かずと思ひ付き、当時の東京高商専攻部在學生の中に之を物色して遂に大西君に白羽の矢を立てたのである。専攻部の方からも又君が出身校たる神戸高商からも、稀に見る逸材だとの折紙を貰つたので、余は辞を厚うして君が小樽のために一肌ぬぐべきを乞うたのである。君はそれを快く諾してくれ、卒業と同時に君は小樽に出て来たのであつた。



講師嘱託開申 大西猪之介
 (「職員進退ニ関スル書類」、1911年度)

余は約束通り君に先づ洋行の機会を与えた。

四ヶ年半遊学の後、小樽の講壇に立つた君は、外に対しては学校の名声を、内にあつては学生の声望を一身に負ふたかの観があつた。当時は経済原論の講座の如何に依つて高等商業の名声が決まるやうな傾向の時代ではあつたが、とにかく大西君あつて小樽は輝いたやうなものである。

大西猪之介は、京都市立商業学校・神戸高等商業学校を経て、東京高等商業学校専攻部に入学し、一九一一年七月七日に卒業、同三十一日に「講師トシテ商業学経済学ノ教授ヲ嘱託」された。まだ、二二歳七か月の若さであり、大西より年上の学生もいた。俊才の誉れ高かつた大西を、まだ創立日が浅く、しかも「僻遠の地」である小樽に招聘するため、渡辺校長が採つたことは、校長自らが「辞を厚うして」懇請に努めたことを第一とすれば、第二はかなり好条件での待遇の提示である。

大西の最初の報酬は年八五〇円である。半年後の一九二二年一月に赴任する苫米地英俊の場合は、東京外国語学校英語本科を卒業後、同校の非常勤講師などの経歴を持ちつつも、年俸は八〇〇円であつた。年齢は、苫米地が四歳上である。東京帝国大学や京都帝国大学を卒業して講師として赴任する場合（八木又三・木村善太郎や寺田貞次ら）は、年俸九〇〇円であつたから、大西の年俸は破格とはいえないまでも、校長の裁量による上限のものだらう。さらに、一年半後に教授に昇格すると、「十級俸」＝千円となる。

また、「余は約束通り君に先づ洋行の機会を与えた」とあるように、校長は赴任からまもなくの海外留学の機会を約束し、実行した。一二年四月一五日付の文相宛に、大西について「本校講師トシテ就職以来成績最モ優良ニシテ、将来教授トシテ適当ノ者ト相認メ候」（庶務課「職員進退ニ関スル書類」、一九二二年度）として、外国留学を稟申している。これにより、大西は、赴任後約一年半経った一三年一月、「経済学及商業学研究ノ為、滿三箇年間独国及英国へ留学」する（出発直後に教授）。その際、大西も渡辺校長宛に、「小生儀、他日留学満期帰朝ノ上ハ、校規ノ命ズル所ヲ守リ、自己ノ学力ノ及ブ限り、学生々徒教授ノ任ニ当ル可キ事ヲ誓申候」（庶務課「職員進退ニ関スル書類」、一九二二年度）という「誓書」を提出している（国松豊の場合も同様）。

途中でアメリカ留学を追加し、帰国したのは一七年八月であり、「四ヶ年半遊学」となった。その後、急逝するまで僅か四年半に、「外に對しては学校の名声を、内にあつては学生の声望を一身に負ふたかの觀」があつた。その業績は、南亮三郎・高島佐一郎編集の『大西猪之介経済学全集』全一一巻に集大成される。

校長の期待を裏切らず、大西は「昨秋來任以來居然として高商教授界に濃き一線を画し、生徒の心理に自覺的變動を齎もたらした」と、『小樽新聞』「高商評判記」は二回にわたつて大西をとりあげる。その一節には、「大西講師の担任は経済学と商業学とだが、単に専門にばかり没頭して居らず、凡百の事相に關して一隻眼を有し、殊に文学の嗜好深きは講義の中に窺はれる、語学も英独共に堪能、明敏な頭腦と精力とに任せてグングン図書を読む、而して眼光紙背に徹する事を以て私ひまかに矜ほる」（二年五月二六日）とある。そして、学生に「新しき気分」を鼓吹したことは前述した。

東京商科大学の上田貞次郎は、『大西全集』を推奨するなかで、「大西君は自分が極めて旺盛な研究心の持主であつたゞけに、他人の研究心を鼓吹する力に至つても亦非凡なものがあつたので、同君の教を受けた為めに発奮して学者たらんことを志した学生も少からずあつた。又小樽高商の弁論部が催した講演を通じて同様な刺戟を受けた人

は、現に北海道全体に多数あることでありませう。かくして小樽高商が北海道における学問の中心として重きを為さんとしつゝ、あつたことは私の実見した所」〔全集〕第二巻所収〕と記している。

「首席採用主義」

公募を原則とする現在の教員採用と異なり、高校や専門学校の教員人事は校長の裁量権の一つであり、校長の絶大な権威の源泉であったと思われる。渡辺校長は小樽高商における教員の採用にあたり、「我輩はわが緑丘学園には日本一の教官を採用している」と自負していたという（関与三郎「緑丘の学風を培うもの」〔緑丘五十年史〕）。それを具体的な任用例からみると、三つほどに類型化することができる。

まず、先の大西猪之介のように、帝国大学あるいは東京高商専攻部の優秀な学生を卒業直後または二、三年のうちに採用することである。先の渡辺自身の言葉でいえば、「種のよい雛から育てあげるに如かず」である。「完成された教授よりも、若い最優秀の教授となるであろう人々に着目されて、帝大、一ツ橋、東外語等の最優秀卒業生を講師として迎え二、三年後には在外研究員として、若き学者の憧れの的である海外留学生として送り出し、常に清新發刺の気を学園に注入された」〔緑丘の学風を培うもの〕と、一九二三年卒業の関与三郎は記す。「修身」・「ドイツ語」を担当した木村善太郎は、それを「首席採用主義」〔温故帳から〕『緑丘五十年史』と呼ぶ。渡辺は人脈を駆使して、各大学や高商専攻部の教員陣からの推薦を積極的に求め、そのうえで渡辺自身の面談によって採用の判断が下されただろう。

創立期には、英語の八木又三（東京帝大英文科卒業、大学院に半年在学、一九一一年四月赴任）、「修身」・「ドイツ語」の木村善太郎（東京帝大哲学科卒業、大学院に一年間在学、一九一二年三月赴任）、「商業地理」の寺田貞次（京大帝大史学科卒業後、大学院に半年在学、一九二二年四月赴任）らが該当する。『小樽新聞』連載の「高商評判記」



八木又三

には、「どの教官も夫々それぞれ在学中の秀才で、卒業の際首席だった人が一二にして止まらぬ」（一九二二年二月三日）とある。なかでも大西とともに「小樽高商の二異色を以て誇るべき」（同、二月四日）八木は、その「人格の人」が称揚される。「其の蘊蓄うんちくの深き点に於て、殊に専門となる詩文学に於ては窺知きちし難きものがある、日本語は迪々たんととしく言ひ乍なら、リーディングとなると訥どもらぬ不思議」（同、二月二十七日）と評された。

先にふれた苫米地英後の任用も、渡辺の言によれば「卒業したてのホヤホヤを招聘したもの」（『商業教育二十五年の回顧』）である。ただし、英語の授業のほかに柔道を教えるほか、学校事務や寄宿舎の舎監を兼ねることが予定されており、その「授業又ハ執務ノ成績良好ナルトキハ、機ヲ見テ、教授又ハ生徒監ニ奏薦スルコトアルヘシ」という条件付きであった（庶務課「職員進退ニ関スル書類」、一九二一年度）。苫米地の教授昇格はやや遅く、一六年三月となる。

渡辺の在任後半では、「保険論」の高松勤（東京高商専攻部卒業後、京都市立商業学校教諭を経て、一九年五月に赴任、二〇年七月に海外留学出発）、最初の「フランス語」教師目黒三郎（東京外国語学校卒業後、二〇年四月赴任）、「金融論」の佐原貴臣（東京高商専攻部卒業後、二〇年四月赴任）、「経済原論」の大熊信行（東京商科大学専門部専攻科卒業後、二一年四月赴任）らが教えられる。

なお、高松の採用に関して、次のような措置がとられたことが注目される（『公文雑纂』一九一九年、国立公文書館所蔵）。

右者は小樽高等商業学校助教二任用致度候処、同人ハ学歴経験ヲ有シ、且目下実業教員欠乏ノ際、同校所在地ノ如キ僻遠ノ地ニ在リテハ容易ニ其人ヲ得難キ事情有之候ニ付、特ニ二級俸給与致度



高松勤

「目下実業教員欠乏ノ際」と「僻遠ノ地」にある小樽高商は「容易ニ其人ヲ得難キ」という二つの理由をあげて、特例的に俸給の上乗せを求めたもので、内閣の承認をえている。もちろん学校側からの要請にもとづいた措置で、同様な配慮は高松以外にもなされたと推測できる。高松も、赴任一年後には二年間の欧米留学に出発する。

やはり在任後半期に母校の教壇に立つ小樽高商出身者も「首席採用主義」で一三年四月、栃木県宇都宮商業から無試験検定組の第三期生として小樽高商に入学し、一六年三月にほとんど首席に近い成績で卒業、すぐに東京高商三年に編入、翌一七年四月に同校専攻部に入學し、福田徳三の指導を受ける。卒業とともに、一九年四月、小樽高商講師として赴任、二〇年一月には海外留学に出発する（帰国は、五年後の二六年二月）。すでに小樽高商在学中から、渡辺にとつて意中人であつたとも考えられる。

手塚の「限界利用均等の法則」やゴッセン研究が「緑丘の学問に、新風を吹きこむ」とともに、大西経済学に「夢中になりながらも、経済学そのものは、ここにある」（大谷敏治「人間 手塚寿郎」と直感する学生もいた）。

なお、この「首席採用主義」に付随するのが、研究面での優秀さゆえに、赴任数年後に、また外国留学から帰国後に、他大学・高校などに引き抜かれることである。実際にそうしたことはしばしばあったが、渡辺校長は当人のためと学界のために、意に介せず、再び「種のよい雛から育てあげるに如かず」主義を貫く。大西についても、「余は君が大成の後、東京或は神戸に出て日本の経済学界を双肩に荷ふべきことを心私ひそかに期待し、又その機会を作りたいと思つてゐたのであるが、惜しい哉不意に斃れた」（『大西全集』推薦文）という。幸いに、創立期と異なり、小樽高商の声価は高まつており、依然として北辺の「僻遠ノ地」というハンデはありつつも、新たに優秀な若手教員の確

保が可能であつた。

実践的人材の登用

二つ目の教員採用の方法は、実践的人材の登用である。人材確保を急がねばならない創立期には、この採用法が顕著である。

国松豊は東京高商専攻部卒業後、私立商業学校で簿記・商業実践科を担当し、教務主任の職にあつたときに、小樽と呼ばれた（一九一一年三月赴任）。「教務課長として、又簿記学及び商業算術の担任として校中の権者（きざいもの）」、「如何なる方面にも往くとして可ならざる無き才人の典型」（「高商評判記」「小樽新聞」、二年二月五日）と評される。一九一三年に赴任して「商品学」・「商業算術」を担当する志摩清一郎は、東京高商専攻部を卒業して実業に従事後、一九〇九年から国松と同じ私立商業学校で教えていた。国松と志摩は、「首席採用主義」にも該当する。

「商品学」・「商品実験」の小原亀太郎は、試験検定で理科教員の免許を得て、広島県内の中学や商業学校で教えていたとき、小樽で任用となる（二年六月赴任）。その上申に際して、文部省から「商品実験」に関する学歴がないと指摘されると、一二年三月二二日付で、次のような事情を説明して、了解を求めた（「職員進退ニ関スル書類」、一九一一年度）。



小原亀太郎

本校学科目中、商品実験ノ一科ハ本邦高等商業学校中ニテハ本校特設ノ学科目ニシテ、外国ニ於テモ或ハ最モ斬新ニ属スルモノナランカト被存候。従テ当初、該科教員ヲ得ルハ非常ニ困難ニシテ、種々詮議ヲ重ね候モ、該科ヲ一人ニテ満足スル教員ヲ得難ク候。然ルニ商品ハ之ヲ実験ス

ル上ヨリハ、自ラ化学製造品、器械製造品、天産品ノ三種トナリ、本道ヨリ外国へ輸出スル貿易品ハ全部海産物、農産物其他ノ天然物ニ候。依之、差当リ応用化学者ヲシテ商品ノ化学製造品ノ実験ヲ担任セシメ（中略）小原龜太郎ハ出身ハ博物科教員檢定試験合格者ニ候モ、広島高等師範学校助手在職中、其後県立広島商業学校教諭転任後、職務上並ニ余暇ニ研究セシ所ヲ充分調査セシニ、商品ノ天産品ニ属スルモノ、実験ヲ担任セシムルニ相当ノ学力アリト認定致スニ由リ、助教授任用方上申ニ及タル次第二候。

「商品実験」という科目実施への熱意と適任者を探しだすまでの苦労がよくわかる。

最初の教員として採用された「体操」担当の藤田稔の経歴は、日清戦争に曹長として従軍し、予備役編入後、教員免許状（体操科）を取得、各地の中学校での勤務（この間に日露戦争にも従軍）を経ての赴任であった。「商業文」の竹谷辰郎は、前職が広島商業学校長で、小樽と長崎高商が「引張合ひをして遂に來道を見るに至つた」という。専任生徒監として選ばれただけに、「流石生徒の扱ひ振は手に入つたもの」（「高商評判記」、一二年二月二四日）とされる。一五年一月に、函館商業学校長に転出する。

その後も「商業実践」・「簿記」などの担当者は、商業学校教員などからの採用が多い。村瀬玄（一九九年八月赴任）は、商業教員養成所を卒業後、熊本県立商業学校教諭（簿記科）・小倉市立商業学校長などの一六年余りの職歴があった。根岸正一（二〇〇年六月赴任、「簿記」・「商業実践」担当）も、神戸高商卒業後、香川・富山・岐阜・福井県の商業学校教諭を約九年間経験していた。西尾広の場合は、文部省実業学務局の雇から開校とともに小樽高商の職員となり（一九一一年五月）、その直後から「商業実践」の授業を担当し、一九一九年九月には助教授となつている。「法律学」の橋詰益彌も、雇を経て、助教授になつた（二〇〇年九月）。こうした人材を全国からどのように探索したのか、詳細はわからない。



西田彰三

一九一八年に講師（二〇年に教授）となる「商品学」の西田彰三は、札幌師範卒業後、「直に初等教育者として立ち、付属小学校の訓導奉職中、認められて北大の助手となり、更に抜擢されて小樽高商に迎へられ、やがて教授の栄職につ」いた人物である。こんにやくや植物繊維の鑑定を専門とするが、「象牙の塔に籠る高踏的学者ではなく、街頭にいでて商人を指導し、又はこひを容れてどしどしと商品鑑定をなし、世の為知識を活用して居る」（『学窓新点描』『東京朝日新聞』、一九三三年四月三日）とされる。西田は『小樽新聞』にしばしば寄稿している。

人材の登用といえば、「英語」の浜林生之助の場合が典型である。福島県の福島中学校で教えていた浜林を見出したのは、苫米地英俊だった。その苫米地は、「初代渡辺校長の高邁な識見で中等教育界から、俊足の逸材を抜擢して学園の教授陣営を強化することになり、自分が命を受けて駆け廻り、五人の候補の筆頭に挙げた」（『浜林生之助君の面影』『緑丘』（『藁目版』第三五号、一九六四年）と語る。校長の指示は、「読む、書く、話すの三条件を兼ね備へ、しかも特に傑出した力のある者を中等教員中から探してくれ」（『学窓新点描』『東京朝日新聞』、一九三三年四月二六日）というものだった。

浜林は苦学しながら三重県師範学校から広島高等師範に進み、一九二二年から鹿児島県川内^{せんだい}中学校教諭を務め、福島中学での一年勤務を経て、二〇年三月、小樽高商教授となる。その後、二七年間におよぶ小樽高商での教育・研究面の本領発揮は、渡辺校長や苫米地の慧眼ぶりを示そう。その講義ぶりは、「悠々迫らず、しかも流麗そのもの、様な語調による名訳は、生徒の魂をとらへて微妙ゆう玄の境にいざなひ、うつとりとして居る間に、重点に対する注意を閑却した生徒が、あとになつて狼狽し、話の筋にのみとらはれたことに対して、悔を覚えるなどはしばしばある事実である」（『同前』）という。



濱林生之助

一九二六年卒業の大塚武雄は「丸ぼうずの浜さん」として、次のように小樽高商にとってかけがえのない存在であった「人間浜さん」を描いている〔緑丘〕〔舞台版〕第三五号。

花やかな舞台で常に脚光をあびながら大向うをうならせていた名優^上苦^下さん等の一団ありとすれば、この後で黙々と舞台設営や黒幕として緑丘劇場を支えていた方々のなかに浜さんの大きな存在を見出すのである。凡そ英語の先生といえはハイカラなものとされていた。その当時みるからに村夫子然としていつも丸ぼうず、気どりもなく、てらいもなく人間浜さん丸出しで学生陶然その名訳にききほれて英文学のよさを胸底に秘めると同時に、肌をとおしてしみいった人間浜さんのよさを身につけて卒業したわれわれは誠にしあわせであった。小樽の卒業生は地味だが、真面目だとその定評はこんな先生がおられたおかげと考えるが、どうか。

他校からの割愛

もう一つの教員採用のパターンは、ほぼ創立期に限るが、他の高商・大学からの割愛である。山口高商教授であった坂本陶一、神戸高商教授であった井浦仙太郎と武田英一、第七高等学校教授の中村和之雄、そして京都帝国大学助教授の伴房次郎である。

一九〇四（明治三七）年に東京高商専攻部を卒業し、〇六年八月以来山口高商教授であった坂本陶一は、〇九年三月末、商業学研究のため、英米独への三年間の留学に出発していた。驚くべきことに、この出発直前、坂本は文部省実業学務局長宛に、次のような「誓書」を提出していた〔職員進退ニ関スル書類〕、一九二一年度。



坂本陶一

小官儀 今回外国留学生ヲ被命候ニ付キテハ帰朝後ハ、新設セラルベキ小
樽高等商業学校ニ奉職可仕、為後日、一書相認置候也

おそらく山口高商においては外国留学の順番がなかなか回ってこないという事情があったのか、新設の「北辺ノ高商へ」の転任を条件に、文部省と坂本の間で留学の機会を早期に与える、という了解がなされたのであろう。ベルリン滞在中に校長に内定した渡辺はこのことを知らされ、在イギリスの坂本に書簡を送り、赴任について確認を求めたと推測される。坂本は、この「誓書」通り、留学中の一一年四月、正式に小樽高商教授に任命され、翌年四月、帰国した。「統高商評判記」(「小樽新聞」一四年五月二六日)は坂本について、次席教授・教務課長の要職にあるとしたうえで、「其講壇に立つよりも其著書を通じて一層エライ氏は、また教授としてより教務課長として一層エライ。学者よりも事務官だと評しても叱らるゝ事はない筈だ」と評した。一八年七月、退官して実業界に転じる。

井浦仙太郎の場合も、坂本と同様な事情があったのかもしれない。さらに武田と中村については、先の大西獲得の切札の一つとなったと考えられる海外留学の機会提供、ないし留学期間の延長を招聘の呼び水とした可能性がある。

神戸高商教授(一九〇九年七月赴任)であった「商業学」の武田英一の場合、一九一三年七月に小樽高商に迎え、早くも同年一〇月には独・英・米国での留学三年間が発令された(出發は翌年三月)。途中で二年間の延長が認められ、帰国したのは一八年一月である(図書館主幹などを経て、一九二三年三月に東京商科大学付属商学専門部に転任)。

また、七高教授であった中村和之雄についても、休職して「學術研究ノ為英、独両国へ旅行」中であつたが、四年四月、文部省から「英語研究ノ為一箇年半英国及米国へ留学」が発令されるのは、おそらく渡辺校長の働きかけがあつたと推測される。この留学中の四四年一〇月に小樽高商教授に転任すると、渡辺は、中村の留学期間延長（二か月）を文相に求めている。

伴房次郎の招聘

伴房次郎は欧州留学から帰国してまもなく、一九二二（明治四五）年七月に京都帝大から小樽高商に移る。年齢・学歴・職歴からいっても渡辺校長に次ぐ首席教授の位置にあり、後に順当に第二代校長になるように、学内外に重きをなし、学生たちにもその丁寧な授業ぶりで慕われた。ただし、京都帝大助教授からの転任の理由は不可解である。「統高商評判記」（一四年五月二六日）にも、京都帝大時代の教え子の一人で「曾て高商講師たりし岸法学士が、「伴さんは小樽などに来る人ぢやない」と上つて居たが、到頭来る人になつた」とある。

この謎を解く手がかりが、一九二一「推定」一月二日付でバリから出された渡辺宛の伴の長文の書簡である。その文面によれば、渡辺から寄せられた「小生身上ノ問題ニ付テハ御校ノ利害ニ関セス、進テ尽力被下候趣」（庶務課「職員進退ニ関スル書類」、一九二一年度）について、伴は深く感謝する。一九〇二年、東京帝大法科大学を首席で卒業した伴は、〇三年に京都帝大助教授として赴任、〇八年六月、民法・商法研究のために英独仏へ三年間の留学に出発していた（一年延長して、四五年六月に帰国）。しかし、おそらくこの京都時代に、何らかの問題が生じ、伴は辞職・転任を考えていたらしい。

実は伴の「飄然録」（「緑丘」第九四号、一九三六年七月五日）という回想に、留学前のこととして「小樽高商へ赴任の事は当時既に内命を受けて居た」とある。これが事実とすれば、先の山口高商の坂本の場合と同様に、留学を条件の一



渡辺校長宛伴房次郎書簡（「職員進退二関スル綴」1911.2）

つとして、文部省との折衝で小樽赴任が合意されていたことになる。ただし、伴の場合には留学機会の提供ということとは別の、京都帝大におけるトラブルがあつたと推測される。先の書簡には、「大学問題立消ト相成候上ハ、御校へ転任ノ儀ハ確定セルモノト存スル外無之ト御申越ノ通ニ御座候」とあり、「大学問題」が伴に降りかかつていたことがわかる。推測を重ねれば、渡欧中の渡辺は、そうした事情を文部省を通じて知り、ベルリン滞在中の伴と面会し、小樽への赴任を要請しただろう。おそらく、そこでは結論が出なかつたために、正式に小樽高商校長となつた渡辺から、バリに移つていた伴に、再度の招聘の要請がなされた。それに対する返書が、この書簡となる。

小樽から寄せられた渡辺の好意に、伴は「小生カ如何ニシテ身ヲ処スヘキヤノ御尋ネニ対シテハ、実ニ御答ニ苦シミ申候」としながらも、次のように記して、応諾の姿勢を示す（同前）。

御承知ノ通、商業学校ト云フモノニハ何等ノ経験モ無之、且御校職員中ニモ未タ一人ノ知り合モ無之候得ハ、小生ハ只命ニ従ヒ罷出テ一般ノ様子ヲ承リタル上、受持科目ニ付キ義務ヲ尽スヘキカト存居申候。小生ノ最モ心ヲ苦メ候義ハ、実業学校タル御校ニ於テ、小生カ所期ノ如クニ学問ノ研究ヲ続ケ得ルヤノ点ニ御座候。小生ハ従来ヨリ身ヲ学問ニ奉シ度素志ヲ抱キ居リ、所謂教育者タラントハ考ヘ不申候得ハ、一朝学問ヲ抛チテ、自己ノ智識ヲ深クスルヨリモ、自己ノ既ニ有ス

ル所ヲ教ユル方ニ重キヲ置ク学校ニ奉職スルハ、誠ニ生涯ノ目的ヲ一擲スル次第ニシテ心外ニ存申候。幸ニシテ貴校図書費ガ他校ニ比シテ多額ニテ、其内ヨリ幾多法律書ノ購入ヲ許サレナバ、小生ノ幸ニ御座候。(中略) 御校教員中ノ一人トシテ、小生ノ最大希望ハ此点ニ御座候。他ハ同僚諸氏ノ好意ヲ得テ不肖ノ身、幸ニ其任ヲ尽スヲ得ハ大幸ト存シ申候。

「実業学校」ゆえに「生涯ノ目的」である研究生生活がつづけられるかどうかを率直に吐露する。「飄然録」にも、「高商といふものが、自分には全く新しく何を如何に教へる所なるやもわからない」とある。おそらく渡辺からは図書費の面での優遇が示唆されていたのだろう、伴は迷いつつも転身を決意する。さらに、「仮ニ小生志ヲ得ストスルモ、為メニ貴校ヲ煩ハスコトハ小生ノ欲セサル所ニ御座候。万一ニモ小生ノ人格ト思想トカ貴校ノ風潮ニ適セサルカ如キコト有之候ハ、宜敷御注意相願、自ラ匡正致度」(同前)とも書いていた。

この意向を受けて、渡辺校長は京都帝大に直接出向いて伴招聘の挨拶をした模様である。一二年三月九日付で、京都帝大法学長の仁保亀松から渡辺宛に、「伴氏ノ件、昨日ノ教授会ニ於テ全ク断念スルコトニ決定仕候」と伝えてきた。仁保はさらに、「愈貴校ニ於テ同氏ヲ御採用ノ上ハ、何卒同氏ノ名誉回復ノ為メ、格別ノ御心添」(「職員進退ニ関スル書類」、一九二一年度)を懇請している。先の「大学問題」とこの「同氏ノ名誉回復」はつながっているだろう。その後、三月二八日付で、京都帝国大学総長菊池大麓より、伴の割愛について「差支無之」(「職員進退ニ関スル書類」、一九二一年度)という返答があり、伴の帰国直前の五月二八日、文部省に正式に上申された。七月一三日、伴は小樽高商教授に任命された。九月上旬、小樽に着任するが、その「赴任の前後と其途中は寧ろ寂寥の感が強かつた」(「飄然録」という。単身赴任のため、しばらく大学時代の友人河原直孝の家に同居する。

伴に関わるもう一つの不可思議は、小樽時代において、公刊された研究がほとんどみられないことである。先の

書簡にあるように、「身ヲ学問ニ奉シ度素志」を抱き、「自己ノ既ニ有スル所ヲ教ユル方ニ重キヲ置ク学校ニ奉職スルハ、誠ニ生涯ノ目的ヲ一擲スル次第ニシテ心外ニ存申候」と述べていたにも関わらず、小樽時代の伴は「教ユル方ニ重キヲ置ク」ことに、また校長時代は学校の運営に全力を注ぐことに徹し、研究はほぼ「一擲」した模様である。伴の胸中の変化の理由は不明である。

最初の外国人教師

一九一一年（明治四十四）年五月の開校・授業開始を前に、専任の外国人教師の採用が間に合わないために、非常勤の講師の手当てが進められた。四月一八日付の渡辺校長から文相宛の上申書では、アメリカ合衆国マサチューセッツ州出身で小樽区在住のF・W・ステッドマン（女性）への講師嘱託の許可を求めている。専任教師の採用は「九月以降ニアラサレバ備入レ難ク、其間教授上差支有之」さしかえしあるため、「特別ノ御詮議」を求めたもので、「商業実践、主トシテ英商業通信、授業時間一週約八時間」を担当し、講師料は月百円だった（庶務課「外国教師綴」）。当初三か月の契約で、九月以降も継続された。ステッドマンは二年目には「一般英語ニモ堪能ナル者」（嘱託講師ノ義ニ付上申）、一九二二年四月四日付、同前）として、一九二三年五月末に盛岡に転住するまで「英語」の授業（会話）も担当した。ステッドマンの履歴については不明であるが、最初の外国人教師は女性であった。

渡辺は東京音楽学校長時代、外国人教師の雇入れに熱心だったようである。渡辺校長の在任期、東京帝国大学で哲学を講じていたラファイエル・フォン・ケーベルは、嘱託教師として、ピアノ教授のほか、哲学的音楽論にもとづく「音楽史」の講義を受持っている。ヨーロッパから招聘する場合は、在欧州の公使館などに推薦方を依頼している（『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇、第一巻）。そうした経験がここで発揮されたといえようか。

外国人教師フートの採用

開校当初の外国人教師の選考・採用の方法は、次のようなものであった。専任の外国人教師としては第一号となる、ドイツ人ウィルヘルム・フートの場合である。

おそらく渡辺龍聖校長自身が、渡欧中、各国の高等商業教育機関を視察する過程で、現地の日本の大使館や領事館などに事前に斡旋の尽力方を打診することがあったのであろう、一九一一年（明治四四）年九月二十八日付で、ベルギーの鍋島桂次郎公使宛に「外国教師僱聘ニ付人選方依頼ノ件」という書簡を送っている（庶務課「外国教師綴」）。

貴地アントワープ高等商業学校卒業生ニシテ英米国人ノ内、別紙契約書ニ記載ノ学科ヲ英語ニテ教授スルニ堪能ナル者ヲ本校教師ニ僱聘致度候条、貴官ニ於テ適當ト認メラレ候者御人選ノ上御紹介ノ勞相煩シ度、契約書草案相添、此段及御依頼候也



W. フート

また、小樽高商教授として留学中の坂本陶一宛の書簡（一〇月三十一日付）では、この趣旨を伝え、同様に留学中の井浦仙太郎とともに、鍋島公使から交渉の経過を詳しく聴き取るように指示している。「別紙契約書ニ記載ノ学科」とは「商業学」を指す。ところが、鍋島公使は一〇月二十四日付の渡辺校長宛の書簡で、アントワープ高等商業学校で学んで卒業する英米国人は「殆んど皆無ナル」状況のため、「御申越ノ条件ハ之ヲ充タスコト甚タ困難」と伝えてきた。さらに、かつて東京高等商業学校で教鞭をとったことのあるベルギー外務省のある課長の経験として、「日本ニ外国教師トシテ教鞭ヲ執ルニハ、其ノ講義ハ日本ヲ中心トシテ案ヲ立テザルベカラズ、単ニ自己力修得シタル所

ヲ其假生徒ニ伝フルトハ大ナル差異アリ」という忠告も添えられていた。

これに対して、一月一四日付の書簡で、渡辺校長は「英米人ニ限ラス英語テ教授方堪能ナル適任者」の推薦を再度依頼し、それが難しい場合にはドイツのベルリンまたはケルン高等商業学校卒業者からの人選を在独大使に依頼方転送も要請している。「商業学」は「来学年ニ於テ必須ノ学科ニ有之、急施ヲ要スル」という切迫した懇願であった。鍋島公使は二月一六日付で、「当国ニ於テハ差当り適任者見当リ兼候」として、在独代理大使宛に転送したという返事を書き送る。渡辺校長は、翌一二年一月六日付で、在独大使に依頼状を発送した。これは、ベルリン滞在中の井浦にも伝えられた。

そして、一月三一日付の在独杉村虎一大使から外相宛に、人選の見通しがついたことが報告された（この文書は文部省経由で学校に届く）。ここでは、「依頼ノ形式」を欠いているものの、「学期開始ノ時日益^{まじまじ}迫リ居候事故」という配慮をしたとして、在ベルリンの帝国名誉領事ヤコブの推薦により、ドイツ人ウイルヘルム・フートを適任者とする。フートは一八八三年生れ、一九一一年、ベルリン商業大学の五学期間修業試験に合格、その間、イギリス留学や商業教育の経験があった。ベルリン滞在中の坂本陶一が面接し、試問をしている。三年契約で、月俸四〇〇円という待遇である。二月末にベルリンを出発し、四月一五日に横浜に到着している。小樽には二〇日過ぎに入り、やや遅れて新学期の授業を担当した。

フートはその後契約を更新し、一九二〇年二月末まで小樽高商に勤務している。「商業学」・「商業数学」のほか、「ドイツ語」も担当した。『小樽新聞』掲載の「統高商評判記」（一九一四年五月二六日）では、「多くを不確実を知るより少くを正確に知れと勧め、断続して多くを学ぶより連続して少く学べと誨^{おし}へる」という語学の上達法を紹介する。また、「修学旅行に加はつては田舎の旅舎^{やとや}に平気で投宿し、スキーを穿^はいて積雪も踏破すれば、ラケット握つて学生との試合にも加はる。時折は独逸語科の連中をカフェに招^{よん}たりする」と、すっかり学生と小樽になじみ、生活を楽

しむ姿を伝える。小樽を離れて一〇年後にも、彼は「六尺豊かな長軀、すらりと包んだ姿の貴公子的なるに、噴水の如く吹き出さるゝ才智は無味乾燥の商業数学の時間をさへ、時の移るを忘れしめ、又教室外にては、当時小樽唯一のピアノリストとして本校音楽部創立時代の生みの親であり、又外語劇大会の黒幕としても学生間の信望頗る厚いものであった」〔緑丘〕第五二号、一九三二年四月〕と評されるほど、強い印象を残していた。

商品実験のフランク

高商としては根幹の科目である「商業学」などについて外国人教師を得ることが困難であることはフット採用の場合で了解されたはずであるが、渡辺校長は三年目に向けて、新たに「商品学」・「商品実験」と「英語」の外国人教師の採用を図った。前者はドイツ人を候補に、後者はイギリス人を候補に、それぞれベルリン滞在中の井浦仙太郎と在英の中村和之雄に「該科教授上ニ堪能ナル者」の人選を指示している（ともに一九二二年四月一二日付）。なかでも井浦に対しては、「該科ハ本邦高等商業学校中ニ於テ加設セシモノ一モ無之、本校ヲ以テ嚆矢トナス訳ニ候間、該科ニ就テハ化学製造品及物理工芸品等、商品実験ニ最モ精通ノ人ヲ得度切望致居候」〔職員進退ニ関スル綴、一九二二年〕と書き送っており、熱の入れようがわかる。

その後、井浦は適任者としてL・H・フランクを見出し、推薦してきた。渡辺校長は八月三十一日付の在独大使宛の書簡で、フランクについての調査を依頼している。外国人教師と渡辺校長の間に結ばれる契約書（日本語・英語）は、待遇や契約の解除条件などにおよぶ詳細な規定である。一九一三年三月三十一日付で、フランクとの間に結ばれた契約書の一部をみよう（庶務課「外国教師綴」）。

小樽高等商業学校校長渡辺龍聖ト「ルイ、フウゴ、フランク」トノ間ニ於テ、次ノ契約ヲ締結ス

第一条 大正二年四月一日（千九百十三年四月一日）以降満三箇年間、小樽高等商業学校ニ於テ商品学及実験ノ教師トシテ「ルイ、フウゴ、フランク」ヲ備聘ス

第二条 「ルイ、フウゴ、フランク」ハ本国ヨリ日本小樽ニ至ル間ノ旅費トシテ金九百七十五円ヲ受領スヘシ

第三条 「ルイ、フウゴ、フランク」ノ俸給トシテ毎月末ニ一箇月金四百円及手当五十円ヲ受領スヘシ（略）

第四条 「ルイ、フウゴ、フランク」ハ授業時間数及時間割、授業方針其他総テ学校ニ関スル事項ニ就テハ該学校長ノ指揮ヲ受クヘシ、但「ルイ、フウゴ、フランク」ハ授業時間毎週二十四時間ヲ超エ、又ハ日曜ニ執務ヲ命セラル、コトナカルヘシ

「統高商評判記」（一九一四年五月六日）で、フランクは「渡辺校長が躍起となつてゐる商品実験科の顧問として、同科の命運を開拓し、真価を發揮すべき重大なる期待を背負つて立つ」と評されたが、短期間で商品実験科を「本校ニ於テ其授業上特種」（一九一五年三月の「学事報告」『小樽高等商業学校一覽』一九一四年度版）ある科目に成長させた。「篤学な学者で、何時も実験室で熱心に研究してゐると云ふ」（「統高商評判記」）姿勢も、絶大な信頼を集めた。それゆえにといつてよいだろう、四年目以降も契約は複数回更新され、二六年三月末までに及んだ。その後、フランクは子息



フランク契約書（「外国教師級」）

の教育環境を考えて山梨高等工業学校（現在の山梨大学工学部）に移る。

フートもフランクも、最初の契約は月俸四〇〇円で、住宅手当も五〇円あった。これは、渡辺校長の年俸をも軽く上回る。日本人教師の年俸が初年度八〇〇円から九〇〇円であるのに対して、破格の高給であり、後述するように、「掛軸、置物」批判が起きたこともあった。

フランクと同時に、英語教師として、イギリス人のH・W・テラーが赴任した。一八八九年生れのテラーは、特許会計検査人試験に合格し、実務と「商業教育及商業作文並ニ商業算術」の教育経験があった。月俸三〇〇円と住宅手当月五〇円という待遇で、三年契約である。「続高商評判記」（一九一四年五月二日）によれば、「テ氏が其多額の収入を棄て、来朝したのは、全く日本人教育に興味を有つて自らの希望より出でたるに由る」という。

テラーにつづく英語教師の採用にも、在英大使館の尽力があった。その人選にあたり、細部の条件のほかに小樽高商の概況などについて問合せがあった際、渡辺校長は「小樽ニ於ケル外国人衣食住ノ状態」について、次のように答えている（「外国教師備聘方ニ関シ、文部省秘書課長へ回答ノ件」、一四年一月三〇日付、庶務課「外国教師綴」）。

小樽ハ新開地ナルカ故ニ諸物価必スシモ低廉ナリトハ云フヘカラス、然レトモ之ヲ欧州ノ都市ニ比スレハ遙ニ低廉ナリト云フヲ得ヘシ

（略）

食ニ関シテハ当地ハ肉類魚類等ハ本邦内ニ於テモ低価ノ部ニ属シ、野菜就中キャベージ、ポテト、玉葱等外国人ノ嗜好ニ適スルモノハ最モ安価ニ、且良好ノ品ノ供給ヲ受クルコトヲ得ヘシ

果物モ林檎、ストロベリー、サクランボノ如キモノハ本道ノ名産ニテ最モ良好ニシテ且廉ナリ、又牛乳、バター等モ新鮮良好ニシテ安価ナリ

住ニ関シテハ洋風建築モ多少ナキニアラサレトモ借入便宜少ナシ、現在本校ニ於テ傭入教師ハ日本建家屋ヲ借入シ、起居ニ適スル様内部ヲ改造シテ住居シ、月廿五円乃至四十円位ノ程度ニ於テ家賃ヲ払ヒ居レリ
採暖ノ材料タル薪炭、石炭等ハ土地ノ産物ニシテ豊富低廉ナリ

「掛軸、置物」批判

フート、フランク、テラーの三名が揃ったとき、その年俸合計は一万五千円という高額だっただけに、渡辺校長の外国人教師重視の方針は、当初十分に理解されなかった。「統高商評判記」(一九一四年五月二六日)は、「邦人教官なら、同じ俸給で第一流の学者を少くとも五六人——一人と一人を以てしても講義の効果は遙に々々大なるべき——を羅致するにいい」として、「極限すれば床の間の掛軸であり、置物である、座敷を調へる為には無くて済まぬけれども結局贅沢品である」と辛辣に評している。

しかし、この外国人教師重視の方針により、日本人教員の定員が減ったわけではない。「外国人諸給」という別枠予算からの支出であり、それを流用して日本人教員を多く採用するわけにはいかなかった。「統高商評判記」は、「一体外人教師は、之を邦人教官に比して俸給の高いだけの利益が直接に学生に酬ひらるゝものぢやない」と批判的だが、渡辺校長は「俸給の高いだけの利益が直接に学生に酬ひらるゝもの」という信念を貫徹した。何よりも、ほとんどの外国人教師が渡辺校長を筆頭とする学内の信頼と期待に応えて、学生への教育とそれぞれの文化・生活観の伝達に誠実に熱心にあたったことが、この「掛軸、置物」批判を次第に払拭していった。

開校当初、英語の授業では、「話方」の内容として「発音、音調及日用談話、商業ニ関スル談話、問答及欧米作法一般」(「小樽高等商業学校一覽」一九一三年版)があり、ここの部分が外国人教師の担当になった。「欧米作法一般」といえば、次章の時期となるが、伊藤整『若い詩人の肖像』の一節が想起される。マッキンソンの英語の授業を回想し、

いては「備外国人教師」の半分ないしそれ以下だった。

ネフスキーの赴任

フートやフランクのように商業関係の外国人教師について適任者を見つけることは実際上困難で、その後のほとんどの外国人教師は語学関係であった。そのなかでも、世界的な言語学者ネフスキーの小樽高商赴任は注目される。一九一五年夏、「日本ノ文学土俗風俗等研究ノ為メ」来日し、一九一八（大正七）年二月から東京の「明露一商会」に勤めていた。

そのネフスキーに白羽の矢が立つ経緯は不明ながら、庶務課「外国教師綴」中の契約書関係綴によれば、一九年五月二九日付の文相宛の渡辺校長の「露語教授嘱託ノ義ニ付上申」で、ネフスキー採用の許可が求められている。六月一日から翌一九年三月末までの契約で、週約一〇時間の授業、月俸二五〇円（ほかに臨時手当月百円）という待遇である。前任者田中乙の死亡に伴う、かなり急な人事だったようで、文部省の許可が出ると、六月一六日、「授業嘱託ノ許可ヲ得タ、スグ来イ」という電報をネフスキー宛に打っている。ネフスキーは二二日に東京を発って小樽に向かった。



ネフスキー

二〇年三月、さらに二一年三月、「露語授業担当ノ都合ニ依リ」という理由で、ネフスキーのそれぞれ一年間の嘱託継続が文部省に上申され、認められた。月俸は三七五円となった。嘱託としての任用であるが、給与は比較的高く設定された。その経費については、二〇年を例にとると「独逸語教師一名いたすべく 傭聘可致候処、目下時局ノ為当分傭入ノ見込無之ニ付、当該俸給ヲ以テ充用これなき 致度積」（「外国教師ネフスキー嘱託継続方ノ義ニ付稟申」、二〇年三月一五日付、庶務課「外国教

師範」という工夫で捻出したものであった。

ネフスキーは小樽時代も民俗学に関心を寄せ、学生たちには「東北のオシラ様や、性をシンボライズした石像の写真」を見せていた。「授業では実に厳しく、宿題なども沢山課せられ、いつも尻をたたかれた」という。恒例の外語劇ではブーシキンの「吝りんしよくなる武士」を演出している。「流暢な日本語を話し、自由に漢字を書き、家庭では和服に角帯、そして足袋をはいていた。着流しで、妙見筋の花柳街へ、お忍びで出掛けられるという風評もあった」(越崎宗一『郷土史的自叙伝』)。

年末賞与の増俸

創立二五周年の際の「創業の回顧」という文章で、渡辺龍聖は「当時北海道は地理気候等の関係から本土の居住者には異域の如く感ぜられ、それが学校経営上、何かにつけ不利益を蒙つた」(『緑丘』第九四号、一九三六年七月五日)と語る。この「不利益」の挽回策として、渡辺が務めた一つが年末賞与、つまりボーナスの増俸であった。

一九一(明治四四)年二月二日付で、渡辺校長は文部省秘書課長に「賞与支給方」を依頼する。「他校ニ比シ多少増額ノ傾向有之」として、あらかじめ「本年ハ開校第一年ニ際シ、其事務繁多ナルノミナラス、当地方ハ殊ノ外物価高直ニシテ、冬季設備等意外ニ生計上ノ費用要スルコト、他地方ニ類似ナキ義ニ候間、特別ノ御詮議ヲ以テ申請額ノ通御許可相成度」という理由を掲げている。また、竹谷辰郎と国松豊については、「授業ノ外ニ事務ヲ担任シ、常ニ職務ニ勉励致居候」として、特に賞与の支給を求めている。これに対する文部省側の回答は、「孰いづレモ他直轄学校ニ比シ多額ニ失スルノ嫌有之候へ共、創設際ニモ有之、本年ニ限り」認めるというものだった(以上、「職員進退ニ関スル綴」、一九一一年度)。

開校一年目の特例と釘を刺されたにも関わらず、「判任官並ニ嘱託員」(助教教授や書記)について、渡辺校長は二

年目にも同様な、やや多めの賞与支給を文部省に依頼する。一九二一年一月二十九日付の文書では、「物価高直」による一般職員の「生活上ノ困難」のほかに、「本校ハ開学ニ年度ニシテ、自然事務ノ繁多、加フルニ土地ノ状況上、適当ナル事務員ヲ得ルニ詮考上ノ困難アリテ、現在尚手足不足ナルカ為ニ、一層職務勉勵ヲ為サシメタルト」という新たな理由をあげている。しかし、文部省側では「昨年末ノ分ハ昨年ニ限り特別ニ」認めたものであり、「今回ノ申請ハ到底御詮議相成間敷トノ御内意」を伝えてきたため、渡辺は賞与額を「幾分減額又ハ勤務月数等ヲ参酌シ、訂正」したものを提出し、「御配慮方」を求めた。そこには、「本校ニ限り、特別ニ御詮議ニ充分ナル理由」として、四点が掲げられている。第一は、諸物価が札幌に比して二割高、「内地」に比しては二割から五割高であること。第二は、現在の寒冷地手当に相当するもので、「防寒設備及薪炭ニ要スル費用ハ下級職員ト雖モ一家ヲ維持センニハ、一ヶ年百円ヲ下ルコトナ」いことなど。第三は「借家賃ノ高価」であること、第四に「当地諸会社等ニハ総テ在勤特別手当」があるとしたうえで、さらに次のように窮状を訴えるのである（職員進退ニ関スル綴、一九二二年度）。

已上ハ所在地独特ノ理由ナルニ、本校ハ開校第二年ニ際シ、創立事務尚完了セズ、事務甚多忙ナルニ、土地ノ情况上生活困難ナル為ニ、小官方適任ト認ムル者ヲ招致スルコト容易ナラズ、之レカ為ニ現今ニ至ル迄尚未所要ノ人員ヲ得ザルニ由リ、止ムナク現在人員ニ非常ナル劇務ニ当ラシムルモ、第三年目ノ予算配布ナキ已上ハ増俸ノ申請ヲモ為シ難ク、従テ特別労苦ニ酬ユルニハ、一年一回ノ年末賞与ニ於テスルノ外ナシ

この訴えが実って、文部省は修正した賞与支給案を認めた。小原亀太郎・田中乙・石橋哲爾の各助教授と久保田幸太郎・山口梅蔵・泉屋清次郎の各書記、および授業嘱託の西尾広の七名で、合計額は五〇二円となる。当初の上申案の合計額が六五五円であったから、二割強を削ったことになるが、おそらく他の高商よりも、まだ多い額と考

えられる。小樽高商に配分された年末賞与の配分額を超えて、渡辺校長は文部省から不足分をもぎとってきたといえそうである。この推測が正しければ、ここでも渡辺の剛腕が発揮されたことになる。もちろん、やはり「北辺ノ高商」ゆえに「適任ト認ムル者ヲ招致スルコト容易ナラズ」というきびしい現実があった。

庶務課「職員進退ニ関スル綴」(一九二二年度)には、助教授や書記以外の「雇員」や「雇人」に関する賞与支給表が含まれており、多くの人たちが学校を支えていたことがわかる。「雇員」は、庶務課や会計課、図書館などの「雇」で五名、「臨時雇」が二名、文部省建築課から出向している「雇」が一名いる。給料は月二八円から一五円で、この年末賞与では勤務月数などに応じて五〇円から八円が支給されている。また、「雇人」は「火夫」「巡視」「給仕」「小使」などの総称で、二一名が働いている。「給仕」「小使」は寄宿舎の賄いなどもやっていたようで、夫婦の住込みもあった。月一二円から三円程度の給料で、二四円から一円五〇銭の賞与が支給されている。

事務を兼務する助教授以外の教員に関しては、年度末に「賞与」が支給された。一九一三年二月八日付の文部省宛の上申によれば、伴房次郎は「職務勤勉」として七〇円(俸給は一七〇〇円、勤務月数七か月)、坂本陶一は「学科教授ノ外ニ教務課長ヲ兼ネ、職務勤勉」として二五〇円(俸給一七〇〇円、勤務月数一一か月)、大西猪之介は「講師トシテ職務勤勉」として五〇円(俸給一〇〇〇円、勤務月数九か月)という具合である。前年度は授業以外の兼務者二名に支給されていたが、この年度は一三名全員に支給されている。また、海外留学中の坂本陶一と中村和之雄に対しても、「雇外国人ノ詮議方等ニ就キ尽力セシメタル廉かた」として、それぞれ百円と五〇円を支給している。先の「判任官並ニ嘱託員」や一般の教員に対する賞与の支給にはかなり高低があり、おそらく校長の専権事項として、その判断による査定がなされたものと思われる。

重い授業負担

新設校でなおかつ「僻遠ノ地」という不利な条件を緩和する好条件での任用ではあったが、ひとたび赴任すると、教育Ⅱ授業面での負担は、おそらく現在よりも重くのしかかった。

一九一四（大正三）年度の専任の教授・助教授・外国人教師の一週担任授業数をみると、最大で二四時間、最低で一・二時間と開きはあがるが、平均は一八・六時間となる（授業時間は五〇分）。また、学生定員が増加中の一九二〇年度の授業負担時数は表のようになる（公文類聚一九二〇年）。これは官

制改正による教授の二名増員を説明する資料として添付されたものだが、そこには「現在教官ノ担任時数ハ何レモ過重ニ失スルノ嫌アル」とされていた。教員増にもかかわらず、一八時間だった大西猪之介と伴房次郎の場合、それぞれさらに二時間が増えるという具合だった。ただし、こうした状況は、小樽に限ったことではなく、他の高商でも同様に授業負担の時数は多かった。

一九一九年度において、官制定員は教授二〇名、助教授七名の合計二七名であるが、現在人員は教授一六名、助教授七名（このうち教授一名と助教授二名が外国留学中）、講師一七名となっていた。講師中には、大平頼母・西田彰三・手塚寿郎・長畑功の四名が含まれており、いわば専任講師的な地位にある。また、中国語の関恩福は年俸一三〇〇円（一週二〇時間担当）で、外国人教師に準じた扱いである。非常勤講師は、「工業大意」や体操などの授業

| 学科 | 担任時数 | 担任者 |
|----|------|------|
| 英語 | 二二 | 伴房次郎 |
| 英語 | 二二 | 坂本 |
| 英語 | 二二 | 谷辰 |
| 英語 | 二二 | 中村 |
| 英語 | 二二 | 井浦 |
| 英語 | 二二 | 八木 |
| 英語 | 二二 | 寺田 |
| 英語 | 二二 | 志摩 |
| 英語 | 二二 | 木村 |
| 英語 | 二二 | 長所 |

「大正三年度教官担任授業時数調」
（「公文類聚」1914 国立公文書館）

のほか、外国留学中の教員の授業を担当した。講師手当は、官制定員と現在人員の差引額があてがわれた。校長・外国人教師・職員を除く人件費は、約四万円であり〔公文類聚〕一九二〇年、校費全体のほぼ半分にあたるだろう。

こうした授業負担の重さにも関わらず、研究面でのバックアップの体制は十分に整備されておらず、各自の努力に待つほかなかった。きびしい研究環境のなかで、大西・手塚・苔米地・浜林らの独創的で、かつ精力的な研究成果が生まれた。

転出者の増加

入学定員の増加とともに教員数も増加したが、一九一七年から一九九年にかけて転出・退官が相次ぎ、一八年度には減少したことがある。一七年度には松本源が退官、一八年度には創立以来の教授だった坂本陶一が退官して実業界に転じ、井浦仙太郎は東京高商に転出した（その後、しばらく兼任教授）。また、一九年度には木村善太郎は六高へ、八木又三は松本高校に転出、志摩清一郎と長谷川慶三郎は退官、そして田中乙は死去している。それぞれの個人的な事情に加え、第一次世界大戦下の経済界の好況、「北辺の高商」ゆえの教育・研究状況のハンデなどの理由が考えられるが、これらの開校以来の中心的な教員の喪失は大きな痛手であった。同時期に大西と国松の外国留学も重なった。のちに、渡辺は「欧州大戦に伴ふ商業界の好況のため、一時に正教授七名を失ふに至つた」と回想する。ただし、「その時は授業上大した不便を感じなかつた」（創業の回顧）。

創立二五周年に際して新聞『緑丘』（第九四号、三六年七月五日）が開いた伴・苔米地・手塚らも出席した「先輩座談会」のなかで、後述する「昇格問題」に触れて、ある卒業生は「先生がドンドン抜けて行つてしまつたので、生徒はみじめだつた。良い学校を作るには良い先生を呼ばねばならぬと思つた」、「当時は教授が抜けて行くので淋しい気持ちでした」と語っている。また、「昇格運動の先導者」とされる大西は、「高商格の他校が商大になると、良教授の中

央異動が行はれ、質的に低下する」(『緑丘』第九九号、三七年四月二九日)と主張したという。

おそらくこうした焦燥感や寂寥感は学内に広まっていたはずだが、渡辺校長らは泰然として、再び創立時のような「大学専門学校に目ぼしき学生は居らぬのか、中等学校に優秀なる先生は居らぬか、常に鶴の目鷹の目」(『商業教育』二十五年の回顧)で人材を探すことになっただろう。幸いに小樽高商の評価は定着していたため、のちの伴校長期・苫米地校長期を支える優秀な教員を集めることができた。すでに挙げた手塚寿郎、浜林生之助、小林象三、高松勤らのほか、「英語」の大平頼母・中村賢二郎、「商業学」の椎名幾三郎、「経済学」の大熊信行、「倫理学」の小尾範治らである。『緑丘五十年史』の表現を借りれば、「いわば代替わりともいべき活況をみせるにいたった」のである。

『小樽新聞』への寄稿

『小樽新聞』は、小樽高商創立当初から高商関連記事を多く載せている。これまでも活用した「高商評判記」や修学旅行の記録「環行三千哩」のほか、大西猪之介らの講演記録なども連載された。

一九一六(大正五)年ころからは、渡辺校長も含め、高商の教員による専門領域の話題を中心に、啓蒙的な談話、各種の講演会の筆記や文章の寄稿が顕著になってくる。時評や社会評論も多い。

第一次世界大戦中は、その推移について、欧米留学経験を踏まえた論評が目につく。たとえば、ハーバード滞在中の高島佐一郎は、「米国宣戦前後の政治及び財政管見」と題する論を寄稿する(二七年六月一〇日から三回連載)。国松豊は、一八年一〇月二二日、「伯林暴動の^{ベルリン}外電に接して／独帝謁見の昔を偲ぶ」という懐旧談を、同一二月三日から六回連載で「講和成立の前後に／処する北海道民の準備と覚悟」という談話を載せる。後者で、国松は「元來経営学や工場管理法などの学問は、我国に於ける如く、学者の専有物として教室の講義にのみ一任すべきものではなくて、

實際家が其の研究者たると同時に実行者たらねばならぬ性質のものである」と述べ、「テーラー式経営法」などを紹介推奨する。

また、渡辺校長も「大戦の教訓に省みて」（一九一九年一月一日）で、「世界に於けるデモクラシーの大勢」に言及しつつ、「所謂民衆主義は現に露国に於ける如く、又独逸に於ける如く、訓練なき国民が此主義を奉ずる時は、国民自滅の結果に陥らざるを得ぬ」として、「教育刷新」の必要性を強調する。その第一歩とするのは「社会教育」の振興であり、新聞の役割、講演会や図書館の必要性、さらに暖房設備付きの「体育場」の設備を説く。講和条約締結直後、一九一九年七月一日から五回連載の「世界の地図は変つた／両手をもがれた独逸の哀れな末路」は、地理学の立場から寺田貞次の談話である。

一九二〇年前後、最も登場回数が多いのは、大西猪之介である。東京で吉野作造とともに大西の恩師である福田徳三らによって結成された黎明会について、解説を求められた大西は、「言論の自由を圧迫されたる、又は圧迫されんとする学者の逆襲運動」と述べる。大西は、小樽から「日本の思想界の目まぐるしい迄に急転しつゝ、ある」（「黎明運動に就て」、一九一九年二月一三日から四回連載）状況を的確に観測するにとどまらず、自らも小樽・北海道を舞台にその潮流に掉さそうとする。「小樽啓明会」の運動であり、『小樽新聞』はこれに積極的に紙面を割く。「小樽啓明会」での大西講演は、一九一九年三月二三日から五回連載の「日本の経済学者と文学者」、五月二八日掲載の「東西文明の比較」などがある。二時間半におよぶ「東西文明の比較」では、河上肇批判を展開するほか、「瑞西スウェーデンに客死せる日本の一留学生と独逸娘との恋愛を述べるなど、聴衆の緊張は増すばかりであつた」という。この講演の結論は記者のまとめによれば、次のようなものであつた。

西洋の文明は今度の戦争で亡びるといふ人があるが、それほど薄弱なものでなく、遙かに海を越えて益々我国

に強迫しつゝ、ある事実を見ては、其文明を排斥して我国の文明が成立たざるは明らかである、現下日本の深患は、国民精神の緊張を欠くと、西洋文明の精華たる科学的考案の乏しき事にあり、切なる恋愛に於けるが如く、人生を熱愛し、その生を充実せしむるために科学を持たねばならぬ

啓明会講演では、武田英一「欧州の日曜と店員保護」(四月一六日から四回連載)もある。また、後述する高商弁論部の巡回講演の記録として、大西や手塚寿郎、椎名幾三郎のものも載る。

『小樽新聞』は、高商に新しい教員が赴任するたびに、その紹介を兼ねて、談話や論説を掲載している。まず、一九年五月二七日には高松勤「保険国営に就て」、五月二九日・三〇日の手塚寿郎「現代工業文化国に於ける矛盾現象／国際労働協定第四条の純理論的批判」がある。もつとも、手塚の論は数式を交えたり、「余の所謂失業の総量は、労働者の数と労働時間の乗積より、現実に雇傭を受けつゝ、ある労働者の数と労働時間の乗積を控除せる余剰である」など、読者にはかなり難しかったろう。

武田英一を中心に、商業上の問題もよく取りあげられている。井浦仙太郎「高度の商業補習教育に関する私見」(一七年六月一七日から三回連載)、武田「観光客待遇の問題」(一九年五月二日)、同「再び日曜休業に就て」(五月二五日・二六日)、同「欧州銀行業の海外発展／本邦同業者は省みよ」(二〇年一月一六日・一七日)、同「銀行合同問題」(二二年一〇月二日・一三日)、同「商業界の労働問題」(二〇月三日から五回連載)などである。

また、特色ある科目「商品実験」の研究成果の一端も披露される。小瀬伊俊「石鹼製造方法並に品質鑑定に関する研究」(二二年一〇月二日から五回連載)は、石鹼を使用する際、「其表面極めて平滑にして、且つ石鹼全体が透明にして快感を与ふるもの、及其表面甚だ粗、且粘着性乳状液を残留し、不透明にして不快の感を与えるものとある」として、「化粧石鹼の品質判定の標準」についての研究の概要を紹介する。二二年二月二五日掲載の外国人教師フランク



『小樽新聞』「小樽高等商業学校十周年記念号」(1921.10.7)

の「北海道に於て海水より食塩の製造方法」という寄稿は、「本道に於て使用せらるゝ食塩は、之を全部内地よりの移入に依らざる可からず、之れ工業の発展上大なる不利益の点なり」という、実践的な問題関心からの研究の紹介である。

こうした『小樽新聞』への渡辺校長や教員の頻繁な談話掲載・寄稿は、新聞社側の働きかけに応じてのものだが、小樽区民や北海道民にとっては、小樽高商の存在意義を十分に知らしめるものであった。

「北日本の文化建設に榮えある使命」(『小樽新聞』、二二年一〇月七日「小樽高等商業学校十周年記念号」特集号)は、このような方面においても希求されていた。

第四節 学生生活の始動

寄宿舎の生活

渡辺校長は、学校は「智識を授ける処」とする一方で、「意思の訓練」や「品性の訓練」は、イギリスに学んで、寄宿舎という「共同生活」を通してなされる、という考えをもっていた（「諸子に告ぐ」『北斗寮報』第一号、一九一六年六月）。当時の新開地小樽においては、「経済上、道徳上、品性上から見ても安心して下宿し得る処は少ない」という判断もあった。のち、第一寮（北斗寮）の監督寺田貞次は「新入生歓迎辞」のなかで、寄宿舎の不可欠な性質として、「第一 安全なる住家たること 第二 完全な修徳の場処たること」（『北斗寮報』第四号、一九一七年六月）をあげていた。

しかし、校舎の建設に比べて、寄宿舎の整備は後回しになっていた。開校前に全国から集まる第一期生のために小樽区内で宿舎を借り上げようとしたが難航し、しばらく校内の雨天体操場の半分が仮寄宿舎に充てられ、二〇余名が収容された。第二期生を迎えるにあたり、一九二二（明治四五）年四月一八日、区内（中央小樽駅〔現小樽駅〕周辺と日本銀行前）に民家二棟を借入れ、一二月一日、さらに旧金沢植物園（現在の富岡町）のなかの民家一棟を借入れ、仮寄宿舎とした。ここに入った佐野森蔵・阿部定一郎は、「庭に池があり、大きな部屋が五つ六つあるがらんとした建物で、一部屋に四人、五人と割り当てられたのです。たしか寝る時は十六人が一つの部屋にかたまった様に記憶しています。勿論万年床でした」と回想する（「憶い出ずる儘に」『緑丘五十年史』）。

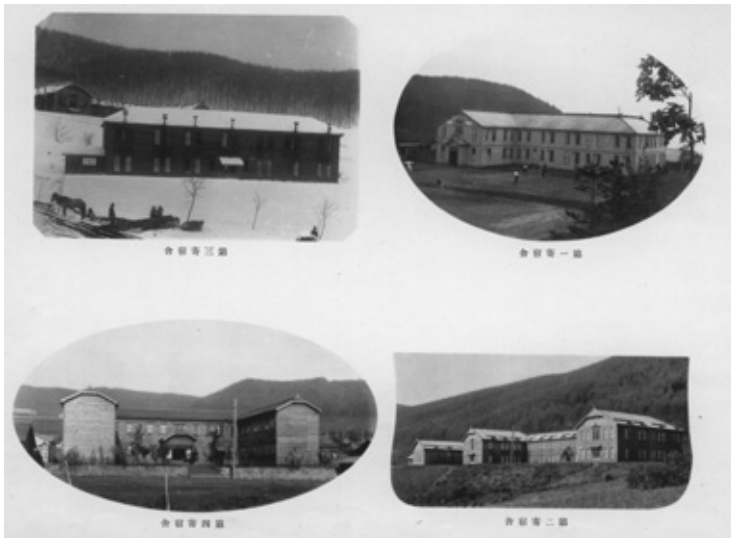
これらはいずれも「其位置、建築、衛生スベテノ点ニ於テ不備、且狭隘、増加スル学生ヲ収容スルニ足ラス」（『北斗寮沿革』『北斗寮報』第一号）という状態だったため、学校側は、寄宿舎建設を急務とし、小樽区に働きかけた。一三年四月七日の『小樽新聞』は、高商寄宿舎速成会を組織し、「一株十円一割配当にて株式を募集し、元利の皆済を待ち

て学校に寄付の計画を為し、目下夫々準備中なり」と報じている。詳細は不明だが、「区ノ有志並ニ本校教職員ノ熱心ナル出資ニ依リ」（「北斗寮沿革」）、八月から建築工事が始まり、同年一二月一日、まず校内に第一寄宿舎（北斗寮）が完成し、雨天体操場の仮寄宿舎を移転した。五六名が入寮した。

その後は文部省の予算が付き、一五年一月二五日に第二寄宿舎（正気寮）が、一六年一月四日に第四寄宿舎（玉の井寮）が、そして一九年一月二四日に第三寄宿舎（文行寮）が設置された。第二・第三寄宿舎は正門の向い側の敷地に、第四寄宿舎は学校から数分坂を下った緑二丁目の敷地に建設された（この隣に企業実践工場が建設される）。それらの校地がどのように入手されたのかは不明である。

一年生は小樽や札幌からの自宅通学生を除いて、原則として寄宿舎に入ることになっていた。八畳の部屋に二人か三人が割り当てられた。二年生からは、指導役の何人かを残して、街の下宿に移った。

各寄宿舎には「監督」（舎監）として教員が一緒に住み込む。運営は「舎生中ヨリ互選」（校長が任命）された寄宿舎委員が、「監督者ノ指導ヲ受ケ、共同自治生活ヲ主理ス」（寄



寮

宿舎規程」とあるように、学生の自治に任された。寄宿料は月一円で、賄費用は実費が徴収された。一五年七月一日の『小樽新聞』は、「小樽高商正気寮から」として「をしよ生」の寄稿を載せている。「吾々は此頃位吾々の生の充実感を沁々と味はひ得る事はない。吾々の胸は限りなき歓喜に戦慄してゐる、七十の若やいだ舎生の一人一人の顔には生気の充満した色が見られる」として、さらに次のようににつづける。

寄宿舎は一個の縮少された社会形態と見ることが出来やう。そこに多くの者が協同の利益を獲得し、幸福を享受せんがために、協同生活を営みつゝある、自治は我々の寄宿舎の中心生命である。万事自由を主とする、要するに我々の寄宿舎は我々のものである、我々の生活は社会的生活機関である。これを株式会社に見たてることが出来るならば、我々の舎生は其株主であり、監督教官は重役であるのだ。

同年一月一日に開舎一周年を迎えた正気寮では、記念祝賀会を開く。それに向けてつくられた寮歌の六番の歌詞は、「たて立や正気の旗の下 理想の自治を友として 狂瀾外にさはぐども などか恐れん我行手 途出を照す御光は 豊に海ゆさし昇る」(『小樽新聞』一五年二月一四日)であった。

最後の設置となった第三寄宿舎(文行寮)のある学生は、『東京朝日新聞』(一九二二年五月一七日)の「学生界」に「文行寮より」と題して寄稿している。



寮生活

不幸なる哉、我小樽高商は紅塵の町を離れて八丁、地獄坂を登つて其のどん詰りの小高い山の中腹に位置して地の利を得ない我寮はテニスコートすら持つて居ない、寮生は燃えるやうな運動慾の結晶から終ついにに百分の十四勾配の畑地をば、寮生自身の腕力を以て完成しやうとする固い決心を惹起するに至つた。寮生は毎日放課後二時間づ、実地運動研究に従事して居る、……自らデモクラチックに自から工事に出つ、督励するので、工事の進捗は驚くばかりであるが、特に此の工事は科学的マネーデメントを応用して実地に筋肉運動を研究し、苦痛を実験する好い機会もえられたのであつた。

この労働の結果、「神経衰弱、胃病、脚気等と学生に付物の難物は根から絶れた」とし、「やがて此の汗と意気でコートが出来上る時、雄大な針葉樹林や白樺の森の大自然を背景として小樽の町を眼下に見下しながら、純白なユニホームが夕暗の中に活動する日を夢みる」と結ばれる。

ストームと「研究以外面会謝絶」

寮につきものなのが「ストーム」である。一九二〇年四月に入学した大久保鹿式は、次のように回想する（四〇年前の葉しづり）『緑丘五十年史』。

正気寮に割り当てられて一部屋三人ずつT字型に机を並べて寮生活が始まったのであるが、その晩新人生歓迎会が万国旗で飾られた食堂で華やかに行なわれた。生まれて始めてビールの御馳走になり先輩の隠し芸に笑つて、よい機嫌になった。やがて、夜も更け会も終わつたので自分の部屋に引き込んでグッスリ寝込んだ其の夜の出来事である。何だか耳もとで俄かに金属性の罐を叩く音、羽目板を叩く音、万雷が一時に落ちるに似た騒

ぎである。何事が起こったのかと、ねむい目ををコスリコスリ起き上がって見るが何もわからない。暗闇の中を大勢の何者ともわからぬ覆面の悪漢が襲ってカンカン、ドンドン空罐をたたき、羽目板をたたき天地も崩れる様な騒ぎである。蒲団を片端からめくり抛り上げられてしまうので、とても寝て居るわけにはゆかない。何が何やらサツパリわからぬままに茫然！ 立ち竦んでしまったのであるが、それはほんの瞬間の出来事で、やがてサアーと引揚げて行つた。之れが伝統のストームと言う奴である。

手荒い歓迎ぶりである。新入生はこうした洗礼を受けて、高商生活になじんでいった。寮祭・ハイキングなどの行事や寄宿舎対抗のスポーツ大会なども頻繁に開催され、寢食を共にする学生たちの強い絆がたちかわれた。

一九二一年一〇月七日の『小樽新聞』に載つた「若き日の寮生活」も、その真摯な生活ぶりを彷彿とさせる。秋半ばの「記念祭の夜」は、「若い日の限りを尽して、飲み歌ひ、踊り、且つさわぐ」。「然し、記念祭も済んで、ストウプが取りつけられ、誰れかの室の前に「研究以外面会謝絶」の貼紙がされる頃となれば、総ては終りである。夜具やマントを引被つて、経済や簿記のノートを睨んで居る恰好と言つたら実に惨めなものである、故郷の父親や兄弟に見られたらそれこそ同情して、学資金なんかドシドシ送つて呉れるだろう」。

一九一六年六月、寮生だけでなく、卒業した「寮友」にも「北斗寮固有の暖い気分」を分かちたいという意図をもって、北斗寮では雑誌『北斗寮報』を刊行している（他寮での刊行は不明）。毎年、「寮歌」が作られた。一九一四年度の清田信政作の歌詞一番と四番は、次のようなものである（『北斗寮報』第一号）。

一 緑滴るその壁よ
クローバ茂るその園よ

潮の香高き北海の
小樽の浜の高丘の上

名利の巷見^{ちやまた}下して 立つや雄々しき北斗寮

四 時の流れは止まらず 冬去り春の来るごと

寮生幾度変れども 変らぬ姿さながらに

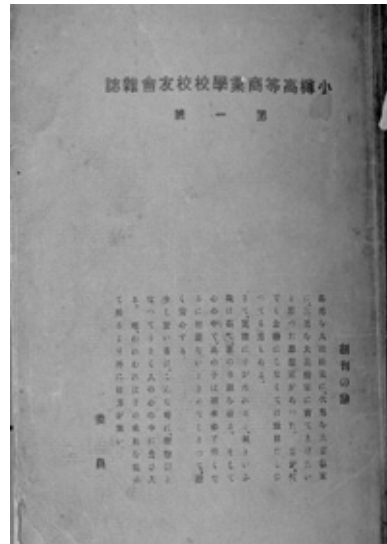
マキウリ^{おろし}風背^{おろし}に受けて 立つや雄々しき北斗寮

校友会の結成

『小樽新聞』連載の「高商評判記」に、開校一年目の「第二学期も末に近づいて来た頃、生徒各自の胸裡に来往してゐた校風論が漸く露呈して来た」(一九二二年二月二日)とある。一九二一年(明治四十四)年二月上旬、まずクラス会が開かれ、「悉くが順次に起立して、対校風の意見を吐露」した。同月二〇日、教職員と学生全員から成る校友会が発足した。もともと開校直後の渡辺校長の提起になるもので、学校側創立委員と学生側創立委員との間で協議が重ねられてきた。発会式で、会長に推された渡辺校長は、「英の学生の紳士的な態度、独の学生の秩序を重んじる精神、米の学生の活動を喜ぶの長所を渾然融和して邁往すべし」と述べた。

その直後の弁論部大会では、「コオペレーションを高調し、校友会の隆盛の為に光焰を吐ける藤田君あり、北海道に移民せる覚悟を以て其の経済界を縦断し、区々たる俸給生活に何ぞ節を屈せんやと熱狂したる青山君あり」(「高商評判記」一九二二年二月三日)という具合で、第一期生の熱い意気込みがうかがえる。

当初、校友会は学芸・武芸・運動の三部で構成されていた。武芸部は柔道・「撃剣」・弓術の各部に、運動部は野球・庭球・端艇^{ボート}・相撲の各部に分かれていた。その後、校友会規則の改正により、編集部・研究部・外国語部のほか、スポーツ各部に新たに蹴球部やローラー・スケート部などが加わる。編集部は『校友会雑誌』の編纂を、研究



『小樽高等商業学校校友会雑誌』第一号

部はのちに弁論部となるように弁論大会を主催し、外国語部は後述する外国語大会を主催する。顧問格の各部長は教員であるが、理事と監事は学生がつとめ、自主的な運営がなされた。

『校友会雑誌』をみよう。一九一二年三月発刊の創刊号に対して、『小樽新聞』『続高商評判記』は、「誌名を小さくして下部に口語体の創刊の辞がある、灰色木炭紙の表紙、本文二百二十頁の手触り懐かしい贅沢な粗面紙、エツチンダかの如く垢抜けした快さを誘ふ扉絵とカット——これら

文芸味の勝つた体裁は謂ゆる校友会雑誌の類型を全く脱してゐる」と賞賛する。各号は「論説」「研究」「想華」「詩藻」「雑録」という構成である。「論説」は渡辺校長ら教員陣の執筆だが、「研究」以下は学生が占める。たとえば、第三号の「研究」は、西尾清一「支那対我が国の為替事情」、加藤省三「商港としての小樽」、伊藤祐「本邦に於ける銀行業の発展」の三つが並び、商学・経済学の研究成果を発表する。「想華」からは「文芸味の勝つた」もので、小説・評論・詩歌など多彩である。

第七号（一九一七年三月）の前田米吉「もとむべき我が影」は、「人生の真意義」を真摯に模索する。「私は私自身に囁く、——強く鋭く私の心に——汝よ、汝はもつと苦しむ必要がある。考へる必要がある。併し悲しむべき理由はない。生の自覚、存在の目的を「自己解釈」なるレンズを通して、もつとはつきりとうつし出す為に。汝の旅路は遠い。逝く春も逝く秋も汝の心の世界に關係はない。黙つて考へよ。そして苦しめ、努力は理想の世界は絶えず遠ざからしむる、緑萌える野も、木枯吹き荒む野も、汝の駒は止まず駆けて居るべきだ」と。そして、「私は「生」とか

「自己」とかの不可解な問題に対して、其のなやましさに對して、自ら怯懦きようだなる手段を重ねて死なる世界に逃れて、自己の責任を忌避したくない。生物以上の物、否人間としての生の意義、生の目的の充実を勉めたいと思ふ」と強さをもち。

一方で、社会的な問題を真つ向から考察する評論もある、同号の郡菊之助「今昔の感」は、「徳川幕末時代の我国勢」を想起し、「翻つて現代の日本は如何」と問いかける。「我国各方面の近時の進歩」は、「永く我を順調に追駆するものなるを保すべからず」として、「此際國一致、日東帝國の前途のために、基礎的準備を完うし、過去に占めたる地盤の上に更に堅固なる建設を為し来らむ」と論じる。

また、石川啄木風の三行分ちわか書きの短歌も散見する。第三号（一九二四年二月）の亭葉「習作」から二首を引く。

身にもなき歌よむ術の

覚えけり君てふ人を

知りそめしより

燈びにこがれくる蝶のごと

今日も明るみの街を

したひゆく

第八号（一九二七年七月）から「同窓欄」が設けられた。「卒業生の發展は引いて本校の隆盛を致すものでありますから、後学の諸君は宜しく先輩の動靜や通信によつて益々自を鞭撻し、勉学修養に力を尽すべき」（編纂雜録）という

趣旨であつた。第一一号（一八年二月）には同窓生住所録が、第一二号（一九年三月）には別冊の「同窓会報」が付けられた。

そして、後述の大学昇格運動との関係で、「卒業生先輩と学校との紐帯を緊密鞏固ならしむる」ために、第一六号（二〇年六月）から誌面を大きく変更する。二〇年三月の同窓会総会で「従来の校友会雑誌を今後大に同窓会の為めに開放するの決議」を受けて、会誌を会員に送付することとした。年六回刊となり、判型を大きくした代わりに、頁数を減らした（高島佐一郎「会誌組織の変更に就て」『校友会雑誌』第一六号）。

運動部の始動

『校友会雑誌』の「雑録」欄には、運動各部の詳細な活動報告が載る。野球部をみると、「ぼんやり野球部が生れた。紅を弥生に包む昼たけなわ酣ななる時、何処からともなく、球友が三人五人あかづち赭色のグラウンドに集つて来る間に、何時ともなく出来上がった」（『校友会雑誌』第一号）と記されている。「左胸部に独字型Cのマークを付せる淡卵黄色のユニフォーム」（『小樽新聞』「続高商評判記」、一三年五月三日）である。

創設もない高商チームについて、一九二二（明治四五）年五月一六日の『小樽新聞』は、投手や捕手らの長所短所を指摘し、さらに「高商の打撃は一般に好い方だが、少し頭脳のあるバッテリーにやられては六ヶ敷むすかしい、兎に角練習が大切だからしつかり頼む」と期待を寄せている。

記念すべき農大との対抗戦第一戦では敗北を喫したものの、一九二三（大正二）年六月の第二戦では一〇対二で雪辱した。札幌から帰樽する選手たちを「全校生こぞ挙つて之を中央駅に歓迎し、更に盛大なる慰労会を開催して其労」（『小樽新聞』、六月三日）をねぎらったという。一九二六年一〇月の対農大戦では、審判の判定をめぐり、「高商軍、憤然として連袂退場」（『小樽新聞』、二〇月二四日）という一悶着もあつた。農大との対抗戦は他の部にも拡大し、やがて全校

あげての「北大戦」に発展していった。

佐野・阿部「憶い出ずる儘に」には、「何しろ敵は札幌農科大学です。向うは六年でこちらは三年ですが、柔道に剣道に野球に庭球に角力に、勝敗は別として（負けが多かったが）その意気や実に軒昂たるものがあつた」とある。また、大久保「四十年前の栞」にも、「一番華やかな野球はきまつて負ける。三年間に一度だけ勝つた事があつた様に思う。此の時こそと札幌中をあばれ廻つて、ビヤホールを飲み廻り、街々を校歌を合唱して歩き、往年の鬱憤を晴らした事があつた」とある。その後、北大戦は同年代の北大予科との対抗戦となつた。

ユニークなのは、ローラー・スケート部である。坂本陶一教授の呼びかけで、「運動具としてローラー・スケートを採用したのは、恐らく日本中で我学校を嚆矢と言ふる事が出来る。いや東洋中と云つても差支あるまい」（『校友会雑誌』第五号）と自負したが、坂本の留学とともに下火となり、アイス・スケートに転じる。しかし、これもスケート場が近場にないため、振るわなかつた。

そして相撲部である。一四年九月に發会式・秋期大会をおこなうが、その熱狂ぶりは「正に千度の寒暖計も役に立たず。舌頭火焰を吹ひて、マキユリー山上の寒氣為に酸化して炎とならむとす」（『校友会雑誌』第三号）と評されるほどだった。一五年四月に有望な新人が加わつた。六月の新入会員歓迎相撲で、あっさりとして五人抜きを達成した「ピリケン山」である。末延一郎という学生で、「体重二十余貫、身長五尺五寸、力は強く技に長け、鬼に金棒とは此の事か」とされる。それもそのはずで、すでに「東



ローラー・スケート部



サッカー部



ピリケン山 (『小樽新聞』1916.4.16)

都に於ける学生角力界に驍名を轟したる豪の者」(『校友会雑誌』第五号)であった。

「ピリケン山」の名は金道に知れ渡る。一六年四月一六日と一七日の『小樽新聞』は「本道武芸ぞろへ」として、写真入りで「小樽高商のピリケン山」を取り上げている。「相撲は飽迄も神聖です、一つの武芸です、狭義の意味から柔道と少しも異ならない、只土俵といふ一つのサークル内で勝敗を争ふのですから地堪へといふことが必要なのです、柔道は場所には制限がないから風に柳と受流しが出来る、只それ丈の相違だと思ひます。相撲では顎と額とを用ゐる様でなくつては、一人前ではないんです、仕切の工合、四股の工合で稽古を積だ者が積まない者か、直に分ります」という相撲観の持ち主だった。野球部でも活躍するが、一七年末に退学している。

「ピリケン山」が去ると、一八年には「ライオン山」・「九州山」「地獄坂」らの力士が雄を競った。

なお、「本道武芸ぞろへ」では高商柔道部の村井頭八も取り上げられている(五月三日、二四日)。講道館の三船久蔵の教えを受け、旭川の歩兵連隊除隊後に小樽高商に入学している。「双腕の筋肉が際立つてムクムクと張つて、身体一面に張り切った肉付は宛で仁王の荒彫の如く」と評された。柔道部は講道館三段の苦米地英俊の指導で鍛えられていた。村井は講道館三段の実力者である。三船も来校し、稽古をつけている。

柔道部と剣道部の「寒稽古」の様子を、「八間四面の大道場は真中で仕切られて、剣道と柔道の猛者連は、蝗の飛ぶように、芋の子を洗ふ様にギツシリ詰つて、元気よく打合つたり、投げ合つたりして居る」と、一七年一月二日の『小樽新聞』が伝える。柔道では「余り稽古が猛烈な為、稽古着が背から裂けて、赤胴色の皮膚が遠慮会釈もなしに顔を出してゐる」ほどであり、剣道では「高商対農大の大試合」を目前に控えて、「竹刀も折れよと打合つて居る」。

野球を中心に、高商運動部の活躍は小樽区民の関心事であった。したがって、その就職先なども、「高商で知られた運動家 遠からず散々になる」として、「野球部の首脳鈴木君は湯浅の小樽支店に定つたから、白靴の遊撃ぶりは此の夏も花園グラウンドに見る事が出来やう」などと、『小樽新聞』(一九一八年二月七日)は報道する。見出しには、「出でよ、現はれよ、後輩の勇者!」ともある。一九一九年のシーズンでは、「黄金時代来らん 復活せる高商野球部」(同、一九一九年九月三〇日)と期待が寄せられた。

校友会主催の運動会も小樽区民の楽しみの一つとなつていった。第一回は一九一三年一〇月五日、花園公園で開催された。一〇月八日の『小樽新聞』は「競技ぶりのキビキビして心地よく進行したのは流石に他で見られぬ訓育と規律とを示した」と報じ、「小樽に年中行事が殖えた」と諸手を挙げて歓迎する。競技中の白眉は各寄宿舎の仮装の余興で、白虎隊・古今東西乗物行列などが「観客の魂を奪ひ、人をして抱腹せしめ、喝采して止まざりき」(『校友会雑誌』第二号、一九一四年八月)というほどの人気だった。『小樽新聞』によれば、学校側から女装が禁止されたため、「第一寄宿舎のは「夫婦行列」の予定で各階級の夫婦連を網羅し、其れが二人三脚で繰出す筈のを、急拵への「白虎隊」に変更した」ものだった。

一五年五月二三日の第二回運動会の様子は、「名にし負ふ小樽年中行事の一名物なる運動会を見て話を後世に残さむとする区民の殆ど大半、無慮数万、かの花園公園の四囲丘となく、平地なく、本校特設の観覧所は云ふも更なり、

樹間にさへ、人の実を結びて、さしもの広き公園立錐の地なきまでの、小樽開港以来未曾有の盛観を呈しぬ」と、『校友会雑誌』第五号に大仰に活写されている。仮装行列は、第一寄宿舎の「ダルマダンス」につき、「第二寄宿舎」「とりづくし」、第四寄宿舎「矛盾行列」、通学生の「桜ダンス」、何れも構想の妙、奇装の麗、本職の芸術家の墨を摩さんとするもの多々あり、観客の魂魄を天外に飛ばしめ、抱腹絶倒、驚且三嘆、予想外の成功を納めたり」と大評判だった。

一九一九年秋、大学昇格運動に関連して学生自らが「内容ノ充実」のために勉学を重視するとして、運動会の開催は一時中止となった。真相は、華美になりすぎた仮装行列に対する学校内外の顰蹙だったようである。開校一〇周年記念に際して、運動競技中心の内容として復活し、その後、継続された。

外国語部大会

運動会とともに小樽区民の人気を博したのが、外国語部大会である。一九二〇年代になると外国語劇に集約されるが、当初は前半に各国語による演説・朗読の部があった。第一回は図書館を会場に一九一三年一月に開かれ、毎年の恒例行事として、この一日だけ校内が小樽区民に公開された。

一六年一月一四日の『小樽新聞』は、その一齣を「近江商人」と題して壇上に現はれたる松本クンの英語演説は受けるの受けないの素敵な喝采だ、縦横自在にまくし立てる弁舌は殆ど聴衆を魅する者がある、大車輪にやるので汗が額に沁み出ると、腕でスルツと拭く、ワアツと笑ひ声が起ると、手で聴衆を制して笑ひ声を買ふと、今度は毬栗頭をボンと軽く打つので又も喝采、然し滔々たる弁舌には感嘆の声を放つた者が多い」と伝える。

一八年一月の大会は、「七の演説は或は英語で、或は独逸語で滔々と弁ぜられ、五の劇はこれまた英語支那語露西亜語を以てなされ、聴衆観客をあつと驚かせた程の上出来でした、場内一同歓喜に満ち、時の移るを知らずして、

半日の愉快な催を終へ、散会したのは七時頃でした」(『校友会雑誌』第二号、一八年二月)と、盛り沢山の内容である。翌年には、新たにドイツ語劇が加わる。これらの劇の指導には、外国人教師があたった。二〇年一月、ロシア語劇「吝嗇なる武士」に出演した越崎宗一は、「この劇の演出に当たったネフスキー先生の熱の入れようは大したもので、私達はその熱意に曳きずられたと言つてよろしかろう」と語る(『回想二三つ』『緑丘五十年史』)。

この年の外国語大会は二日間にわたつておこなわれている。「年毎に幾何級数的に観衆聴者が増加して、去年などは二進も三進も動けない様な大入満員の大盛況だった所から」、混雑の緩和のためにとつた措置である。あいにくの悪天候にもかかわらず、「地獄坂を上つて来る人々の群は入口に殺到」し、いずれも千名に達する大盛會となつた。人氣の中心は演劇で、英語劇・ロシア語劇・中国語劇とつづき、最後は英語劇「ジュリアス・シーザー」であつた。『校友会雑誌』第一九号(二〇年二月)は、この愛敬の部分を含めて、次のように評している。

映画研究によつて得られた知識を舞台に応用する市川君のブルタス。申し分なし、それこそたつた君一人の舞台、然も科白せりふで持つこの舞台が卅さんじゅう分近くも人々を倦うましめずに引張つて行く君の手腕。驚いた。

第二幕目は愈々議事堂の場となる。何時も乍ならの凄味たつぷりな清水君が光る。が、最も強かるべき此シインの印象は事実弱められた。惜しむらくは、あまりに白粉おしろいを用ひすぎたのだ。下條君のシイザー、適役乍らあまりに美しすぎて、見た所どうしても千軍万馬、南に酷暑



外国語劇 英語

と戦ひ、北に朔風と争ふた偉丈夫の印象は更れない。従てシーザーの重みがない。他の人々にしても同様、これがローマの勇士とはどうしても思はれぬ。あんな生白い顔はして居らないだらう。白粉よりも塗るべきはセピアと黒だつたのだ。もつと日に焼けた男性的な面でありたかつた。印象の弱かつたことは、キヤラクタと扮装とを融和し得なかつた点に存する。

校友会とは別に、教官と学生の研究組織も生まれた。活発な活動を展開したのは、第二外国語で中国語を選択した学生の有志が結成した「支那研究会」（一九二二年一〇月発会）である。その設立にあたり、「将来新時代に於ける世界的国民として、内に在りても外に出づるも、共に、俱に、心得べきは対隣の天地、其なり」と意気盛んで、例会では各自の研究発表をおこなっている。

弁論部大会

校友会発足当初からあつた弁論部は、長年振るわなかつた。『校友会雑誌』第七号（二七年三月）には、「校友会の中で弁論部不振な活気に乏しい部は恐らくないであらう」と自認するほどである。この部員は、「本校には深みのある思想家が殆んどない。透徹した理性的批判力を具へて人生を觀、宇宙を知らんと努力し乍ら、絶えず突き込んで思索する敬虔な人に乏しい」ことを、その理由の一つにあげる。

しかし、「吾々はよりよき生活と思想へ、絶えず努力しなければならぬ」というひたむきさは、一八年一月、小樽高商弁論部主催の「全道弁論大会」の開催を実現する。会場の図書館は四〇〇名以上の聴衆で立錐の余地もなく、「各校より派遣せられた選手諸君の熱烈なる叫びと我校弁士の負けず劣らずの力説とは、聴衆に多大なる感興を与えずにはおかなかつた」（『校友会雑誌』第二一号、一八年二月）。高商の演者は、「嵐の中に声あり」「祖国のために」「戦



第一回巡回講演会新聞記事（『小樽新聞』1920.5.25）

後経済界に対する悲観と樂觀」「野心論」「精神文明の独立を論ず」という題名で熱弁を振るつた。なお、弁論部員は道内の各校で開かれた弁論・雄弁大会にも参加している。たとえば、一七年一〇月の農大主催弁論大会には、三浦清（「虐げられし労働者の權威」と高橋六郎（「荊の冠と黄金の苔」）が派遣された。

一九年一月には校内のクラス代表による「競弁大会」が開かれている。教員の審査団により一等となった二年の鈴木義男の演題は「建設の悩み」で、「劈頭ゾンバルト教授の言を引いて社会主義を評し、社会政策に哲学なき所以を説明し、経済生活と倫理関係に及び、社会運動は高さから低きへ下して標準化するからいけない、殊に労働運動は文化価値の大部分を労働とするから間違つてゐると、改造運動の何れにも満足せざる所以」を論じた。さらに、二年の佐藤正雄「心と心の野へ」の主旨は「人間の主我心に彩どられたる本質的不平等は組織や制度でどうする事も出来ない」というものであり、三年の深沢誠一「ベルトランドラッセルの半面を窺ひ、軍国主義の哲学的考察に及ぶ」などをみると、やはり大正デモクラシーの大きな思潮のなかに彼らも掉さしていたといえる。

なお、こうした弁論大会では痛烈な野次が飛び交ったが、このときには弁論部長の大西猪之介が「菅谷、長尾の両野次団長を指名して演壇に立たせて閉口させ、満場大喝采」となるとい一幕もあった（以上、『小樽新聞』、一九一九年一月一〇日）。

一九二〇年五月、その後の恒例行事となり、弁論部の名を北海道・東北地方に知らしめた第一巡回講演会が、小樽新聞社の後援を得て実施された。後述する大学昇格運動から派生した動きの一つとして、「参加者がいくつつかの

スピーチを準備し、これを発表することで内面的充実を期待する、かたがた学園の地域社会に負う責任をはたす――いまでいえば大学拡張講座（大谷敏治「人間 手塚寿郎」「手塚寿郎先生の追憶」が目論まれていた。「北日本の民衆をして、より高き文化に目醒ましむべく、又昇格問題を控へて意義益々深い本校を宣伝すべく、深甚の文化的使命を帯びて」とは、『校友会雑誌』第一七号（二〇〇年七月）の佐藤正雄「巡回公演旅行記」の冒頭の一節である。

弁論部長大西猪之介と手塚寿郎、西村久蔵・大谷敏治・佐藤正雄・鈴木義雄・中川久平・下條三郎・杉浦助治（以上、三年生）・林喜市（二年生）の総勢一〇名で、五月二二日、小樽を出発し、同日夜に旭川、二三日釧路、二四日野付牛（北見）、二五日網走、二六日帯広、二七日岩見沢で、同日夜帰樽という日程である。なかでも網走は地元の熱望により急遽設定された。いずれも『小樽新聞』の各地の支局と同窓生が会場の設営や宿泊の手配などにあたっている。初日の旭川の演題は、次のようなものであった。

改造と宗教

西村久蔵

近代文化の本質

佐藤正雄

入超果して憂ふべきか

大谷敏治

経済的自由主義を論ず

手塚寿郎

奴隷の道德と貴族の道德

大西猪之介

当日は「豪雨にも拘らず、実業協会の尽力に依り、中学生二百余名と田中会長を始め有志を合せ聴衆約五百余名は定刻前より詰掛くる盛況」〔『小樽新聞』、二〇〇年五月二四日〕であった。「手塚先生はアダムスミスの富国論の原書第二巻を御持参での大演説。内容が理解される為のものではなくて、科学の深さを痛感せしめる為の示威的な演説であり」、

大西に至つては「豊富なる思想と該博な見識との縦横の交錯は、五百の聴衆の心を確乎と捉へて、一時間、人々はエクスタシイのクライマックスに迄つれられて仕舞ふ」（佐藤「巡回公演旅行記」という状況だった。各会場で登壇する学生は交代するが、大西・手塚は連日の登壇であり、しかも演題が毎回異なるのも驚異的である。

当事者にとつても、各地の大歓迎と聴衆の歓喜は「予期以上の効果」であつた。たとえば、佐藤は、網走からの移動中の列車のなかで聞き取つた材木商の会話——「商売なんて日ふものには学問なんか要りやしない。読んで書けりあたくさんで、あとは腕一つだと思つて許りぬましたが、さうぢあないですね。どうしても学問しなくちあいけない。商売にだつて学問は要るつていふ事を痛切に感じました。さうです。どうしたつて学問が要るですね。昨夜つくづくさう思つて、ほんとにこれからでもいゝ、勉強しやう、学問がなくちあ大きい商売はできないと思ひましたです。いや全くです。全く昨夜の演説には感心しました」——に感激し、「僕達の旅行の目的はこれ一つでも十分に達せられてゐる事を立証し得る」とする（以上、「巡回公演旅行記」）。

緑丘吟社

小林多喜二や伊藤整の入学前、小樽高商俳句会が全盛を迎えていた。樺太大泊中学出身の松原地蔵尊（重造）は、小学校時代から俳句に親しんでいたが、一七年四月、小樽高商に入学し、「生れて始めての寄宿舎生活に入つたのとて兎角しづ心なく、そわそわして居て凡ての事が手につかないのみならず、会計学とは会計整理の法則及び……等いふものを毎日無暗につめこめられるので、プアな頭は更にプアになつた」。それに発奮し、「仮令一人でも、二人でも一緒に集て土曜日の晩なり、塩せんべいも齧り乍ら話し合たり、句作して見たいものだと思」い、「蛙の飛び込む音に凝乎と耳を敬てる人に」と題した文で校内の有志に呼びかけた（『校友会雑誌』第八号）。これが、小樽高商俳句会（緑丘吟社）結成の発端となつた。

地蔵尊の呼びかけを待ち受けていたように、学内の愛好者が集まり、三〇名近くとなった。幹事役は地蔵尊と同級生の竹田久作と比良暮雪である。暮雪の回想によれば、「毎月の例会は勿論、課題を廊下つきあたりの掲示所に、又合併講義中に廻覧紙を飛ばしたりして集句につとめ、幹事が交互に熱心にプリントして互選をする」という活動を繰りひろげた。国松豊・寺田貞次・小尾範治・石橋哲爾らの教員も参加した。そして、「名実とも全道に知られるようになり、学問そっちのけの熱心さで殆ど毎土曜日、寄宿下宿句会等にかけてずりまわり、校内関係ばかりでは満足出来ず、打揃って市井の句会に顔を出す」という入れ込みようだった。

この隆盛ぶりにさらに拍車をかけたのが、俳句の巨星高浜虚子の長男年尾が小樽高商に入学したこと（一九九年四月）、虚子が来樽（一九九年一月と二〇年一月）したことである。暮雪は、「虚子氏渡道は高商俳句会を尋ねるのが主目的だったので、私達は五日月に暈かきのかかっている晩、正法寺に於て氏の歓迎会を開催して全くのぼせ上がった思いであった」と述べる（以上、「緑丘吟社を憶う」『緑丘五十年史』）。暮雪の文にある年尾らの代表句を掲げよう。

| | |
|----------------|-----|
| 鳥渡り燈台の子等淋しからずや | ゆたか |
| わが櫓の馬が大きく町かくす | 年尾 |
| どこか角の新樹の記憶兜町 | 地蔵尊 |
| みちのくの雪なほ深し桜餅 | 迷人 |
| 雪解街に靴ぬくもりて重きかな | 磊石 |
| 芝原のいづちともなく囀れり | 暮雪 |
| 毛虫焼く火屑に萎えし草の色 | 風雨郎 |
| 風や櫓と櫓と抱き生ゆ | 水味 |

初期のメンバーが卒業すると、緑丘吟社も次第に低調になっていった。

小樽の三年間

勉学に、校友会各部の活動に励む一方で、あるいは勉学をエスケープして、学生たちは小樽での青春を謳歌した。次章の時期にかかるが、一九二一（大正一〇）年四月に入学した伊部政次郎は、次のように回想する（緑丘の生活を偲ぶ『緑丘五十年史』）。

専門学校の事故、卒業後の就職という考えが入学当初から学生の頭に全然なかったということではなかったが、当今の学生のように深刻な考えは誰も持っていなかった様だ。一、二学年の間は当時の高等学校の学生の様なゆつたりした気持でよく遊び、よく学ぶ楽しい学生生活を送った。

一年間は第三寄宿舎（文行寮）で寮生活を楽しんだ。……降りる時は楽でも昇っては相当大儀だったが、よく地獄坂を降りて街へ遊びに行った。冬の夜更けに坂を昇ると、我々の下駄や靴の下で雪がキュキュと悲鳴をあげた。坂の途中で一息ついて港の灯を見下しながら遠い故郷をなつかしく思い出した若い日の感傷が忘れられない。映画では栗島すみ子が売り出しの最中であり、弁士関楓葉の活弁振り、赤のれん、高橋バー、橇馬車の鈴の音、水天宮の眺め等々、皆なつかしい思い出の数々である。

また、伊部と同級の寿原九郎も、「唯一の交通機関は夏はほろ馬車、冬は馬橇であった。寒い夜など街から街へ伝わる鈴の音は今でも耳の底にこびりついている。高商生が好んで行った肉屋は米久、ときわ、対北大戦で勝っても

負けてもメートルを上げる場所は高橋ビヤホールであった」（馬糧が唯一の交通手段であった頃）（『緑丘五十年史』）という。

開校の一年半後、地獄坂の途中に「玉の井会」という教職員・学生用の倶楽部が設置された。「元来小樽では誘惑と高価とが伴ふことなしに飲食するは不可能」という理由で、教職員有志の発起になる「高商カツフェ、高商バー」というべきもので、「毎日午後四時から十時まで開放し、和洋酒、和洋御料理、肉鍋そして罐詰、親子丼、天婦羅、それから蕎麦、汁粉、菓子、果物の類、何でも自由に取るに任せ、娯楽の為にはピンポン、将棋、歌留多、トランプ其他の舶来遊戯が沢山ある」。「無論「脂粉無し」の清浄が保たる、」とは、サービスする女性を置かないということである。教職員と学生の部屋は分れており、「鯨はこぼらずに飲める、食へる」といつつ、学校側は「生徒の此以外で酒盃を手にするとは全く防遏する方針」であった（以上、『小樽新聞』、一九二二年二月一〇日）。その方針にもかかわらず、やはり窮屈とを感じる学生は、地獄坂を下って、街のビヤホールなどに出入りすることも多かつたろう。まもなく、赤字続きで、「玉の井会」は閉鎖された。

一九一七年三月の『校友会雑誌』第七号は、「別れに臨んで」という特集を組んで、三〇人余の「卒業所感」を掲載している。ある学生は、他人からみて高商生活は「失敗的一幕」だったかもしれないが、「商業通論の何物か、銀行論の何物か、御陰様で少からぬ観念が出来、其他色々な観念が得られた様な感じがして、大分伶俐になった、高商の卒業生として一個の人間としての基礎工事は今後数年の継続的努力で出来そうな気分がする」と肯定的に評価する。別の学生も「嗚呼^あ楽しかりき、面白かりき、此三年は」という。と同時に、この学生は、「そこには意にも云はれぬ淋しさと物足りなさ^あと不安とが湧いて来る」ともいう。

高商生活を「大きな損失」であったと断言する学生もいる。「永久に回復の見込のない損失であった、自分は偽りの道に踏み迷ひ、正しい道に踵^{かか}びと焦燥^あき続け乍らも、到頭迷ひ込んだ道から脱け出る事が出来ずに、今日まで歩んで来たのであつた」と告白する。しかし、この学生も「自分の失はれた過去の三年のタイムを補償する為

めに、「二倍の努力を為さなければならぬ」という前向きな決意をもって卒業していく。

この特集のなかに色濃く流れる気分は、卒業への不安である。就職は決まっても、「此の混沌たる社会に出て、新なる心もて、そして三年間の勉強が果して生活の安定と保障とを贏ち得ようかといふ不安に駆らるゝ」と吐露する。次のような、「若き教育家」Aと「実社会に飛び出されむとする青年」Bの対話もある。

A も少しで君も若い「ブルジョワ」の一人として社会に飛び出すことになつたね。うれしいだらう。

B うん嬉しい様であるが、又大なる不安がある。

A 其の不安はどんな平凡な男でも味ふところのものだ。殊に人より敏感な頭を持つてゐる君に於ておやだ。

B 僕の不安は一風変つてゐる。常に僕はかう思つてゐるんだ。「働くのも好きが、働くなら人類生活以上の働きでなくちや名誉にならない。凡ての神聖な労力はみんなパンを離れてゐる」と。

A 何故？

B なぜつて、生活の為めの労力は労力の為めの労力でない。

A もう少し実際の凡人にも通ずる様に平易に云つて貰ひ度いな。

B つまり、食ふ為めの職業は誠実にや出来悪いといふ事さ。

さらに、Bは「墮落した社界に自分一人誠実を気取つて居るのは極めて愚の話だ。僕はパンの為に働くのであつて、労力の為めに労力するのではない」ともいう。この卒業を控えてBは、社会に貢献し、働きたいのある「労力」とは何かを模索しようとしている。別の学生は、「自分自身のアマリに見すばらしい」ことや「もう少ししつかりして居たかつた」ことを悔やむ一方で、「偽りの多い所謂社会なるものに出されるのがいやだ」と拒絶反応を示す。



「校風漫画」(『読売新聞』1916.5.5)

その混然とした思いが漠たる不安の根源となる。
小樽区の街の人々は、高商生を大事にし、優遇した。一九一六年五月五日の『読売新聞』は、「校風漫画(其六十九)」として小樽高商を取りあげ、次のように記している。

小樽ではたつた一ツの専門学校とあつて珍重がられ、大事がられる事夥しく、特に小樽の町人共はこれを世界最高の学府の如く思ひ過ごし、同校生徒とさへ見れば誰彼のけじめもなく神の如くに敬愛して、其前には随喜の涙を惜しまない位。其子孫に限らず其遠い親戚の者一人にても同校に籍を有する者があれば、一家一門の誉として天上天下に誇に足と称するほどだから、生徒は常に小樽全市の羨望の的となり、鳥なき里の蝙蝠同然、

その王侯気取の鼻息すさまじく、其暴君的権威は正に陰鬱極まる北海の蒙を啓かんとするの概がある。

全般的に誇張気味であり、揶揄たつぷりだが、小樽区民が高商生を「敬愛」し、「羨望」したことは事実であり、それに便乗して高商生の「鼻息すさまじく、其暴君的権威」を振りかざす言動もあつただろう。前述の巡回講演会における「北日本の民衆をして、より高き文化に目醒ましむべく、……深甚の文化的使命を帯びて」というエリート意識に裏づけられた高等教育機関に在籍する者の自負は、時に傲慢で鼻持ちならないものに映ることもあつたと思われる。

南亮三郎筆禍事件

一九一八（大正七）年九月二〇日、三年生の南亮三郎は「母山学人」名で『小樽毎夕新聞』に「社会主義者を檢舉する前に」と題する一文を寄稿した。同級生の湯川励の回想によれば、「当時米価が暴騰し、富山県の主婦達の反對運動が全国に拡大した事件に、関連したものであった」（『南君と私』、『南亮三郎先生追憶集 わが生はゞ人口』の学に明け暮れて、一九八六年）という。米騒動に触発されて書いた体制批判の文章が社会の安寧秩序を紊乱するものとして、南は『小樽毎夕新聞』の二人とともに新聞紙法違反で起訴された。この「小樽毎夕高商生筆禍公判」を報道する一〇月一六日の『小樽新聞』によれば、南は「平素学業に勉励し、成績優良にして、生徒間にも人望あり、来春卒業後の就職等に就きても頗る囑望され居る者」で、一五日の小樽区裁判所には「早朝より同級の学生六七十名及び同校教授連数名傍聴に来た」が、傍聴禁止となり、公判が進められた。生徒監の木村善太郎が証人として証言している。この第一審は南らに無罪判決を下したため、検事側が控訴し、一月二〇日、札幌地方裁判所で公判が開かれている（やはり傍聴禁止）。罰金四〇円の有罪判決となった。

学校側は停学処分としたものの、「渡辺校長が南君の将来を惜しまれ、復学と言う事になり、一年遅れて」（湯川「南君と私」、一九二〇年三月卒業し、東京商科大学の第一期生として入学、その卒業後は母校の教壇に立つことになる。この事件には南の社会問題への関心とジャーナリスティックな資質がうかがえる。それは学生間では突出したものであったとはいえ、卒論テーマの推移からみると、次第に高商生も敏感に社会運動や社会問題に反応しつつあったといえよう。

第五節 第一次大学昇格運動

高等教育機関の拡張へ

一九一八（大正七）年二月六日、大学令と新しい高等学校令が公布された。それは、「森文政期に本格的に着手された近代学校制度の形成の努力は、三〇年余に及ぶ紆余曲折を経て、ついにその戦前期における最終的な到達点を見出した」という意味をもつ。ほぼ同時に原敬内閣によって策定された「高等諸学校創設及拡張計画」が文部省から発表され、そこには東京高等商業学校の東京商科大学への昇格と、七つの高等商業学校の新設（名古屋高等商業学校については、すでに決定済み。福島・大分・彦根・和歌山・横浜・高松・高岡）が含まれていた。「実業の時代」

「企業の時代」を迎えて進学需要が高まる一方の実業専門学校の拡充（以上、天野郁夫『大学の誕生』下）の一環だった。高校や専門学校の場合、かつての小樽がそうであったように、創設費は各地元などの寄付金に多くを負っていく。

高等教育機関拡張の直接の理由は、文部省自身の認識によっても、「生徒収容力ハ毎年志願者ノ一部ヲ収容シ得ルニ止リ、残余ノ多数ハ激甚ナル競争試験ノ結果、幾度カ其ノ入学ヲ阻止セラレ、数年間ヲ空費シテ後、漸ク其ノ志望ヲ達シ得ルカ如キ惨澹タル状況ニアリ」というものであった。人材の養成は依然として「国家ノ須要」に応ずるものであったが、実情としては「拡張スヘキ教育機関ノ種類並拡張ノ程度ニ就テハ、其ノ収容力不足ノ現況ニ照シ、卒業生需要ノ趨勢ニ鑑ミ」（以上、「高等教育機関拡張計画」、倉沢剛『続学校令の研究』所収）とされた。つまり、高校が一〇校に對して、実業専門学校は一七校の増設（高等工業六校、高等農業四校、高等商業七校）が想定されたのである。

世論もこれを歓迎した。一八年二月二七日の『東京朝日新聞』社説「高等教育機関増設」には、「国家の元氣と国民の實力を養ふ教育機関は、更に一層の急要にして、須臾も之を疎かにす可らず」とある。また、一九年一月九

日の同紙に、佐野善作（東京高等商業学校長）は「商業教育奨励」と題した文を寄稿し、「此千載一遇の好機を逸せず、大に商業教育を奨励し、国際貿易場裡に多数の人材を供給し、以て平和の経済戦に弱者とならぬやう努力するのが、刻下の急務である」と論じている。

「脅かされつ、ある緑ヶ岡の学園」

こうした日露戦後につづく第一次世界大戦後の高等教育機関の拡張に対して、ほぼ土台が固まり、新たな段階が展望できる位置に進み出ていた小樽高商は、大学への昇格運動という展開をみせる。

大学令によって単科大学昇格への制度的障害が取り除かれると、全国の官立実業専門学校や高等師範学校で、一斉に大学昇格運動が巻き起こった。一九一九（大正八）年前後、「実業専門学校では東京・大阪の両高等工業学校や秋田の鉱山専門学校、神戸・小樽の高等商業学校、さらには東京・広島の高師範へと、昇格を求める運動は一挙に広がり」、対応を迫られた政府では、「東京・大阪の両高等工業学校、神戸高商、東京・広島の高師範の五校の大学昇格を認め」（『大学の誕生』下）るなどの計画で打開を図ろうとした。

小樽高商における第一次の大学昇格運動の背景には、こうした高等商業学校増設から導かれる危機感があった。



武田英一

「商業学」の武田英一は『校友会雑誌』第一六号（一九二〇年六月）に寄稿した「脅かされつ、ある緑ヶ岡の学園」のなかで、「従来の同格の四高商が十二高商に増加するのである。此意味に於て稀少価値は少くとも三分の一に減する」として、「緑ヶ岡の我学園の前途を想像すると、頗る不安に堪へざる者がある」と述べる（四校とは、小樽・山口・長崎・大阪市立）。この文は同窓生に向けて書かれたもので、「本校は声価を揚げ、名声を十分に伝するの必要があ」り、

そのために「六百の卒業生諸君、五百の在校生諸君。自重せられよ。而して自己生存の為、奮闘努力せられよ」と呼びかける。

小樽在任の卒業生三田村俊雄は、より深刻に「高等商業学校の増設計画は、緑陵平和の学園に一大脅威と不安と動揺とを与へ」と述べる。なかでも「増設せらるべき鶏群に甘んじて伍するの勇氣は到底我等の有せざる処」と、新設される高商への強いライバル心を燃やす（同窓生諸兄に申上候）『校友会雑誌』第一八号、二〇年一〇月。

また、東京商科大学に在学中の卒業生郡菊之助も、二つの「緑ヶ丘を脅しつゝある問題」を指摘する。一つは前述の武田のいう「母校の稀少価値の問題」、もう一つは「緑陵出身者が大学程度の学校への入学難」である。前者の克服について、郡は「緑陵の価値を其の稀少価値の減少を償うて余りある^だだけ増大すること、つまり「少くとも新設高商と多分の懸隔あるだけ、又其追従を許さぬだけ、母校を特色づけ、価値づける」ことを提言する。その具体例の一つとして、北方という地域性に着目して、郡が「北日本及西^{シベリア}比利亞の組織的研究と発表」をあげているのは興味深い（『緑陵寄語』『校友会雑誌』第二号、二二年七月）。

こうした危機感を生み出す要因の一つは、前述したような教員陣の相次ぐ転出や退官という事態であった。幸いに補充される教員陣に優秀な人材がそろっていたために、小樽高商の教育・研究をめぐる環境や条件はその後も遜色ないものとなった。とはいえ、一時は転出・退官者の連続に加え、新設される高校・高商にさらに人材を引き抜かれかねないという懸念に脅かされるところがあっただろう。

ところで、大学への昇格運動はこの第一次につづき、一九三七年の第二次、四六年の第三次と再燃するが、その第二次・第三次の運動の際に第一次が回顧される。それによれば、「この問題の最も熱心な先導者は大西教授」であったという。一九一七年八月、欧州留学から帰国した大西猪之介は、前述のように、一八年秋、「神戸高商の昇格に刺激」され、他高商之大学昇格が実現すると、「良教授の中央異動が行はれ、質的に低下する」という論拠で、小樽高

商の大学昇格を先導したという。一年生が運動の中心となり、上級生や同窓会に働きかけた（以上、「運動の歴史」 先輩西村氏語る「『緑丘』第九九号、三七年四月二九日」。その具体化が、次の動きだろう。

大学昇格運動の惹起

一九一九（大正八）年二月九日の『小樽新聞』は、「小樽高等商業学校の学生間に大学昇格の運動が突如として起つた」として、六日夜の学生会の様子を報じている。「三年井上旨君の開会の辞あり、卒業生湯本氏を座長に推して数番の演説があり、宣言及び理由書を三年の大村君が朗読して満場賛成の声を挙げ、三年藤居君の閉会の辞で散会した」という。その宣言とは、「吾人は大正九年四月一日を以て本校の単科大学に昇格するの目的を達成せんことを期す」というもので、卒業生一同・在学生一同の名前で決議された。

その理由の第一から第四にあげられるのは、北海道経済・日本経済界にとって小樽高商が「特殊の施設を有し、他の追従を許さざるものある」という観点から、商科大学への昇格の資格と必要を強調するものである。しかし、これらは他校の昇格運動でもそれぞれ力説されるものであり、決定打にはならない。

理由の第五に掲げる、「今回の高等商業機関の増設は、邦家の為^{まこと}に慶賀すべきことなりと雖も、若本校をして現状維持に止めんか、従来生徒の大多数を本道以外に求めたる本校は、新たに設置せらるべき数校の影響を受け、優良なる入学志望者の数を減じ、将来の不振を招き」かねない、という前述の「脅かされつ、ある緑ヶ岡の学園」と通底する危機感が、卒業生や在校生を昇格運動に一挙に突き動かしたといえる。

第六の理由は、新学制案では、高等学校・大学予科が中学四年修業生からの入学が認められるのに対して、高商を含む実業専門学校は中学五年卒業生からの入学のままとする、「本校入学者は其の質自ら低下するに至らん」というもので、ここでも危機感を訴える。第七の理由は、東京高商の商科大学への昇格にともない、従来の専攻部と

の連絡が途絶える恐れ、あるいは「本校は大学予科たるの觀を呈し」、存在意義を失いかねないという恐れをあげる。最後に、これらを総括するかたちで次のように論じている。

之を要するに、我が校をして単科大学に昇格せしめざらんか、先づ学生の素質を不良にし、次いで卒業の資格を低下、本校年来の光輝ある歴史と現在の意義を没却し、従来相拮抗して下らざりし他校の後塵を拝するの止むなきに至り、延いては小樽区並に本道諸賢の熱烈なる期待に反する所となるべし、是れ吾人の痛恨に堪へざる処なり、豈夫れ黙して本校の衰頽を座視するに忍びんや、敢て天下に呼号して、此に其の昇格を熱望する所
以なりとす

高等教育の規模が拡大するという大きな流れのなかで、小樽高商が現状のままでは「学生の素質を不良にし、次いで卒業の資格を低下」させ、「他校の後塵を拝するの止むなきに至り」かねないという危機感・焦慮感が急速に高まり、大学への「昇格を熱望する」ことになったといえよう。

武田英一によれば、他校に伍して「小樽高商でも、委員が上京して、当時滞京中の渡辺校長に懇談するやら、毎日学校で職員生徒が相談するやら、公会堂で公開演説を行ふやら、上へ下へと相当騒いだ」という。それでも、授業を休止することなく、「学校の秩序は整然として維持されてゐた」（「緑丘への追憶と希望」『緑丘』第九四号）。また、卒業生の松田新は、「学生は町で演説会を開かうと云ふし、校長の立場を考へねばならん、板挟みになつてね、それから何時の間にか、内容充実に移つて行つたんだ」（「先輩座談会」、同前）と語る。

小樽高商は山口・長崎両高商に先立ち（両高商もやや遅れて昇格運動を展開する）、神戸高商などに伍して昇格運動に名乗りを上げた。神戸高商などと比較すれば精一杯の背伸びの感はあるものの、小樽高商が創立から一〇年を

経ぬうちに大学への昇格を新たな目標に掲げたことは、学校内に教育・研究面での充実感が高まり、先輩校である山口・長崎両高商と肩を並べ、凌駕しつつあるという自負が育ってきていたことを示そう。教育面では、東京高商専攻部への進学実績や就職実績などが、この自負を支えていた。

渡辺校長の対応

この卒業生・在学生らによる昇格運動について、渡辺校長はどのような対応をとったのだろうか。手塚寿郎によれば、同窓会から舞い込む多数の電報に「弱つて居られた」(先輩座談会)という。一九一九(大正八)年四月二七日の『小樽新聞』に、渡辺校長の次のような談話が見出される。

小樽高等商業学校は過去八年間を専門学校として過して来たが、欧州戦乱を一区切として今後の十年は専門学校として甘んずる事は出来ない、戦争によつて欧州の進歩せる事は実に意外であるから、之に適應するにはどうしても大学にして最高の教育を施さなければならぬのが、所謂世運きすうの帰嚮ききやうである。

併し、学校長としての我輩は自分の口から敢て昇格を運動し、若しくは希望するとは言はない、日外いつせやも話した通り、当分は内容充実に全力を注ぎ、大学の冠を得ると否とは文部省の方針に任せるのが、職責上至当な遣り方である。

前半では、まもなく創立一〇年を迎える小樽高商の積み上げてきた実績に自信をもち、次の一〇年に大学への飛躍を図ることを「世運の帰嚮」とする。それは渡辺校長の偽らざる願望であつただろう。さらに、「尚ほ将来大学となつても、北海道大学と何等関係なく、単科大学となり得る」という見通しを語っていたことは、四半世紀後の新

制大学発足に際しての単科大学としての昇格を見事に予測しているといつてよい。

この談話の主眼はもちろん後半にある。すなわち、在学生や卒業生の昇格への希望との板挟みになりつつも、学長という「職責上」の立場から「当分は内容充実に全力を注ぎ」、昇格運動には関与しないという姿勢の表明である。昇格への慎重姿勢は持論であり、教職員や学生にも伝わっていたであろう。「日外も話した通り」とあるのは、おそらくこの年の二月一日の紀元節での訓示を指す。拙速な昇格の前になすべきこととして「内容充実」を求め、その具体案として「拓殖経済貿易科」の設置を提言する。

将来必ず実現しなければならぬと思ふのは、本校に拓殖経済貿易科を新設する事である、全国を通じて此学科を置くには本道が最も適当なる事は、本道自身拓殖地たるのみならず、樺太並に西比利亚^{シベリア}沿岸を控え、好個の位置を占むるからである、之は本校として必要欠くべからざる施設なると同時に、大学昇格の基礎となるやも知れぬ重要問題である

残念ながら、「拓殖経済貿易科」構想については、これ以上のことは不明である。後述する「専攻科」としての独自の構想か、本科と並列する別科としての構想か、判然としない。ただ、先の郡菊之助の提唱する「北日本及西比利亚の組織的研究と発表」という研究方向の発想に近いものであろう。渡辺校長の転任にともない、この構想は消えてしまったようである。

渡辺校長は、先の談話につづけて、卒業生が熱心に昇格を希望するのは当然であるとしつつ、「只在在校生が此運動に参加して学科を粗略にするやうの事あつては、校長として之を看過する事は出来ぬから、大に戒心してゐる」とも述べ、実質的に学生の昇格運動にブレーキをかけていることがわかる。これに関連して、一九二二年卒業の相沢

正美は、在学中に惹起した昇格運動に対する渡辺校長の対応ぶりについて、次のように記している（「想い出を辿って」『緑丘五十年史』）。

大正八年東京高商が東京商大（現一橋大）となり、次いで神戸高商が神戸商大（現神戸大）となるに及び（神戸商大への昇格は一九二九年——引用者注）、全国の官公立専門学校は一斉に起つて大学昇格運動を起こし、中には同盟休校の拳に出ずるものもあつて、文部省の頭痛の種となつたのである。燃えさかる火は母校にも及び、時の三年生（現東外大教授大谷氏等のクラス）を中心に檄を飛ばし、口火を切つた。かくて代表数名が渡辺校長室を訪れ、小樽高商昇格の必要性和その運動を説くや、渡辺校長は「諸君の意図はよく了解した。他日若し本校をさしおいて他校が大学となるが如き事態が起らば、老いたりとも雖も吾輩白髮頭に後鉢巻をなし、諸君の先頭に立ち、陣太鼓を打ち鳴らして、津軽海峡を押し渡らん」と悲壯な決意を述べられたとの事で、たちまちこの運動は立ち消えとなり、文部省に於ける渡辺校長の名声はいやが上にも高まつたといきさつがあつた。

渡辺校長は一九二〇年一〇月から半年間の欧米視察に出かけるので、このやりとりの場面は一九一九年末から二〇年初めと考えられる（大谷敏治の三年生在学は一九一九年度）。昇格運動の意図を肯定すると言明しつつ、文部省への対応を自らに一任することを取りつけることで、興奮する学生たちの氣勢を削ぎ、運動をひとまず鎮静化させる。陳情や社会へのアピールなどの直接行動に踏み出た他校と対照的な、このような穏健な手法ゆえに、「文部省に於ける渡辺校長の名声はいやが上にも高まつた」という評が生まれたのだろう。

さらうがうがった見方をすれば、こうした文部省にとって望ましい対応を、校長の主導下で小樽高商がとつたことは、後述するような山口・長崎両高商と並んで「専攻科」設置の候補にあげられることに結びついているといえる

かもしれない。自らが蒔いた種ながら、各地で昇格運動が頻発すると、手を焼いた文部省では「無謀なる昇格運動は、自他を毀^{やぶ}け、何等得る所なかるべきに付、此際関係教職員生徒等は最も注意すべし」（『東京朝日新聞』、二〇年二月五日）と警告を發していたのである。さらに、事態の収束後には、同盟休校などに至った学校の校長らを更迭するという措置もとった。文部省にとつて、小樽高商と渡辺校長の冷静な対応は歓迎すべきことであつた。

渡辺校長の老練な対応に、学生たちは簡単に煙に巻かれてしまつた。学生たちの校長に対する絶大な信頼があつたからである。したがつて、先の相沢の回想によれば、二二年一〇月の創立一〇周年記念式典で「昇格運動を全面的に否定する挨拶」がなされると、学生たちは「呆然^{ぼうぜん}」とし、「完全に背負い投げを食^くわされた」ことを悟るのである。それでも、校長への敬愛は変わらない。

「本校を専門学校らしくあらしめたし」

その創立一〇周年記念式典における「式辞」で、渡辺校長は次のように述べていた（『乾甫式辞集』）。

大学令に曰く、大学は學術の理論及应用を教授する所なりと、即ち大学の本分は理論を主として應用を兼ねるにあり。専門学校令に曰く、専門学校は高等の學術技能を教授する所なりと、即ち専門学校の職分は應用を主として理論に兼ね及ぶにあり。専門学校といふその専門の二字が此意味を表象す。理論の専門なるものはあり得べきことにあらず、理論が應用せられて始めて各種の専門は現はる、専門学校令の所謂學術技能は學術技能の理論的方面にあらずして應用的方面を云ふこと明かなり、されば大学と専門学校とは両々相並ぶべく之を譬^{たと}ふれば車の両輪、鳥の兩翼の如し、共に國家の教育機関としての最高学府にして、一は理論を主として應用に兼ね及ぶ最高学府、一は應用を主として理論に兼ね及ぶ最高学府なり。故に何れを高しとし何れを低しとする

を得ず。然るに専門学校を變じて大学に為さんとする運動は己れの本質を卑しんで他に化せんとする運動にして、世に所謂宗旨代がえをするに異ならず。国家の教育機関としては学者を作することを主とする大学も必要、亦實際家を作る専門学校も必要なり、何故に一を變じて他に化せんとするか。

渡辺の論の根底には、大学と専門学校は「其職分を異にする」ものであり、「国家はあくまでも専門学校を必要とす」という信念があった。それは、「我輩は本校を専門学校らしくあらしめたしとの希望を以て経営今日に及べる」という基本方針の堅持となり、一〇年間を経ての達成という自負と満足感をもたらした。「一ツ橋も神戸も専門学校の家系を棄て、大学系に入婿となりたる暁には、我校立たずんば我邦商業専門教育を如何にせん、我が小樽高等商業学校が応まさに活躍すべきの時は至れり」という渡辺の意気込みは、掛け値なしのものだった。

その一方で、この式辞では「専門学校として専門学校令に規定されたる精神を十分に發揮し能はず、専門学校をして十分の發展を遂ぐる能はざるが如き状態」が存在し、改善すべき点との認識も示していた。修業年限の延長を選択肢にあげつつ、「賢明なる現政府当局者は遠からざる未来に於て専門学校の位置待遇等を改めて大学との権衡を保たしめ」るだろうという、樂觀的な見通しを述べる。先の「拓殖經濟貿易科」構想に代わる「専攻科」設置案が念頭にあったのだろう。

「専攻科」設置案

一九一九年一月四日の『東京朝日新聞』は、文部省が二年度より数校の実業専門学校の大学昇格を予定していると報じた。確實視されたのは、東京高工、大阪高工、神戸高商の三校で、ほかに秋田鉱山、鹿児島高農、盛岡高農なども候補にあげられているが、小樽高商は入っていない。これらに漏れた学校は猛烈な挽回の運動を展開す

るが、小樽高商がどのような運動を展開したのかは不明である。先の相沢回想にあるような、学生と校長のやりとりは、この場面だったかもしれない。一九二〇年九月の校長の渡欧送別会についての記事に「昇格問題に影さす緑陵の校舎に」（『校友会雑誌』第一八号）という一節があり、昇格問題が校内にくすぶっていることがわかる。

再び予算案の編成期にあたり、二〇年一月二八日の『東京朝日新聞』は、「現内閣最高政策の一端として十年度より愈之^{いよいよ}を断行する事に決定せり」として、次のような記事を掲げた。

右の決定に基き大学に昇格せらるゝものは左の五校なり

- 一、東京高等師範学校
- 二、広島高等師範学校
- 三、東京高等工業学校
- 四、大阪高等工業学校
- 五、神戸高等商業学校

（中略）なお右の外

- 一、盛岡高等農林学校
- 二、鹿児島高等農林学校
- 三、小樽高等商業学校
- 四、長崎高等商業学校
- 五、秋田鉱山専門学校
- 六、上田蚕糸専門学校
- 七、熊本高等工業学校

の七校には、新に専攻科を設け、同科を卒業したるものに学士号を授くる筈なり

この続報として一二月六日の『東京朝日新聞』は「昇格第二次計画」として、「大学昇格に漏れたる各学校は修業年限二箇年の専攻科を新設し、卒業生又は大学同様学士号を授与すべく、更に各学校は順次単科大学に昇格せしめん意嚮あり」という記事を載せた。先の七校のほかに、さらに五校が追加されている。本科卒業生でさらに「特殊ノ研究」をおこなう者を進学させる「専攻科」（二年以内）の設置と学士号の授与は、いわば大学昇格の基準に達し

ない学校への融和策と観測され、かつ将来の大学昇格への踏み台となることが想定された。文部省の計画では、山口高商には「金融科」と「保険科」（定員六〇名、教授定員五名）を、長崎高商には「貿易科」と「交通科」（定員六〇名、教授定員五名）を、そして小樽高商には「商工経営科」と「経理会計科」（定員六〇名、教授定員五名）をそれぞれ設置することになっていた（倉沢剛『続学校令の研究』）。おそらく、各学校当局には事前の打診や協議があったはずである。小樽の場合の「商工経営科」と「経理会計科」は、「商業実践」などの特色ある学科目をさらに発展させる意図があったというべきだろうか。

この文部省の第二次の高等教育拡張案は二二年一〇月、教育評議会に諮詢され、五か月後に「官立実業専門学校卒業者ニシテ、特殊ノ研究ヲ為サントスル者ノ為ニ専攻科（二年以内）ヲ設クルコト」（倉沢剛『続学校令の研究』）については「可」の答申がなされる。しかし、これを予算化したものが、二二年三月、貴族院で審議未了となったため、結局、「五校昇格案」の実現は先延ばしに、「専攻科」設置案は見送りととなる。なお、この「五校昇格案」は紆余曲折を経て、一九二九年にようやく実現する（神戸高商は神戸商業大学となる、「大学の誕生」下）。また、二二年八月に文部省は「専攻科」に代えて「研究科」を設置する新昇格案を発表するが（『東京朝日新聞』二二年八月二四日）、これも実らない。

第二次高等教育拡張案に関する新聞報道は、除外された学校のさらなる昇格運動や専攻科設置に止められた学校の復活運動を激化させ、上京した学校長や学生らの議会や文部省へ陳情合戦が繰り広げられることになった。また、文部省の独走や原内閣への反発を招き、事態を一層紛糾させることになる。

「小樽高等商業学校昇格期成会」の発足

さかのぼって小樽高商の昇格運動の経緯をみよう。一九一九（大正八）年二月の学生大会において昇格運動の狼

煙があがったが、一旦収束する。その後、文部省の予算案編成に向けて運動を具体化するために、同窓会が中心となつて、一九九一年一月三十一日、「小樽高等商業学校昇格期成会」を発足させている。おそらく学校側は、これを静観している。その本則第三条で、「本会ハ小樽高等商業学校ヲシテ商科大学ニ昇格セシムルヲ以テ第一目的トシ、兼テ同窓生ノ親睦並ニ結集ヲ計ルヲ以テ第二目的トス」と規程された。この第一の目的の達成のために、会員の醸金と有志の寄付により基金を作るとする。会員は一口百円を「毎年其五分ノ一宛^ずヲ持込ム」（以上、『校友会雑誌』第二号、二一年七月）。第一回払込みは二〇〇年三月末日までとした。この第一次昇格運動は在學生と卒業生の間に限られ、小樽区・区民は積極的に関わっていない。

さて、一九二〇年二月九日の『小樽新聞』は、後述する渡辺校長の退任・転出という事態に「高商生の留任運動」が起きていると報じる。その記事中には、學生たちが「他校の昇格運動騒ぎを他所^{よそ}に、「昇格などは未だ望んで求め得られるものではない、物には順序があるから、専念内容の充実を期さねばならぬ」と考えているとある。その一方で、依然として昇格への願望も根強く存在していたようである。二二年二月一〇日の『読売新聞』には、「小樽高商學生は九日昇格問題に就て學生大会を開き、各級から級長副級長以下四名の実行委員を挙げ、近く帰朝する筈の渡辺校長に建白、昇格に関する一切を委ねる事を決した」という記事が載る。この記事によれば、學生が独自の運動を展開するというより、渡辺校長への「建白」と「委任」とあるように、学校からの文部省への働きかけを期待していたことになる。

二二年二月二〇日の『小樽新聞』は、「高商の昇格運動に就て」として、卒業生と思われる一委員の次のような談話を掲げる。

三年前初めて運動を開始してから、鳴かず飛ばさずで世間から其の意気を疑はれてゐますが、我々は往々他に

見る如き盲滅法な軽挙盲動はとりたくないものであつて、具体的運動は是を校長はじめ初学校当局に一任し、我々は只管ひたすらに内容の充実と昇格基金調達に多大の犠牲と努力とを払つてきつゝあつたのです、熱が無いのではありません……私達は只空騒ぎの爲めの熱は持つて居らない丈です、足場が固まり、方針が確立した時に、全校生の今迄抑圧して来た熱は勃発するものです

おそらく前述した渡辺校長の方針に従つてだろう、「軽挙盲動」は慎み、静かに「内容の充実と昇格基金調達に多大の犠牲と努力とを払つてき」と回顧する。「三年前」とは、一九年二月の学生大会における昇格決議を指すはずで、足かけ三年という意味だろう。昇格資金については、二二年一〇月までに一一五口の申込みがあつた。二二年一〇月までに実際に払込みとなつた金額は、一二一〇円五〇銭にのぼつた〔校友会雑誌〕第二七号、二二年一〇月。その後昇格期成会は存続するが、最終的にどのような結末を迎えたのかは不明である。

「内容ノ充実」へ

一九一九（大正八）年一〇月発足の昇格期成会細則の第三条では「本会基金ノ処分」について、次のように規程してゐた〔校友会雑誌〕第二二号、二二年七月。

- 一、小樽高等商業学校教授（助教教授講師ヲ含ム）ヲシテ海外ニ留学セシムル事
- 一、必要アリト認ムル場合ハ、同校教授ヲシテ各地ヲ視察セシムル事
- 一、各種図書ヲ購入シテ同校図書館ニ寄贈シ、其ノ充実ヲ計ル事
- 一、同校内ニ研究室ヲ設クル事

一、小樽高等商業学校教授及同窓生ノ学説及研究論文ヲ刊行シ、広ク之ヲ発表スル事

一、本学生会館ヲ小樽区内ニ建設スル事

一、其他同校ノ内容ヲ充実セシメ、会員ノ向上ヲ期スルニ必要ナル施設ヲナス事

すでに昇格期成会の発足時点で、渡辺校長の昇格への慎重姿勢が表明されていたはずで、それに沿ったかたちで、基金の使い道として、教育・研究面での「内容ノ充実」を着実に実行するための諸方策が考慮されている。

昇格運動の実現性が乏しいと判断されると、それに注がれるエネルギーは「内容ノ充実」を合言葉に、学内を緊張させるとともに同窓生の母校支援を強く促すことになった。先の三田村の記すところによれば、「母校に在りては、校長諸教授の学科の改善と共に、専心学生指導の衡に当らるし、他方市中或は道内各地に出張講演を試み、以て母校の真価を一般に領知せしめ、在校生諸君は冗費と時間の空費とを節せんが為め、若き者の求むる花やかなる陸上運動会をすら昨年来中止し、或は臨時講義の爲め来校の教授を煩はして一般講演会を催し、会券を売つて得たる処を内容充実資金となすが如き、総て真摯なる努力ならざるは無之候」という。こうした学校側の努力を受けて、「我等卒業生亦黙するを得ず、東京其他各地支部諸兄の援助により、昨秋来、内容充実資金の募集に着手」する。

「企業実践」の科目新設と石鹸工場の建設、弁論部の巡回講演の開始などは、この「内容充実」に向けての意味も込めて実施されたものだった。すでに、一九一九年一〇月には東京高商教授三浦新七の集中講義にあわせた講演会の収入百円が、また二〇年一月の国松豊・高島佐一郎の講演会の収入二一九円余が、「内容充実資金」として校友会に寄付されていた（『校友会雑誌』第一六号）。さらに、一般区民向けに継続的に開催された学術講演会の収入や一九年度卒業生名義の寄付、学生の遺族や有志からの寄付もあり、一九二〇年末には九四七円余に達した（『校友会雑誌』第一九号）。

二二年一〇月、「臨時商業師範科」が設置された。次のような設置理由である（庶務課「諸規則制定改廢綴」）。この試みも「内容ノ充実」の一環だったと考えられる。

近年經濟界好況ノ結果、人材ハ実業界ニ集リ、教育界ニ於ケル人員及ヒ人材ノ欠乏ハ実ニ其極ニ達セリ、然ルニ今ヤ經濟界ノ不況ハ人員ノ過剩トナリ、教育界ニ相当ノ人材ヲ招致スルニ好機會ヲ与フルニ至レリ、仍テ爰ニ本研究科ヲ設置シ、現時不足ノ実業教員ヲ補フ途ヲ講セントス、而シテ別ニ之ヲ費用ヲ要セス、本校經常費ノ範圍内ニ於テ別紙規程ノ如ク教員タルニ必要ノ学科ヲ研究セシメ、以テ其目的ヲ達セントス

学科規程によれば、「本研究科ハ修業年限三年以上ノ高等商業学校卒業生ヲシテ商業教員タルニ必要ナル学科ヲ研究セシムルヲ以テ目的トス」とある。研究期間は特に定めず、「教育学及教授法」のほか、「商業通論」「経済学」「商業英語」などの学科目の中から二科目以上を研究させるとした。この「臨時商業師範科」は、その後も高商期を通じて存続したが、実際にどの程度の学生が在籍し、学識を深めた商業教員として送り出したのかは不明である。

創立一〇周年記念式典

一九二二（大正一〇）年一〇月、創立一〇周年記念祭が実施された。七日午前中には図書館で記念式が開かれ、午後からは一般区民に校舎が公開され、商業実践室・化学実験室のほか、各学年によって裝飾された教室（二年生は「幽郷」が人気を呼んだ。校庭では、剣道・柔道・相撲・庭球・弓術などの校友会各部の試合が繰り広げられた。八日は花園公園グラウンドで運動会が、日曜日には緑町の企業実践工場が公開され、作業風景のほか、石鹸の廉売もなされた。一万余の入場者があった。また、花園グラウンドでは野球大会が、また同窓会大会も開かれた。

『小樽新聞』は、一〇月七日号を「小樽高等商業学校十周年記念号」として発行した。「北日本の文化建設に榮えある使命を有つ小樽高商の／生れ出づる悩みから歓喜溢る、今日までの輝ける記録」という見出しで、沿革から現状、「創立苦心談」（湯原元一・渡辺兵四郎・渡辺龍聖）を紹介する。商品実験室システムテイクについては「商品鑑定キャブテンの科学研究」、商業実践科については「産業界の統率者としての頭腦の修養と共に／極めて系統的な擬営実践」などという具合である。そして、「小樽高商十周年祝典」と題した社説では、「今日札幌の北大と対峙して本道の二大学府たる資格と内容を充実することの出来た」ことを祝し、「学校当局は勿論、小樽区民も協力して、眞の北日本に於ける文化醸成の中樞機関とならねばならぬ。此責務は、決して創業以来の苦心と努力に劣るものでない」と論じた。

これに呼応するように、渡辺校長は一〇周年記念式の式辞の最後で、「南北樺太の發展、東部西比利亞の開発と共に逐次日本海の繁榮も見、我小樽港が羅馬時代のヴェニスたるの日遠きにあらずと信ず」と述べた。さらに「東漸の文化と北漸の文化とを結合咀嚼し、茲に新なる新文化を生み、新潮流を起して、永劫の地を征服するは我國民の使命なり」として、そのための「文化潮流の足溜りとなり、策源地となる」のが小樽港であり、その小樽にある「我校の将来は譽あるべし」（『乾甫式事集』）と予言した。

渡辺校長の退任

小樽高商に次ぐ第六高等商業学校の創設が大隈重信内閣のもとで内定すると、一九一七（大正六）年夏ころには名古屋市は誘致の陳情運動に乗り出していた。

松山や静岡との誘致合戦の末に、名古屋に設置することが決まるが、その際に文部省から意見を求められた渡辺龍聖が即座に名古屋と答えたことが、決め手になったという。そして、ここでも、かつての小樽のように、愛知県や名古屋市は多額の寄付を求められた。一九一八年度から五年間の創立費総額一〇六万円の三分の一以上を地元が

負担したという。

名古屋高商の開校準備が進捗すると、文部省はその創立委員長に渡辺を任命した。「渡辺の名高商創業は、すでに創立前のグランドデザインの段階から始まっていた」（以上、堀田慎一郎『名古屋高等商業学校』、「名大史ブックレット」10）のである。

一九二〇年三月一〇日の『小樽新聞』は、「転任説を打消して もう行つてもよいとの去状さきじょうなら不服もないが 渡辺校長曰く」と報じている。「創立委員になつてみると、マサカ新設校に本校の教授を奪はれる事もあるまいから承諾したので、自分としては未だ本校を去る時機ではないと思つてゐる、アレは全く誤聞だよ」と否定したというが、実際にはすでにこの時点で名古屋高商校長就任について、文部省と渡辺の間には暗黙の了解があつたとみるべきだろう。文部省、特に当時の文相岡田良平は、渡辺の小樽高商で發揮した教育行政・学校運営の手腕を高く評価していた。

おそらくそのことも関連して、一九二〇年一〇月から二一年四月までの渡辺の渡欧があつたと推測される。アメリカ、イギリス、ベルギー、フランス、ドイツの第一次大戦後の教育視察を通して、渡辺は「外国の教育に対する解釈は、人を作ると云ふ点にあるので、我国の如く学校で学科目を教授する事を教育の全部なりとは解釈して居ない。随つて其学校教育の仕方しかたも我国とは大に趣を異にす」（他山の石『小樽新聞』二二年四月一五日）などの着眼点を持ち帰つた。また、欧米の最新の高等商業教育の現状も学んできただろう。推測を重ねれば、名古屋高商という新設校を舞台に、こうした新たな教育への抱負の実現を求めたといえようか。

なお、渡辺に先立ち、二つの学校の新設に関わつた校長として、小樽高商と同時に開校した米沢高等工業学校（現在の山形大学工学部）の初代校長大竹多気（東北帝国大学教授）がいる。大竹は、米沢高工の基礎を固めたあと、一九一五年、桐生高等染織学校（その後、桐生高等工業学校、現在の群馬大学工学部）の初代校長に転任する。大

竹は繊維工学を専門とするが、学校運営の力量も文部省は見込んだのであろう。

二十一年二月二日付で、渡辺に「小樽高等商業学校名誉教授」の称が授与された。小樽高商校長として、「十年余専心校運ノ伸暢ヲ図リ、幾多有為ノ人材ヲ教養シ、以テ同校今日ノ隆盛ヲ見ルニ至ラシメタル功績、洵ニ顕著ナル」(「任免」、国立公文書館所蔵)という理由である。

名古屋高商校長として

帰国した二十一年四月に、渡辺は名古屋高商の校長事務取扱に就任している。その直後、二十一年五月から名古屋高商では授業が開始された。小樽高商校長の退任、そして名古屋高商校長への正式の就任は二十一年二月二十八日であった。

渡辺校長の渡欧中に名古屋高商への転任が報じられると、学生たちは「この校長を失つては」と、留任運動を展開する。二〇年二月九日の『小樽新聞』の記事には、「教職員並に生徒一同は、慈母の如く慕つて居る同氏をば他に送る事は忍び難きものがあり、且学校としても有形無形の損失を蒙る事となるので、過般来、在校生並に卒業生関係者寄々協議を重ね、且下旺さかんに留任運動を起こして居り」という記事がある。そこでは、前述したように、「昇格などは未だ望まぬ 其よりも校長が大切」という気持ちだったという。

一月十一日、渡辺校長と伴房次郎新校長の歓送迎会の席上、在校生を代表した「送迎の辞」において、越崎宗一は、「私共は校長が本校のためにお尽し下さった功績が大きければ大きい程、校長を手放したくはありません。しかしいま私どもは校長を無理にお留めしようとは致しません。私は過去の御尽力に感謝して潔くお送りしようと思ひます」としつつ、「私共には不満もあり、渡辺校長の前にいいたいことも胸に余るほど沢山あります」とも述べる。越崎自身、後日「若気の至り」で「いささか嫌味のような言葉を弄した」(以上、『郷土史的自叙伝』)と回想するが、この



名古屋高等商業学校 (名大史ブックレット10)

転任に対する寂然としないわだかまりが残ったことは事実であろう。

渡辺の求めにより、小樽から名古屋高商に転じた教員は、国松豊、高島佐一郎、石橋哲爾、小原亀太郎の四人である。校長に加え、創立期以来の主要な教員を失うことは、小樽高商にとって大きな痛手であった。この一挙の転出は、武田英一によれば、小樽高商にとってそれまでにない深刻な「大事件」であり、「学園の分解作用」を引き起こしたという。「この問題を廻つて、盛んに色々の明暗暗躍があり、表より請託が行はれ、裏より運動が行はれ、流

言蜚語が伝はり、陰鬱な月日が過ぎられた」（緑丘への追憶と希望）とあるものの、その具体的な状況や経緯は不明である。先の越崎のわだかまりも、これに関連するだろう。

さて、堀田『名古屋高等商業学校』を参照して、渡辺の着手した「名高商の教育と研究」を素描しよう。その基本教育方針は、「学生は学生らしくあること」と「学生は学生の自分を忘るるな」であったが、それは小樽における「少年紳士を以て遇する」と同義であろう。「学生らしく」とは「髪型や服装、言葉使い、行動などが学生らしい」という意味であり、「学生の自分」とは「入学の目的を忘るるな」という意味で、授業に欠席しないこととされた。これらは規則の制定ではなく、学生の自発性によって実現がめざされた。事実上の不文律になっていたという五分刈りは、小樽でも実践されていたはずである。『剣陵十周年史』が記す「渡辺校長のモットーたる学生らしくの趣旨は、隈なく行き渡り、頭髮の五分刈り以下は全く学生の慣習となり、注意を受くる者としてなく、其の他、苟しくも学生に相応しからざる言語動作風采等は見んと欲するも見出す能わず。日々の授業出席率は常に九十八%以上にして、全国高等専門学校中の驚異とせられ」という風景は、おそらく渡辺校長

在任期の小樽高商においてもあてはまるものだった。

教育面では、一学年では教養科目にかなりの時間を割き、二学年以降は「応用的専門的な商業科目に進む」構成で、英語を中心とする外国語科目の授業は三学年を通じて多い。特徴的な商業教育の科目として、「商業実践、商品実験、商工心理、能率研究など」があるが、これは小樽での経験と実績を踏まえたうえに、「商工心理」などの新たな試みが加わっている。外国人教師も二年目には五人を数えた。「商業実践」のための特別教室や商品実験室のほか、「企業実践」のためには印刷工場が設けられた。

創立三年目の二四年には本科とは別に、修業年限一年の「商工経営科」が設置されている。「地域の産業振興に必要な、企業経営に関する最新の学理や実験に通じた人物を養成する」という趣旨は、前述の大学昇格運動の過程で、文部省が小樽高商に設置を計画した「専攻科」（「商工経営科」と「経理会計科」）を類推させる。

研究活動もきわめて旺盛で、「実際に劍陵学園は商業経済の単科大学にあたるのみではなく、総合大学としての偉容を有する」と述べるのは、自らもその中心にあった赤松要の、名古屋高商から一橋大学に移っての評である。この「商業経済の単科大学」、さらに「総合大学」とは、小樽高商にもいくらかあてはまるとはいえないだろうか。

なお、名古屋高商の同窓会其湛会が、一九二四年、その創立と同時に結成した「名古屋商業大学期成同盟会」は、巨額の基金を集めたものの、目立った活動をしていないという。その理由の一つに、「大学は理論とその応用を研究し、専門学校は実際を主として、その結果理論に到達する」という、「渡辺校長の大学昇格に対する独自の見解」が考えられている。このことも、小樽の場合と照応している。

渡辺の名古屋高商校長在任は、一九三五年五月までの一四年という長きに及んだ。そこでも留任の懇請があった。後任となったのは、渡辺とともに小樽高商から転じていた国松豊（在任一九三五年五月～一九四五年九月）であった。

